目　次

町田久成と三井寺法明院……3
福家　俊彦　天台寺門宗総本山三井寺執事長・客員研究員

堅田藩の百姓一揆　～安永八年（一七七九）の代表越訴～……17
水本　邦彦　京都府立大学名誉教授・長浜バイオ大学名誉教授・客員研究員

［近江学研究］
生活文化の聞き取り調査、及び、仰木ふるさとカルタ制作　後編：25
永江　弘之・大原　歩

［近江学研究］

「近江の絵馬」現況調査　調査報告 2 …… 57
吉村　俊昭

近江の水をめぐる 3 …… 75
石川　亮

真野法界寺の六斎念仏
～大津市真野中村の念仏講が繋ぐコミュニティの現状と課題～ …… 95
加藤　賢治

町田久成と三井寺法明院

福家　俊彦

町田久成と三井寺法明院

福家　俊彦

Name :
FUKE　toshihiko

Title :
Hisanari Machida and Miidera Houmyouin

Summary :
Hisanari Machida (1838-1897) is known for his work in the preservation of national treasures from the early years of the Meiji Period and his research of those treasures. He was particularly dedicated to establishing museums and is perhaps best known as the first curator of the Tokyo National Museum. In the later years of his life, Machida entered the Buddhist priesthood and became a disciple of Keitoku Sakurai of Miidera Houmyouin just as such famous men as Ernest F. Fenollosa and William S. Bigelow had. In this paper I will introduce some of Machida's lesser-known achievements at Miideara.

はじめに

天台寺門宗の総本山である三井寺（園城寺）には、天台宗の開祖・天台智者大師の尊像画が数本伝来している。その一本は、最澄将来の図像を踏襲した室町時代の古画で、ここで注意を引くのは、箱書きに「町田久成寄附」と記され、町田久成の旧蔵品であった点である(1)。

町田久成（一八三八～九七年）(2)は、日本における博物館の創設に邁進し、東京帝室博物館（現在の東京国立博物館）の初代館長として博物館の歴史に大きな足跡を残した人物として知られ、「明治初期の古美術の保護と研究の先駆者」(3)と評価されている。

久成の生涯で、とくに注目されるのは三井寺山内の法明院住職・桜井敬徳（一八三四～八九年）との仏教を通じての交流である。二人の交わりは、岡倉天心をはじめフェノロサ、ビゲローへと広がり、ことに敬徳への帰依を深めたフェノロサやビゲローは仏門に入り、死後も法明院に墓所を設けるまでにいたっている。久成自身も明治二二年（一八八九）、五二歳のときに敬徳のもとで授戒、官界を辞して三井寺に入っている。

これまで久成については、彼の最大の業績である博物館創設を中心に紹介されてきたが、本稿では久成晩年の事績を跡づける作業を通じて、三井寺における町田久成について素描を試みたい。

一、町田久成の業績

一-一　薩摩から世界へ

幕末に薩摩藩主・島津氏の庶流の家に生まれた町田久成にとって、大きな転機となったのは、慶応元年（一八六五）二八歳のときに薩摩藩の若き俊英たち十五名を率いてイギリスに渡航したことである(4)。およそ二年余の滞在でロンドンをはじめ翌年四月から開催されていたパリ万博にも赴いている。明治維新へと胎動する時代にあって、西洋の近代文明を体感し、大きな衝撃と感動をうけたであろう。それはパリ万博が幕府、薩摩藩、佐賀藩に分かれて参加していた事実が象徴しているように、それまでの日本は、藩や国といった地域に分かれ、人々はそれぞれ生まれた地域の文化を生きており、国民的に統合された日本国が存在していないという事実に起因する問題意識へと久成を促したと思われる。この留学経験が久成をして西洋近代国家と対峙しうる国家としての日本、あるいは国民としての日本人を考えざるを得ない決定的な契機となったことを意味している。のちに久成がなし遂げる博物館創設という仕事と生き様を考える上でも、いわば世界の眺望を獲得していく大きな第一歩となったことは想像に難くない。

一-二　文化財保護と「模写」

久成が帰国したのは、慶応三年（一八六七）六月下旬。この年十月には大政奉還が行なわれ、時代は大きく変わる。

明治政府に出仕した久成が残した最大の業績は、もちろん日本初の近代的な博物館の創設である。その第一歩となるのが、明治四年（一八七一）の「集古館建設の提言」である(5)。この提言は「明治期における文化財保護の歴史の端緒をなすものであり、わが国における博物館建設の必要性を論理的に説いた最初のものとして極めて重要である」(6)。久成は明治初年の神仏分離、廃仏毀釈の烈風が吹き荒れるなか、「厭旧尚新ノ弊風」によって「天下の宝器珍什」といった貴重な文化財が急速に失われていく実態を目の当たりにしていた。そこで久成は、文化財は「考古ノ徴拠」であり、「古今時勢ノ沿革ハ勿論往昔ノ制度文物ヲ考証」することの重要性を説き、その対策として日本における文化財の散逸、破壊を防ぎ、保護、伝承するための博物館（集古館）の必要性を主張した。

ここで注目すべきは、一刻も早く文化財保護の対策を講じなければ、「一歳有餘ヲ打過候ハバ天下ノ古器旧物ハ大概壊滅」してしまうほど事態が切迫しているなか、博物館建設だけでなく「旧物ヲ図面ニ模写致シ羅集編成」すること、いわゆる文化

財を「模写」し、収集することを挙げている点である。その一例として伝わっているのが、「漢委奴国王」で知られる「金印」の模造である(7)。明治五年（一八七二）、旧福岡藩主黒田公が久成邸を訪れて実物を示した。久成は大いに驚き厳重に保存されるとともに皇室に奉納すべく篆刻家の益田香遠に依頼して模造品を制作したという。後述する梵鐘の模鋳や『古逸叢書』の事例を考える上でも、この時点で久成が「模写」の重要性を正確に認識していたことは特筆すべきことである。

一―三　博物館という制度の創出

久成の提言は、翌月に「古器旧物保存方」の公布として実現し、翌年に始まる社寺宝物調査（壬申検査）へと結びつくことになる。明治六年（一八七三）には、いよいよ博物館創設に向け、決定的となる上野寛永寺跡地に「大博物館建設の必要」の建議が行なわれる。大久保利通の強力な主導のもとで進められる富国強兵、殖産興業の旗印のもと久成の望む博物館への道程は決して平穏なものではなかった。それでも久成は、博物館もまた殖産興業に資するべしとの方針に、ときに抵抗しつつ、これを巧みに利用し「国策である殖産興業を目的とする内国勧業博覧会の開催と博物館建設作業を連動させ、博物館史料の確保と公開施設（博物館）の創設に向った」(8)のである。そして明治一五年（一八八二）三月、ついに博物館の開館にこぎ着け、自ら初代の館長に就任することになる。

明治政府の美術行政の柱となったのは、殖産興業としての美術工芸品の振興、美術教育制度の確立、そして古美術（古器旧物）の保護であった。ことに古美術を保護、収蔵して展示する博物館や美術館の創設、それは人々の眼差し、見ることを規範化する制度としての施設、いわば「文明の装置」を人々の目に見える形で提示することを意味していた(9)。

また、美術教育の分野において岡倉天心やフェノロサによって明治二〇年（一八八七）に設立された東京美術学校もまた博物館同様、美術教育という制度を通じて国家の成員たる新しい日本国民を創出することでもあった。

二、三井寺入寺以後の町田久成

二―一　桜井敬徳との出会い

明治一五年（一八八二）一〇月一九日、久成は突如として三月に開館したばかりの博物館の館長を辞任する(10)。そして翌年四月には、三井寺法明院の住持・桜井敬徳から八斎戒を、さらに東大寺戒壇で円頓菩薩戒を受け、仏門に入る。

明治一八年（一八八五）には元老院議員となるが、このころより久成の向島小梅の別邸には、岡倉天心をはじめフェノロサやビゲローが足繁く訪問し、敬徳も上京の折りには町田邸に止宿していたという。彼らは敬徳の説く仏教に深く関心を寄せ、ことにフェノロサとビゲローは、同年九月に町田邸において敬

徳から戒を授かり、仏門に入ることになる。岡倉天心もまた翌年五月に法明院において敬徳から授戒している(11)。

久成のもとに集まった岡倉天心、フェノロサ、ビゲロー、そして敬徳たちに通底していた意識は、やはり「日本とは」、「日本人とは」という根源的な問いかけであったように思われる。それはフェノロサが『美術真説』において「美術の制度化」として新しい日本画の創出を主張したように各々立場の相異はあるといえ、その向う方向には共通するものがあったであろう。そこで誰もが直面した最大の課題は、たとえばフェノロサの日本画にしても「明治初期においては、福沢諭吉が『学問のすゝめ』四編（一八七四年）で指摘したように、「日本には唯政府ありて未だ国民あらず」という状況にあったのだ。ここに指摘されている国家形成と国民形成のギャップこそ「日本画」が求められるゆえんであり、また、それが生み出される場だったのである。この時点では、国民は「日本画」がそうであるように未来に属していた」(12)という事態であった。まさに日本と日本人の問題が横たわっていたのである。

二-二　三井寺入寺

久成は明治二二年（一八八九）一二月一日、敬徳に従い剃髪、大乗菩薩沙弥戒を受け、出家後直ちに東京に戻り、浅草橋場の本邸と向島小梅の別邸を処分している。さらに同月一四日に敬徳が死去するや二六日には元老院を辞して三井寺に入っている。久成自身、いつごろから、どれほど仏教に関心を寄せていたのかは判然とはしないが、一貫して文化財の保護に携わってきた久成にとって、当時の寺院や僧侶のおかれた情況については多くを見聞していたと思われる。(13)

明治を迎えて政治体制が急激かつ全面的に一変し、それまで普遍的なものと信じられていた価値観が否定され、宗教的伝統や美的判断の基準も絶対的ではなくなるという大変動のなかで、誰もが一人の人間として経験できる内容だけでは、社会全体の在り方を把握することが困難な時代に生きなければならなかった。仏教の世界に生きる僧侶たちにとっても事情は同じで、久成が帰依した敬徳も同じ問題を抱えていたであろう。

それは敬徳が、明治一九年（一八八六）に『義瑞和尚行業記』(14)を版行したことにも顕れている。法明院の開祖・義瑞（一六六七～一七三七年）は、幕藩体制下のもと安定期を迎えた十八世紀初頭に仏教の復興改革を訴えた僧で、敬徳自ら版行の趣旨を記した後記に「源頭に活水有り、則ち下流自ずから清し、津路誤たず、則ち彼岸に達す可し、我山律幢之再振、義瑞和尚の主唱と為す…（中略）…復古之業、殆ど其功を全うす」と記し、法明院創建の意義を「律幢之再振」、「復古之業」と捉えている。敬徳自身やはり明治初期の混迷の時代にあって、本書を公刊することにより自らの法脈の「源頭」である義瑞の足跡を振り返り、再認識を促すことによって当時の仏教の存在、その行く末を人々に問いかけたかったのであろう。さらに久成との関係で

注目されるのは、版行に当たって久成が印刷代金を立替えたと推測される点である(15)。

また、久成自身も『敬徳大和上略伝』を著わしている。本書は敬徳没後二年、三回忌に当たる明治二四年（一八九一）一二月一四日にあわせて刊行されたもので、敬徳を「先師」と呼び、自らを「小弟」として敬徳の業績が宣布されることを願っている。

久成は文化財の保護や博物館にとどまらず、新時代に処しかね、心の寄る辺を失って混迷する人々にとって仏教信仰、それは旧来の仏教ではなく未来を見据えて改革が同時進行している仏教にこそ、「日本人」の人心を統合する可能性を見ていたのではないだろうか。

二―三　崇福寺再興と梵鐘の模鋳

明治二三年（一八九〇）三月、久成は三井寺光浄院の住職に就任すると同時に荒廃していた崇福寺（志賀山寺）の兼務住職となり復興を託されることになる。

崇福寺は天智天皇によって大津京時代に創建された古刹で、法明院開祖・義瑞によって一度は再興されたが、当時はまた荒廃し、敬徳も再興を望んでいたという。明治二一年（一八八八）の敬徳から久成宛の書簡では、工事が進んでいたことをうかがわせるが(16)、久成は敬徳の遺志を嗣いで、東京大学史料編纂所蔵の『町田久成略伝』(17)によると「八万四千の白衣観音の願筆を揮毫し、以て世の喜捨財を蒐め、一大梵鐘の鋳造を企図す」とあり(18)、これをもって崇福寺復興の資金に充てようとしていたことが分かる。

また、明治二五年（一八九二）三月に「志賀山寺町田久成」の名で発行された「志賀山再建并梵鐘浄財募縁」（三井寺所蔵文書）にも鋳造する梵鐘の図とともに寄附人や世話人の名前が記されている。この梵鐘の図からも企てられたのは、現在も三井寺に伝わる重要文化財の銅鐘を模鋳することであった。この見本となった鐘は、遼の太平一一年（一〇三一）に制作された朝鮮鐘で、宝相華と唐草文を配し、美しい天人像が陽鋳された優品として知られている。ここにも久成が「集古館建設の提言」以来、「考古ノ徴拠」である優れた文化財を模写することの重要性の主張が貫かれているのを見ることができよう。白衣観音の揮毫も然り、まさに久成は「書を能くし、天性画技に長じ、且つ鑑識に富み、篆刻は天才に造詣深く、模造模写を巧みにす」(19)と略伝が伝えるとおりであった。

さて、崇福寺の梵鐘として模鋳された鐘は、その後数奇な運命をたどる。鋳造後しばらくは光浄院に置かれていたが、昭和三年（一九二八）に再建された法明院の鐘楼に懸けられ、第二次世界大戦中に供出、幸いにも鋳つぶされることなく戦後返還されて円満院に仮安置されていたが、現在は所在不明となっている。

二-四　久成の古書籍蒐集と『古逸叢書』

崇福寺再興のため発願された梵鐘で特筆されるのは、久成が明治二三年（一八九〇）に三井寺の開祖智証大師一千年遠忌にあたり、この鐘の銘文を黎庶昌（一八三七～九七年）に依頼したことである。この銘文は、黎庶昌の文集『拙尊園叢稿』巻六に「崇福寺鐘銘」として収められている[20]。黎庶昌は、貴州省遵義の出身で、曽国藩の幕僚となり、明治一四年（一八八一）に駐日清国公使として来日した人物である。文人として名高く、在日中には、中国国内ですでに散逸した古典籍を収集し、楊守敬（一八三九～一九一五年）とともに明治一七年（一八八四）に『古逸叢書』二六種二〇〇巻にまとめ刊行したことはよく知られている。

久成は出身地の名をとって「石谷」と号し、古美術をはじめ古典籍の蒐集家としても知られていた。崇福寺の鐘銘を依頼した黎庶昌との関係では、久成が所蔵していた平安後期の古写本『天台山記』が、『古逸叢書』に収められ影印出版されている。『天台山記』は唐代の八二五年に徐霊府が撰述した地誌で、久成旧蔵の写本は現在、国立国会図書館が所蔵し、他に伝本のない孤本として重要文化財に指定されている。その包紙には「安然先徳真蹟、天台山記、星使、黎庶昌古佚叢書中へ、収、石谷珍蔵」の墨書があり、久成が手に入れ珍蔵していたものを黎庶昌の『古逸叢書』に収められたことが判明する[21]。また同じく『古逸叢書』に収められた『大宋重修廣韻』も久成旧蔵本で[22]、久成の蔵書の質の高さとともに、これまであまり指摘されてこなかった黎庶昌との関係は注目されるところである。

おわりに

明治三〇年（一八九七）、前年から体調を崩していた久成は、九月一五日に上野公園の韻松亭で世を去る。享年六〇であった。三井寺では功績に酬いるため権大僧正の僧位を贈っている。直ちに寛永寺津梁院に内葬された後、遺言により三井寺に送られ、法明院墓地のフェノロサの墓所と向かい合う場所に埋葬された。墓碑には「本実成院権大僧正久成大和上墓」と刻まれている。

現在、東京国立博物館の庭園に顕彰碑が建っている。久成の十七回忌に当たる大正元年（一九一二）に親交のあった井上馨や杉孫七郎たちによって建立されたもので、歴史学者の重野安繹が碑文を撰している[23]。その末尾には「龍に攀じ鳳に附く、雲台麟閣は、我願に非ず、我何くにか適わん、兜率天こそ安宅」とあり、三井寺の本尊でもある弥勒仏の浄土である兜率天に安住することを願った久成に言及している[24]。

明治政府の高官の地位を棄て、仏門に飛び込んだ町田久成。世人から「近世の一奇人なり」[25]と称された生涯は、世界の中で激変していく明治の日本にあって、薩摩藩の名家出身としての矜持と近代国家を担う日本人としての使命との狭間を生きた彼独特の自己韜晦の一表現であったといえば深読みしすぎで

あろうか。

なお、町田久成の関係文書とみられる資料が、三井寺山内の勧学院から聖教類とともに発見されている。今後は本資料の整理、研究を課題としたい。

写真２：アーネスト・F・フェノロサ

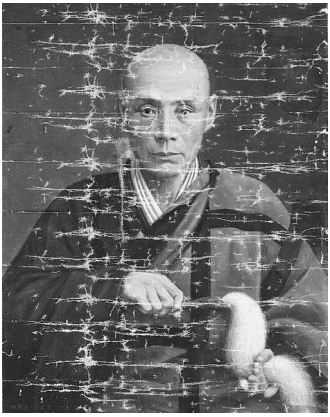


写真１：町田久成肖像（三井寺法明院蔵）

写真４：町田久成の墓（三井寺法明院墓地）

写真３：桜井敬徳像（三井寺法明院境内）

写真６：東京国立博物館構内に建つ顕彰碑

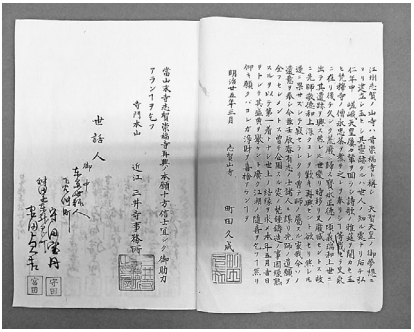


写真５：町田久成の志賀山再建并梵鐘浄財募縁

写真７：寛永寺津梁院の供養塔

註

（1）絹本著色・天台大師画像（一二四・六×七一・〇センチメートル）。その箱書きに「町田久成寄附　天台大師画像　古画　園城寺蔵」（箱蓋）、「明治四十四年十二月　假箱寄附　光浄院邁曝」（箱底）の墨書がある。

（2）町田久成の生涯については、末尾掲載の「町田久成関係略年譜」を参照。その他、主な論著に東京国立博物館『東京国立博物館百年史』（一九七三年）、門田明「町田久成略伝」『鹿児島県立短期大学紀要』第四八号（一九九七年）、関秀夫『博物館の誕生　町田久成と東京帝室博物館』（岩波新書、二〇〇五年）、椎名仙卓『日本博物館成立史　博覧会から博物館へ』（雄山閣、二〇〇五年）、井上洋一「町田久成」（『博物館学人物史（上）』所収（雄山閣、二〇一〇年）、吉田千鶴子『〈日本美術〉の発見　岡倉天心がめざしたもの』（吉川弘文館、二〇一一年）などがある

（3）佐藤道信『明治国家と近代美術』（吉川弘文館、一九九九年）四〇・四一頁

（4）犬塚孝明『薩摩藩英国留学生』（中公新書、一九七四年）

（5）前掲『東京国立博物館百年史』

（6）前掲『博物館学人物史（上）』

（7）門田明前掲論文並びに「町田石谷先生碑銘」磯ヶ谷紫江『墓碑史蹟研究』第九巻（後苑荘蔵版、一九三二年）

（8）前掲『博物館学人物史（上）』

（9）北澤憲昭『眼の神殿「美術」受容史ノート』（ブリュッケ、二〇一〇年）、とくに第三章参照

（10）辞任の事情については前掲『博物館の誕生　町田久成と東京帝室博物館』一五九～一六〇頁参照

（11）フェノロサと法明院に関する主な論著は、山口静一『フェノロサ』（三省堂、一九八二年）、同氏『三井寺に眠るフェノロサとビゲロウの物語』（宮帯出版社、二〇一二年）並びに源豊宗・滋野敬淳『三井寺法明院』（観光資源保護財団、一九七五年）

（12）北澤憲昭『「日本画」の転位』四六頁（ブリュッケ、二〇〇三年）

（13）後藤純郎「博物局書籍館長、町田久成　その宗教観を中心として」『教育學雑誌』第一〇号（日本大学教育学会、一九七六年）

（14）元文三年（一七三八）に門弟寛温等による『義瑞和尚行業記』

（15）大島朋剛「博物館退官後における町田久成の事績」『ＬＯＴＵＳ』第二六号（日本フェノロサ学会、二〇〇六年）

（16）大島朋剛前掲論文

（17）門田明前掲論文

（18）『ながらのさくら』（一九二七年）二三・二四頁並びに写真版一三

（19）門田明前掲論文

（20）石田肇「園城寺朝鮮鐘と崇福寺鐘銘　町田久成と黎庶昌」『史迹と美術』第

五八輯ノ七（五八七号）（史迹美術同会、一九八八年）

（21）薄井俊二による一連の論考に詳しいが、徐霊府『天台山記』については、「天台山をめぐる古文献逸文輯考」（『中国文化』第六〇号、二〇〇二年）、「徐霊府「天台山記」の研究（その一）（『埼玉大学紀要教育学部』第五十一巻第一号、二〇〇二年）、「天台山記の流伝」（『日本中国学会報』第五十五集、二〇〇三年）。国立国会図書館蔵「天台山記」については、同氏の「徐霊府「天台山記」の研究（その二）（『埼玉大学紀要教育学部』第五十一巻第二号、二〇〇二年）、「国立国会図書館蔵「天台山記」について（『汲古』第四一号、二〇〇二年）、「再び国立国会図書館蔵「天台山記」について」（『汲古』第四四号、二〇〇三年）。これらはまとめられ薄井俊二『天台山記の研究』（中国書店、二〇一一年）として出版されている。それによると『天台山記』は、智証大師円珍によって日本に将来され、写本が作られて延暦寺の経蔵に収蔵されていた。その後、寺門派の成尋が書写して入宋時に携行している。久成旧蔵の国立国会図書館所蔵の写本（二五・五×一五・五センチメートル）は、五大院安然が関わった写本として伝わり、三千院円融房の所蔵を経て、久成の架蔵するところとなり、『古逸叢書』に模刻された後に帝室図書館の所蔵となり、現在に至っている

（22）石田肇前掲論文

（23）前掲「町田石谷先生碑銘」

（24）滋野敬淳「町田久成和尚小話」『ＬＯＴＵＳ』第一七号（日本フェノロサ学会、一九九七年）

（25）『大津市志』上巻（大津市私立教育会、一九一一年）及び『近江人物志』（滋賀県教育会、一九一七年）

町田久成 関係略年譜

西暦	年号	歳	関連事項	参考事項
一八三八	天保　九	1	一月二日、町田久長（伊集院郷石谷領主〈鹿児島市石谷町〉）と母国（汲）子（吉利郷〈日置市日置町吉利〉領主・小松清穆長女）の長男として鹿児島城下千石馬場通り、町田屋敷にて出生	
一八五六	安政　三	19	母死去、遺言により江戸昌平坂学問所に就学、有馬新七と出会う	
一八五九	安政　六	22	江戸就学を終え薩摩に帰郷。御小姓組番頭となる	
一八六二	文久　二	25	島津久光により大目付に抜擢される（島津斉彬は一八五八年に死去）	
一八六四	元治　元	27	六月、薩摩藩開成所の設立に参加、小松帯刀（家老）、町田久成（大目付・学頭）、大久保一蔵（側役）連名 七月、禁門の変に六郷隊（兵士約六百人）隊長として参戦	
一八六五	慶応　元	28	三月二二日、薩摩藩英国留学生十五名を率いて英国渡航に出発	
一八六七	慶応　三	30	六月下旬、英国より帰国 一〇月一四日、大政奉還	四月、パリ万博に日本（幕府、薩摩藩、佐賀藩）が初参加
一八六八	慶応　四	31	一月、新政府に出仕、外国事務局の参与兼外国事務局判事 二月、長崎裁判所判事兼九州鎮撫使参議 五月五日、外国官判官事となる。翌日に従五位下に叙せらる	三月二八日、神仏分離令 九月、「明治」に改元
一八六九	明治　二	32	七月八日、外務大丞 七月二二日～八月二二日、英国エジンバラ公アルフレッド来日の接待役（領客使随使）を務める 九月二九日、七日間の謹慎処分を受ける	
一八七〇	明治　三	33	九月二日、大学大丞となる、大学南校物産局勤務の時、田中芳男（幕府使節としてパリ万博参加）と再会	
一八七一	明治　四	34	四月二五日、「集古館建設の提言」日本初の博物館創設計画の始まり 五月五日、田中芳男と共に東京招魂社大祭にあわせ三番薬園にて物産会を開催 七月一八日、文部省設置に伴い文部大丞 九月二九日、文部省に「博物局」設置、博物局掛に任命される	五月二三日、古器旧物保存方公布（太政官布告）

一八七二	明治　五	35	一月五日、文部大丞・町田久成、田中芳男と共に万国博覧会御用掛として事務局に出向 一月八日、太政官正院に「澳国博覧会事務局」開設 五月一五日、社寺宝物調査（壬申検査）開始（町田久成、蜷川式胤、高橋由一、横山松三郎） 八月二八日、博覧会事務局を内山下町の旧薩摩藩邸跡に移す 名古屋城等保存ノ儀を建議	三月一〇日、国内初の勧業博覧会（湯島聖堂大成殿・文部省博物館）
一八七三	明治　六	36	三月一九日、「博覧会事務局博物館」と改称 内山下町博物館（集古館）の始まり 四月一五日、内山下町の「博覧会事務局博物館」で博覧会を公開 六月五日、太政官に上野寛永寺跡地に博物館と書籍館の「大博物館建設の必要」を建議 一二月一〇日、内務大丞となる	ウィーン万博に初の正式参加（五月一日～十一月二日） 十一月一〇日、内務省設置（初代内務卿大久保利通）
一八七四	明治　七	37	七月三〇日、書籍館の書籍を浅草米倉に移し、「浅草文庫」とする 米国博覧会事務局局長に就任	五月二日、古墳発見ノ節届出方（太政官達五九号）
一八七五	明治　八	38	三月三〇日、博覧会事務局博物館を「博物館」（内務省所管）と改称 五月三〇日、博物館は「内務省第六局」と改称、局長に就任	一二月一七日、「浅草文庫」を一般に公開
一八七六	明治　九	39	一月四日、内務省第六局が「博物館」と改称、七日に博物館長となる 二月二四日、内務省所轄の博物館のみ「博物館」と称す（太政官布達第二〇号） 一二月一四日、寛永寺本坊跡地二九、八〇〇坪を博物館建設用地として確保（内務省博物局管理）	四月一九日、遺失物取扱規則布告（太政官布告第五六号） 五月、フィラデルフィア万博開幕（十一月一〇日まで）
一八七七	明治一〇	40	九月二七日、埋蔵物発見の場合、内務省に届け出義務を布達	八月、第一回内国勧業博覧会
一八七八	明治一一	41	三月一四日、寛永寺本坊跡に博物館本館建設に着工（コンドル設計）	五月一四日、大久保利通暗殺 八月九日、フェノロサ来日
一八七九	明治一二	42	結婚、三男一女（蝶子）をもうけるも妻と長男は早世	
一八八〇	明治一三	43	二男・秀麿誕生、本邸・浅草橋場、別邸・向島小梅	
一八八一	明治一四	44	一月二七日、博物館竣工 四月七日、農商務省設置、内務省博物館局並びに博物館の移管に伴い内務省・博物局長から農商務省・博物局長に就任	三月、第二回内国勧業博覧会黎庶昌、駐日清国公使として来日（～八四年）

一八八二	明治一五	45	三月二〇日、農商務省「博物館」開館、初代館長に就任 六月、勲四等正五位 一〇月一九日、博物館長（博物局長）を辞任 三男・茂誕生	六月五日、ビゲロー、モースと共に来日	
一八八三	明治一六	46	四月三日、三井寺法明院・桜井敬徳から八斎戒を受ける 一〇月二七日、博物館（史伝課長）に復帰		
一八八四	明治一七	47	六月二日、東大寺戒壇で敬徳より円頓菩薩戒を受ける	『古逸叢書』刊行	
一八八五	明治一八	48	三月一〇日、博物館より元老院義員に転出 五月、勲三等 八月、桜井敬徳上京、向島小梅の町田邸に止宿、岡倉覚三の紹介でフェノロサしばしば訪問す 九月二十一日、向島小梅の町田邸においてフェノロサ（諦信）とビゲロー（月心）、敬徳から戒を授かる 十月、従四位		
一八八六	明治一九	49	桜井敬徳が『義瑞和尚行業記』を版行するに際し印刷代金を立替える 三月二四日、宮内省「博物館」として移管 五月三〇日、岡倉覚三、法明院で桜井敬徳より授戒		
一八八七	明治二〇	50	一〇月、東京美術学校設立（事実上の校長は岡倉天心）	黎庶昌、再来日（～九〇年）	
一八八八	明治二一	51	一月、宮内省「図書寮付属博物館」 九月、宮内省に臨時全国宝物取調局設置（委員長九鬼隆一）	十二月六日、島津久光死去	
一八八九	明治二二	52	五月十六日、宮内省「博物館」を「帝国博物館」と改称、九鬼隆一が総長に就任 一二月一日、三井寺にて敬徳に従い剃髪、大乗菩薩沙弥戒を受ける 出家後、東京に戻り、浅草橋場の本邸と向島小梅の別邸を処分する 一二月十四日、敬徳、東京にて死去、五五歳 一二月二六日、元老院を辞し、三井寺に入る	二月十一日、大日本帝国憲法公布 五月、パリ万博開幕（フランス革命百周年）	

一八九〇	明治二三	53	三月二一日、大僧都補任（遍照僧正の古例に依る） 三井寺光浄院住職、また崇福寺復興のため兼務住職となる 九月、崇福寺再興のため園城寺蔵の朝鮮鐘の模鋳を発願し、鐘銘の執筆を大清欽差大臣・黎庶昌に依頼 一〇月二七日より三日間、智証大師一千年遠忌を修する	七月六日、フェノロサ帰国 九月、ボストン美術館着任
一八九一	明治二四	54	一二月一四日、『敬徳大和上略伝』を著わす（奥書）	五月十一日、大津事件
一八九二	明治二五	55	三月、「志賀山再建并梵鐘浄財募縁」（三井寺所蔵文書）を作成し、崇福寺再興のため梵鐘鋳造の募金を行なう また当時、直隷総督・北洋大臣であった李鴻章が金塊を寄贈 六月一五日、志賀山寺再建を発願し願筆白衣観音像分布会を設立	
一八九三	明治二六	56	長吏祐玉を拝し、円頓菩薩比丘戒を受け、大僧となる シカゴ万国博覧会の世界宗教会議参加のため秀麿を伴い渡米	シカゴ万博（五月～十月）
一八九四	明治二七	57		八月、日清戦争
一八九五	明治二八	58		四月、帝国奈良博物館開館
一八九六	明治二九	59	この頃、体調を崩し、寛永寺明王院で療養	七月六日、フェノロサ再来日
一八九七	明治三〇	60	九月一五日、上野公園・韻松亭で死去、六〇歳、寛永寺津梁院に内葬 権大僧正に贈補、遺骸を送柩し、法明院墓所に埋葬（土葬） 墓碑銘「本実成院権大僧正久成大和上墓」	五月、帝国京都博物館開館 六月一〇日、古社寺保存法（法律第四九号）
一八九八	明治三一		九月、一周忌に際し、津梁院墓地に供養塔建立	
一九一二	大正元年		十七回忌に際し、東京国立博物館に顕彰碑「町田石谷君碑」建立	

堅田藩の百姓一揆　～安永八年（一七七九）の代表越訴～

水本　邦彦

堅田藩の百姓一揆　～安永八年（一七七九）の代表越訴～

水本　邦彦

Name :
MIZUMOTO　Kunihiko

Title :
Peasants revolt of Katata domain in 1779 CE

Summary :
Peasants in Katata domain, which is located in Shiga prefecture at present, hold a revolt in 1779 CE against additional duties sent from their lord. A total of 29 representatives of some 17 villages went to the Sakura domain's office in Edo, and complained of the bill. In this study, I extensively explored historical documents to understand the entire processes of this revolt.

はじめに

江戸時代後期の安永八年（一七七九）、近江国滋賀郡本堅田村に陣屋を置く堅田藩（領主堀田氏）の領民百姓たちが、御用金賦課に反対して代表越訴型の一揆を起こした[註1]。領内二九ヵ村の過半十七ヵ村の代表者あわせて二九名が江戸に下り、要求を掲げて自領主本家（下総国佐倉藩十一万石の堀田氏）の江戸屋敷に駆け込み訴えるという過激なものだった。

この時期に起きた越訴事件としては、天明五年（一七八五）の伏見義民騒動が有名だが、それに先行する本一揆についてはこれまで全く知られていなかった。と同時に、この一揆は、参加者から一人の処分者を出すこともなく要求を貫徹したという点でも、大変興味深い事件である。さいわいこの一揆については、藩側の史料「堀田家記録」と大津市本堅田「伊豆神社所蔵文書」など地元史料の双方から接近できるという好条件にある[註2]。以下、藩側、村側の両史料を突き合わせながら、越訴の背景、江戸出訴から収束に至るまでの経過、および処分問題などについて考察する。

一、越訴の原因と背景

本題の越訴について検討する前提として、あらかじめ堅田藩の領地支配の仕組みについて概観しておく。この点に関する詳細な研究は今後の課題だが、さしあたり越訴出来時点での仕組みを図示すれば、おおむね【図1】のような構造だったと想定される。

郡奉行：江戸から派遣される堀田氏の家中侍。一揆発生前々年の安永六年までは、依田宗左衛門と横川登弥太の二人体制だったが、安永七、八年には横川一人が奉行を勤めている。

郡方役：郡奉行を補佐する。この役も立藩当初の元禄十一年（一六九八）頃より享保年間（一七一六～三六）には江戸から侍が派遣されていたが、次第に地元の有力者に担わせるようになった。【図1】にみえる河村、児嶋のいずれも領内の出身で、河村は安永四年からこの役を勤めており、児嶋は同七年に大庄屋から取りたてられている。

大庄屋：郡方役の下にあって陣屋と村を仲介する役割を担う。安永期には三人が任命されていた。なお、この時点での管轄区域などは不明である。

帯刀者：中世以来の家筋を誇る堅田郷士の集団で、藩から名字帯刀を許され、「御家来同様」の位置づけだった。郡方役や大庄屋の多くはこの集団を母体にして選ばれた。

庄屋・年寄：領内二九ヵ村（滋賀郡十九ヵ村、高島郡一〇ヵ村）の各村に置かれた。ただし、本堅田村は陣屋元の大村ということもあり、庄屋は三～四名が任命され、年寄も複数名存在した。

さて、安永八年に起こされた越訴事件の直接の原因は、この年に郡奉行から命じられた莫大な御用金賦課にあったと見られる。藩からの触れ書や本堅田村からの願書を年ごとに庄屋が書き留めた「本堅田村諸色留帳」（伊豆神社所蔵文書）は、越訴二か月前の六月の項に、つぎのように記している（読み下し文に改変）。

六月五日、堅田ならびに滋賀拾八ヶ村御用所へ御召し出し、この度殿様御借用銀段々相増し候に付き、成され方これなく、御領分へ引き請けくれ候様仰せ付けらる。七日迄日延べ御願い申し、郷中も（へ）罷り帰り、七日罷り出候所、銀高五百六拾三貫匁余御願い成され、段々御断り申し上げ候えども、御聞き届けこれなく、九日に町々年寄残らず御用所へ罷り出、御断り申し上げ候えども、殊のほか御叱り成さる。又々相退き、町々申し聞かせ、よんどころなく御請け申し候事。

殿様が抱え込んだ借用銀の返済のため、領民に対し銀五六三貫匁余の御用金を賦課するというものである。領民側は繰り返し断ったが、郡奉行（横川登弥太）の御叱りに抗しきれず、本堅田村庄屋衆は町内を説得して引き受けることにしたという。

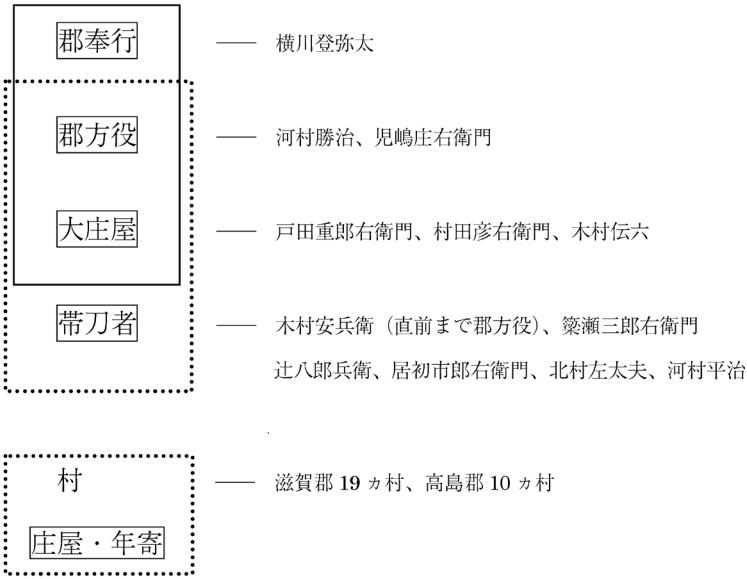
ちなみに、要請額の銀五六三貫匁余を、かりに銀六〇匁＝米一

石で換算してみると九三八三石余となる。これはじつに堅田藩領全体の領知高一万石にも匹敵する莫大な賦課金額である。

　このような強引にして多大の御用金賦課政策の背景には、悪化の一途をたどる藩財政や、前年の水害による年貢減収などがあった。たとえば、御用金賦課に先立つ安永四年四月に策定された五年間の倹約令は、同藩財政がかなり危機にあったことを如実に語っている。藩の勝手方役人や陣屋奉行らが連名し、藩主の裏判付きで領内村々に示された倹約令は、江戸藩邸と堅田陣屋を合わせた藩全体の年間支出の上限を二、二二五両に定めること、その仕送りを銭屋半兵衛・伊勢屋清次郎に任せること、仕送り金の引き当てには、毎年大津御蔵に納められる領民からの収納米（年貢米）を充てること、などと謳っている。ちなみに、ここに登場する銭屋、伊勢屋はそれぞれ大津、膳所の商人であることが「本堅田村諸色留帳」から判明する。つまり、この時期、村からの年貢米はすでに地元商人たちに掌握されており、藩経済は彼らの仕送り金で賄われるという受動的な構造に陥っていた。

　御用金賦課政策の前年、安永七年の水害は、悪化した藩経済に更なるダメージを与えた模様である。同年十一月の藩中央から藩士への申し渡しによれば、当年の収納は当初予定の四割にまで落ち込んだとあり、それゆえ、藩士は諸手当て支給の遅滞に備えるように、衣類は見苦しくても構わない、家中の音信贈答は止め平日の暮し方に費えなきように、などと指示している。

　安永八年の御用金賦課政策は、こうした流れの中で打ち出された。



【図１】堅田藩陣屋（在方役所）の仕組み（越訴事件当時）
太い実線枠は堅田陣屋構成メンバー。破線枠は地元出身者。

二、事件の経過 ―越訴から処分まで―

莫大な金額の御用金の賦課に対して、本堅田村を始めとする何ヵ村かはしぶしぶながらこれを受け入れたが、過半の村は反対して江戸への出訴に踏み切った。以下、「堀田家記録」および「本堅田村諸色留帳」の記事から事件の経過を跡付ける。

以下、無印は「堀田家記録」（「公私緊要・勝手ノ四」）より、※印は「本堅田村諸色留帳」による。また（　）内は筆者の注釈である。

①七月十八日　堀田本家（下総国佐倉藩、十一万石）の江戸屋敷留守居より堅田藩江戸屋敷留守居（富永半弥）に手紙連絡が入る。本日、馬喰町二丁目幸手屋長兵衛方を宿にした堅田藩領民惣代五人が、願いありと本家屋敷に訴え出た（惣代十一人中、六人は病気のため不参加）。明日堅田藩江戸屋敷へ出頭するよう申し渡した由。（惣代十一人＝滋賀郡一九ヵ村のうち一〇ヵ村の代表）

②七月十九日　宿主の幸手屋長兵衛の付き添いで惣代五名が堅田藩江戸屋敷へ出頭する。

大目付原田郷内ほかが立合い、惣代に対して願書の提出を命じる。

③七月二四日　提出した願書の扱いを問うて庄屋たち四名が出頭する。評儀中なので宿で待機するように命じる。

④八月二日　明日三日に、惣代十六人すべてが出頭するように申し遣わす。（惣代数は①～④の間に五名増）

⑤八月三日　領分十一ヵ村庄屋共十一人（外五病欠）を呼び出し、内尋ねを開始する。（史料には「領分十一ヵ村惣代十六人」とあるが、滋賀郡参加村実数は一〇ヵ村）

⑥同日　高島郡の八ヵ村十三人も去る十八日に江戸に向かった、との知らせが届く。（「八ヵ村」とあるが、実際の参加村数は七ヵ村）

⑦八月八日　庄屋たちから追訴の願書が出される。高島郡七ヵ村庄屋共十三人も罷り出る。

⑧八月十六日　本家藩主より、吟味（取り調べ）の場に本家の大目付岩崎甚右衛門を立ち会わせるよう指導が入る。

⑨八月十八日より　吟味が始まる。（惣代十七ヵ村・二九人。うち病欠五人）

⑩※九月十五日　江戸に召喚され八月二五日に堅田を出立した在所御役人（郡奉行）の横川登弥太が、江戸着の翌日の九月十五日に急死する。

⑪※この間、本家の大目付岩崎甚右衛門の立ち会いのもとに、吟味が進められ、百姓たちの願いが聞き届けられる。

⑫九月二二日　出訴の百姓たちの帰村を許す。地元での調査のため本家からも役人が派遣されることになる。

⑬※十月七日　現地での調査と在所役人御糺のため、堅田藩家老高橋丈右衛門と堀田本家の出野治郎兵衛（堅田藩の物頭・郡奉行行に任命）が派遣される。

⑭※十月十八日　本堅田村の村役人が江戸役人一行を中山道守山宿まで出迎える。
⑮※十月十九日　在所役人に対する事件糾明の御糺し五箇条が示され、返答が求められる。
⑯※十月二一日　在所役人に対し謹慎などの処分が命じられる。処分免除者もあり。
⑰※同日　滋賀郡から出府した庄屋たちに、⑯の処置が伝えられる。なお、藩側から改めて御用金の要請があったが、庄屋たちは延期を願い出て退出する。
⑱※十月二二日　滋賀郡中村々からの異議申し立てにより、在所役人の謹慎場所は陣屋内から各々の所属村へと改められる。

三、処分の理由と内容

二でたどった事件経過からも明らかなように、この越訴一件は、百姓側の要求が認められたという点に大きな特色があり、同時に、領地運営を担う在所役人やそれに準ずる人々が処罰されたという点でも注目に値する。そうした対応を選択した藩の論理や処分内容について、堀田家記録から詳しく見てみよう。

越訴に対する藩側の最終的な態度・判断は、十月二一日、領内の全村々宛に示されたと推定される申し渡しの文面によく表れている。要約して示せば次のごとくである。

①百姓の願いの内容を調べたところ、在勤中の横川登弥太の諸事取計らいに不法があり、郡方役の児嶋庄右衛門および大庄屋戸田重郎右衛門、村田彦右衛門の勤め方もよくなかった。そのうえ、先達ての御用金賦課については、割り掛け方に不都合が多く、非分のやり方もあった。そこで、それぞれに対して処罰を行った。

②百姓たちは江戸での取調べのなかで、御用金政策のみが問題なのではなく、在所役人の不適切な政治全般が原因で出訴に至ったと申し述べていた。つまり、百姓たちの考えは「失政は末々（百姓）にもお上（藩主）の為にもならないし、百姓が長く続くことこそ大事だ」というものであり、この点は、お上も至極もっともなことだと満足されている。

③しかし、大勢の百姓どもが江戸御屋敷の門前へ願い出るやり方は、公儀の法度に触れる行為である。もし今回の出訴について公儀が不審を抱けば、願いの善悪によらず、惣代たちは処分されることになる。そのようなことになっては、お上の為を思って出訴したにもかかわらず法度違反とされ、またお上も咎めを受けることになり、はなはだ残念なことである。

④ついては、今後不法な取計らいをする在所御役人がいた場合は、内々にほかの役人へ申し上げ、その指図を受けてから願い出るように。

⑤こうした指示は、百姓が永続するようにとのお上の御憐憫の気持ちからのことであり、今後は心得違いのないように

と仰せ出された。庄屋たちはこの旨を小百姓まで申し聞かせるように。

おおむねこのように申し渡している。一揆・徒党に該当する百姓たちの行動を、お上も願っている百姓永続のための訴えとすり替え肯定したうえで、そうした行動を生み出した原因は在方役人の失政にあるとするのである。こうした対応の背後には、恐らくは藩中央も承知の上で進められた横川らの御用金政策の失敗を隠蔽し、藩政に向かう批判を弱めようとした意図があったと推測され、また公儀から領内管理不行き届きの「察当」を受ける危険を回避しようとする思惑も見え隠れする。

このようなかなり強引な論理のすり替えのゆえであろうか、在方役人に対する処分は、郡方役一名と大庄屋二名の解任、その他は御叱りという比較的軽微な程度に留まった。以下、処分内容を示す。

〈郡方役〉児島庄右衛門　勤め方思し召しに叶わず。御役取り上げ、御扶持給米召し離し。住居はお構いなし。

〈郡方役〉河村勝次　大勢を出訴させたことは不行き届き。しかし現在年貢収納最中であり、人手が少ないので咎の儀は沙汰に及ばず。

〈大庄屋〉戸田重郎右衛門・村田彦右衛門　勤め方はなはだ宜しからず。大庄屋役、御扶持・帯刀取り上げ。

〈大庄屋〉木村伝六、〈堅田村庄屋〉竹内荘吾・中村多三郎　大勢を出訴させたことは御家来同様の帯刀身分として不行き届き。しかし事は済んだので咎には及ばず。

〈帯刀之者〉木村安兵衛、築瀬三郎右衛門、辻八郎兵衛、居初市郎右衛門、北村左太夫、河村平治　大勢を出訴させたことは御家来同様の帯刀身分として不行き届き。しかし事は済んだので咎には及ばず。

そして、この後、陣屋役人は次のようなメンバーで再編成された。

郡奉行＝出野治郎兵衛、郡方役＝河村勝治・木村安兵衛、大庄屋＝竹内荘吾・中村多三郎・辻八郎兵衛

出野は堀田本家からの「借人」（出向）で事件収束を指揮した人物、河村は留任、木村は元郡方役である。また大庄屋となった竹内・中村は本堅田村庄屋からの昇格、辻は帯刀人グループの一員だった。

おわりに

以上、堅田藩領の過半村々の代表者が決行した安永八年代表越訴事件の概略を記した。なぜ彼らは堀田本家の江戸屋敷に訴え出たのか、本家が事件解決に強く介入した理由は何か、公事宿幸手屋の役割をどう見るか、など、残された課題も少なくない。引き続き関係史料の収集と分析を進め、検討していきたい。

本稿は、堅田大庄屋文書研究会（代表、筆者）、および科学研究費補助金基盤研究「譜代小藩堅田藩の基礎的研究―地域社

会の変容と藩政の展開―」グループ（代表、東谷　智）の研究成果の一部である。

註

1. 堅田藩は大津市本堅田に陣屋を置く堀田氏を藩主とする譜代大名（定府）である。元禄十一年（一六九八）に初代堀田正高が下野国佐野より入封して立藩。正高の祖父堀田正盛は下総国佐倉藩十一万石を得て三代将軍家光に仕え老中を勤めた。父親の正俊（下総国古河十三万石、大老）は貞享元年（一六八四）稲葉正休（若年寄）に刺殺されたため、子の正高は下野国佐野一万石の小大名となった。元禄十一年に近江国（滋賀郡・高島郡）に領知替えとなる。その後、文化三年（一八〇六）に三千石を加増され、文政九年（一八二六）佐野に本拠を移したため堅田藩は廃藩となるが、滋賀郡内の領地はそのまま存続した。

2. 藩政史料としては、藩政時代に項目ごとに編集製本された堀田家記録（東京大学法学部法制史資料室蔵）がある。また、地方史料としては、陣屋のおかれた本堅田村の庄屋文書を含む伊豆神社文書や、堅田郷士の居初家文書、滋賀郡の領地村であった衣川村関係史料（千葉乗隆編『江州衣川村文書（上）』同朋舎、一九七六年）、高島郡の領地村であった浜分村（高島市今津町浜分）の岩佐家文書などが残る。本一揆に関しては、堀田家記録および伊豆神社文書中の「本堅田村諸色留帳」に書き留められている。

［近江学研究］

生活文化の聞き取り調査、及び、仰木ふるさとカルタ制作　後編

永江　弘之・大原　歩

［近江学研究］

生活文化の聞き取り調査、及び、仰木ふるさとカルタ制作　後編

永江　弘之・大原　歩

Name :
NAGAE Hiroyuki, OHARA Ayumi

Title :
An Interview-Based Fact-Finding Survey of the Life and Culture of Ogi and the Making of karuta (picture cards for a traditional Japanese game) Featuring the Omi Countryside: Part Three

Summary :
Ogi, Otsu, Shiga Prefecture, a rural farming area set in the lush countryside, has a history that goes back over 1,000 years. I carried out an interview-based fact-finding survey of the life and culture of Ogi, speaking with people between 60 and 90 years of age who live in the area. Based on the data collected I produced the “Ogi Furusato Karuta” (Ogi Countryside Cards). In this, the second half of my study, I will outline my reflections on the educational and informative dimensions of this project and the practical application of “Ogi Furusato Karuta.”

第一章　はじめに（担当：永江）

本研究のフィールド、滋賀県大津市仰木は、西は比叡山を背に、東は琵琶湖を見下ろす山麓に位置し、上仰木、辻ヶ下、平尾、下仰木の四つの字からなる大きな農村集落である。集落を階段状の棚田が取り巻き、背後に雑木林や山林が続く里山は、日本の原風景とも呼べる景観を今も残している（図1）。平安期から「仰木庄」として知られ、氏神の小椋神社は延長五年（九二七）に『延喜式』の式内社に選ばれており、千年以上の歴史がある集落である。

仰木地域は、固有の豊かな文化資源を脈々と今に伝えている。棚田・里山をはじめ、歴史、伝承、祭り、信仰、交流、生活様式、民俗、風習、道具、自然といったものが融合して、「仰木の暮らし」をかたちづくっている。

一方で、圃場整備や開発によって里山の姿は大きく変わりつつあり、高齢化などの現代的課題の深刻化とともに仰木も今、急激な変化の中にあることは否めない。それでも現在の仰木にはなお、かつての日本の里山に息づいていた心惹かれる魅力が

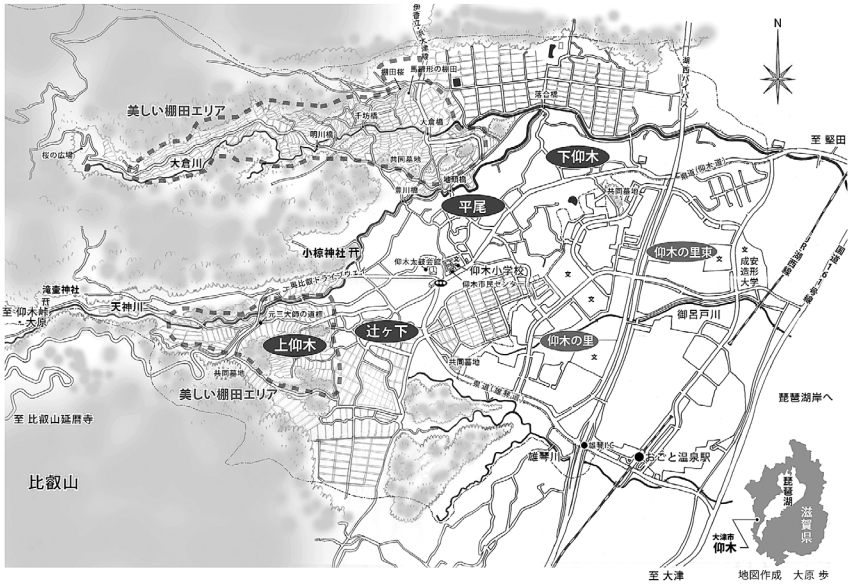


図1：仰木全体地図

滋賀県大津市仰木：大津市北部、比叡山から琵琶湖の西岸へと伸びる雄大な山麓の中間に位置する仰木は、階段状の棚田が取り巻く、世帯数八一七戸、人口二二四四人（平成二八年一月一日現在）、四つの字（上仰木・辻ケ下・平尾・下仰木）から成る農村集落。仰木の集落形成の歴史は一一五〇年前に遡ると言われ、大津と北陸を結ぶ西近江路（国道161号線）から西へ分岐し、京都の大原で若狭街道、いわゆる鯖街道と合流する仰木道の途中に発達した。集落には、小椋神社を筆頭とする多数の社寺、無数の地蔵や祠、共同墓地が点在し、東塔、西塔と並ぶ比叡山三塔のひとつ、横川への登り口に当たる。

たくさん詰まっており、そこには、効率化を優先した現代の都市型社会において失われつつある価値観が生きている。

本研究は、仰木集落の六〇歳以上の方からの聞き取り調査をベースとして、昭和二〇年代～四〇年代の里山の生活文化を目に見える形で共有できる「ふるさとカルタ」としてよみがえらせる試みである。成安造形大学附属近江学研究所で平成二二年度（二〇一〇）から三カ年計画で取り組んだ近江学研究「里山～水と暮らし」の第二期「生活文化の聞き取り調査、及び、仰木ふるさとカルタ制作」として、平成二三年度（二〇一一）、二四年度（二〇一二）に仰木地区で実施した調査・研究活動である。本稿では、後編として「本研究活動の教育的・啓発的な側面の考察」と成果物である「仰木ふるさとカルタ」の活用について報告する。なお、前編・中編の報告は「成安造形大学附属近江学研究所紀要 第３号」（平成二六年三月発行）、「成安造形大学附属近江学研究所紀要　第４号」（平成二七年三月発行）に掲載している。

第二章　調査・研究の目的（担当：永江）

本研究では、高度経済成長で「物質的豊かさ」と引き替えに切り捨ててきたさまざまな素材や道具、生活思想、自然観などに目を向け、住民聞き取り調査等を通して人々や集落の記憶・思い出の中に息づく「今は見ることのできない情景」「現代に名残をとどめる情景」「暮らし（生活文化）のかたち」を掘り起こし、仰木固有の風土や文化、暮らしの情景を浮き彫りにして記録すること、および、それらの内にひそむ美しさ、かけがえのなさ、心の豊かさを再発見し、未来につないでいくためのツールとして、記録した言葉や情報をビジュアル化して、世代や地域を超えて多くの人が共有できる「ふるさとカルタ」を制作することを目的とした。

本研究には、大原歩、加藤賢治と私の三名の研究員に加え、成安造形大学学生十二名が研究スタッフとして参画し、一貫して活動した。成果物もさることながら、学生たちが地域と深く関わり、聞き取り調査からカルタ制作までをチームとして担うという形の研究手法の確立を重要視し、本研究における教育効果に期待した。

また、思い出の聞き取りをベースとした手法は、近年、高齢者の認知症の予防として取り組みや研究が広がっている「回想法」と密接に関連している。心理療法のみならず、世代間交流や地域活動などの活性化の効果が指摘されており、語り手であるご高齢の方が元気に活動的になられるだけではなく、聞き手である若者の活力や成長にも大きな効果が見られると言われている。人生経験豊かなおじいちゃん、おばあちゃんと話すことは、本などからの知識よりずっとリアルで心に響くのかもしれない。そうした意味でも、「ふるさとカルタ」の取り組みが、「過去と現在と未来をつなげる」「世代をつなげる」「地域をつなげる」「いのちをつなげる」、そうした総合的な地域発展につながっていけばと考えた。

第三章　「仰木ふるさとカルタの聞き取り調査・制作活動」の教育的意義（担当：永江）

本研究の特徴の一つは、研究員だけの研究ではなく、学生が主要なスタッフとして参加する点である。しかし、本研究は単位化した授業ではなく基本的に学生スタッフはボランティア参加とした。仰木の方と連携する上で、柔軟に対応し、学生参加の研究手法を探りながら取り組みを進めていく必要があると考えたからだ。当初、一年程度の研究期間を予定していたが、二年間という長期に渡ることとなった。幸い、スタート時点で四年生の学生はいなかったので、全員がカルタ完成まで活動することができた。

三―一　学生スタッフの募集時に示したビジョン

企画概要と到達目標

本研究活動の企画概要と到達目標として、主に以下の点を伝えて、学生スタッフを募集した。これらの文面は、募集メールやガイダンスプリントから抜粋し整理した。

1．暮らしを聞き取り、人々が育んできた知恵・文化・風習などを「ふるさとカルタ」として「かたち」にする試みです。思い出や記憶という目に見えない情報を、子どもから大人までが見て遊べるカルタに仕上げ、世代を越えた地域のつながりを再生する。これは、成安造形大学ならでは活動です。

2．暮らしのかたちを再現し、気持ちやいのちをカルタにつす。自分で納得のいく取材をして、「人の想いに添う」イラストレーションの制作に実践的に取り組みます。仰木の人たちをクライアントと考えて、相手の想いを汲んで表現する姿勢を学ぶことや「伝えること」の難しさ、「伝わる」よろこび、活動を通して広がる人や地域とのつながり、「仰木ふるさとカルタ」の商品化など、さまざまな面で実践的に得るものは大きいと考えます。

3．仰木の人たちにとって、積み重ねてきた自分たちの歴史や生活のこと、守り育んできた棚田や祭りのことが、「カルタ」という形になって残ることで、仰木のみなさんに共通する「地域の誇り」になるかもしれません。うまくいけば、仰木の人たちが「宝もの」のように大事にしてくれるかもしれません。

4．聞き取りをベースとした「ふるさとカルタ（思い出カルタ）」制作の手法は、近年、高齢者の認知症の予防や進行抑制として取り組みや研究が広がっている「回想法」とも密接に関連しています。回想法の実践効果は、心理療法のみならず、世代間交流や地域活動などの活性化が指摘されています。表面的には「認知症の予防」などの意味がありますが、思い出を語り合い、そこから生まれてくる人生の深さを感じとっていくことに回想法の深い意義を見いだすことができます。ご高齢の方がお元気に活動的になられるだけではなく、話をする若者（高齢の方から見ればほとんどが若者です）が確実に変わり、元気に成長すると言われています。

5．仰木の人にとっても、学生にとっても初めての取り組み、研究員（教職員スタッフ）にとっても初めての挑戦。試行錯誤しながら、研究スタッフ（学生を含む）全員で確かな手応えのある活動にしたい。

6．みなさんと共に、仰木における人々や集落の失われつつある多くの記憶を掘り起こし、それらの内にひそむ美しさ、かけがえのなさ、心の豊かさの再生につながるような研究としたい。そしてこの研究活動を通して、命の営みに触れ、人と自然の有機的な関係を学ぶことで、みなさん自身の造

形表現の原点を見いだし、より豊かでより広くより深い視点を持つことがひとつの目的です。

7．制作した「仰木ふるさとカルタ」を使用して、仰木のコミュニティーづくりの一助となるような取り組みを計画していきたいと考えています。例えば、小学生とおじいちゃん、おばあちゃんが一緒にカルタ会をする企画。カルタを使った「仰木を語る会」の開催。「仰木の語り部」のような機能を持った組織・担い手づくりのきっかけにならないだろうか…。ささやかですが、夢は広がります。

研究活動を終え、「仰木ふるさとカルタ」の活用をすすめている現時点で振り返ると、本研究の企画段階や学生募集段階のビジョンや期待した効果はほぼ実現し達成できたように思う。これによる、学生への教育的成果も大きい。

三―二　学生スタッフの実践的な学び

集まった学生スタッフは、イラストレーションを学ぶイラストレーションコースの学生八名と、建築・インテリア・ランドスケープなどを学ぶ住環境デザインコースの学生四名だった。本学のイラストレーションコースでは情報を絵で説明し伝えることを学び、住環境デザインコースではフィールドワークなどを通して自然や歴史・文化との関係から課題を探り、人が幸せになる住環境を考える。いずれの学生にとっても、本研究活動は専門性を活かす教育の場として実践的な学びにつながったと思う。

私は「教育とは、せざるを得ない状況を、いかに工夫してつくり出すか」と考えており、本研究活動において、さまざまな「せざるを得ない状況」が学生に行動を起こさせ、それによりさらに興味が深まる（モチベーションが高まる）という「場」を提供できたのではないかと思っている。

本研究活動を通して、学生は主に以下のような内容を学び、教育的成果が達成できたと考えている。

1．コミュニケーション力。とりわけ「話を聞き取る力」

授業や体験学習で学ぶことや作品制作のための技術などは、一度学べば身につくというわけではない。学んだ内容を日常的に活用できる力（日常力）にするためには、反復することが必須である。

本研究の聞き取り調査では、単に話を聞くだけではなく、話を記録し、理解し、想いのこもった絵にするために共感し、そして絵として視覚化・客観化する、そういう話の聞き方を何度も繰り返し行った。他者の話を深く聞き取る力、共感する力が身についたと思う。

2．イラストレーションを描く力

絵を描く行為は、作品表現のためだけではない。「記録、確認、伝達」のための絵、コミュニケーションツールとしての絵は、さまざまな場面で活用されている。そうした「日常的に絵を使いこなす力」は美術を専門に学ぶ学生のみな

らず、全ての人に有用であり、多くの人が身につけたいと願う力である。

本研究では、聞き取り調査の記録として学生は多くの挿絵つきのメモを残した。記録としての絵であると同時に、自分の理解を客観化し、語り手に見せて確認できる形にしている。また、聞き取り後のスタッフ同士の情報交換でも文字や言葉だけよりも格段に伝わりやすく検証しやすい。絵と文字と言葉と身振りなど総合的な表現によるコミュニケーションが必要な状況が本研究の特徴の一つで、活動を通して繰り返し絵を描くことで絵を活用する日常力が養われたと言える。

また、絵札原画のための聞き取りでは、アイデアスケッチや下絵を仰木の方々に見せながら修正を重ねた。私（永江）との作品面談を重ね、原画を完成させていった。一般的に絵画作品は一人で、自分のイメージだけで仕上げ、発表後に他者の視点からの感想や評価を受けることが多い。一方で、カルタ原画の制作では、絵柄は「素朴で親しみやすいもの」、内容は語り手（仰木の方々）の思い出の情景や気持ちを表現するという他者との連携で目的に合った絵づくりを進めていった。クライアントから注文を受け目的に応じた絵を仕上げるイラストレーションの制作手法を実践的に学んだ。

3．時間をかけてステップを積み重ねひとつのものを創りあげる力

カルタの完成まで数多くのステップがあった。例えば、学生の最初の仕事は、一八五枚のアンケートにびっしりと書かれた手書きの文章を分類しながらテキスト化する作業だったが、学生の感想コメントを抜粋すると「アンケートで得たものが膨大で多岐にわたっていたので、最初は呆然としました。」「思っていたよりテキストの量が多くて不安になりましたが、じっくりカテゴリー分けを進めていく中で少しずつ仰木の昔の暮らしに詳しくなっていくのが楽しかったです。」とある。チームとして協力して段取りを決めて手分けし、自分の仕事をやり遂げることで全体の成果が着実にまとまっていくことが実感できたと思う。そして、それらの成果の結晶として「仰木ふるさとカルタ」という商品が完成し、販売され、また「仰木ふるさと物語」という五感体験アンケートやふるさとマンダラをまとめた冊子も発行され、最後までやり遂げた確かな手応えが自信になったと思う。

4．地域のことやそれぞれの居場所を大切に考える姿勢

仰木という地域に入り、その土地の「人、もの、こと」に接していろいろなことを知った。土地の記憶とも言える人々の思い出を、精一杯理解し共感を持ってふるさとカルタという「かたち」に結実させた。そうした関わりを通し

て、学生は「仰木は第二のふるさとのような存在になりました。」と感想に書いたり、今自分が暮らしている地域との比較でさまざまなことを感じ、考えている。そうしたことで、これからの地域活性化の担い手としての芽が育まれたと思う。また、子どもから高齢者まで我々が生きる場として「家庭、学校、会社、サークル、地域、日本、世界‥」といったさまざまな居場所について、何が大切か、どうすれば人が幸せに暮らせるかを考え実践する姿勢を育めたのではないかと思う。

5. 多様性のある価値観を理解する力

里山の生活文化の聞き取り調査は、都市型の価値観の中で育ってきた学生にとって、全く違った価値観との遭遇である。一般的には全く違った価値観を共感を持って理解したり受け入れることは容易ではないが、本研究では「思い出」という具体的な暮らしの様子を聞き取ることで仮想体験を通して他者の価値観を肯定的に理解しやすい。里山の暮らしの中で育まれてきた価値観を理解し、それらの内にひそむ美しさ、かけがえのなさ、心の豊かさを感じ取ること、それに加えて他者の抱いている価値観の多様性に気づくことができたと思われる。価値観の多様性の理解は他者を尊重する気持ちにつながり、ひいては、自尊感情を高めることにもつながるだろう。

三-三　**学生スタッフの活動報告**

本研究活動を振り返ってのコメントなど

平成二五年（二〇一三）にカルタが完成した後、学生スタッフに活動報告として本研究活動を振り返って「五段階評価シート」と「コメント・まとめシート」を書いてもらった。そこから学生の学びを読み取ることができるので簡単に紹介する。

三-三-一　**五段階評価シート**

「五段階評価シート」（表1）では、本研究活動を十四のステップに分け、それぞれのステップごとに「活動前の不安」「活動前の期待」「活動後の満足度」「自身の変化や成長」という項目について、「1＝低い・小さい」「2＝やや低め・小さめ」「3＝どちらとも言えない」「4＝やや高め・大きめ」「5＝高い・大きい」の五段階で評価してもらった。「不安」の項目はマイナス評価とし「−1」から「−5」とした（数字の意味は同様）。また、十五番目の項目として「2年間の研究活動全体の評価」を入れた。

表1を参照してほしい。数値は平均値を表示した。各ステップの活動参加（評価）人数はまちまちである。

各ステップの「活動前の不安」を比べると、「11. 京都新聞の@キャンパスの記事編集」の不安が−4.2で一番高く、次いで「6. 下絵から原画制作・完成」「4. 生活文化・読み札の聞き取り調査」の順で高い。人との関わりの中ではじめて取

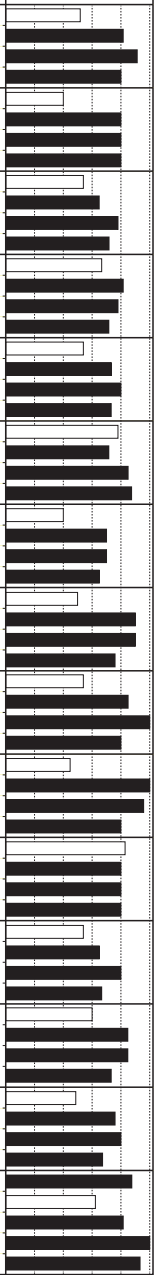
り組むことやその責任に対する不安感が読み取れる。

それに対して「活動後の満足度」は、おおむね４以上で満足度は高かった。

「15. ２年間の研究活動全体の評価」では、満足度は４・４と高く、「プロジェクトの意義」は全員が５、今後も地域に関わる活動を機会があればやってみたいという「地域活動の興味・関心」も４・７と非常に高く、今後の活躍に期待したい。

表１：学生スタッフの活動報告「５段階評価シート」の集計

活動のステップなど	回答項目	平均
1. 応募時と研究活動終了後の比較　応募時の	不安	−2.6
	期待	4.1
活動を終えての	満足度	4.6
	変化や成長	4
2. 事前学習（仰木祭り、映像鑑賞など）	不安	−2
	期待	4
	満足度	4
	変化や成長	4
3. 五感体験アンケート ～ ふるさとマンダラ	不安	−2.7
	期待	3.3
	満足度	3.9
	変化や成長	3.6
4. 生活文化・読み札の聞き取り調査	不安	−3.3
	期待	4.1
	満足度	3.9
	変化や成長	3.6
5. 絵にするための聞き取り調査	不安	−2.7
	期待	3.7
	満足度	4
	変化や成長	3.7
6. 下絵から原画制作・完成	不安	−3.9
	期待	3.6
	満足度	4.3
	変化や成長	4.4
7. コスモロジー展の準備など	不安	−2
	期待	3.5
	満足度	3.5
	変化や成長	3.3
8. 食のWS（聞き取りと納豆餅づくり）	不安	−2.5
	期待	4.5
	満足度	4.5
	変化や成長	3.8
9. わら草履づくり	不安	−2.7
	期待	4.3
	満足度	5
	変化や成長	4
10. 手づくり味噌づくり	不安	−2.3
	期待	5
	満足度	4.8
	変化や成長	4
11. 京都新聞@キャンパスの記事編集	不安	−4.2
	期待	4
	満足度	4
	変化や成長	4
12. 仰木夏祭りで聞き取りWS	不安	−2.7
	期待	3.3
	満足度	4
	変化や成長	3.3
13. 印刷会社アインズ工場見学	不安	−3
	期待	4.3
	満足度	4.3
	変化や成長	3.7
14. OC、ホームカミングデーでカルタ遊び	不安	−2.4
	期待	3.8
	満足度	4
	変化や成長	3.4
15. 2年間の研究活動全体の評価	満足度	4.4
	心残り	−3.1
	変化や成長	4.1
プロジェクトの意義		5
地域活動の興味・関心		4.7



五段階評価は、1＝低い・小さい　2＝やや低め・小さめ　3＝どちらとも言えない　4＝やや高め・大きめ　5＝高い・大きい　で評価してもらった。
「不安」と「心残り」の項目はマイナス評価とし−1～−5とした（数字の意味は同様）。
左表は、それぞれの項目の平均を示している。

三-三-二　コメント・まとめシート

「コメント・まとめシート」から一部だが学生スタッフの実感のこもった印象的なコメントを抜粋する。

1．応募時の気持ちについて

・形があって、用途のあるものを作れるのではないかという期待がありました。そして、多くの人にふれてもらえるのではと思いました。また、思い出や記憶を再現する際にたくさんの資料をあたるのではと予想しました。説得力のある、ごまかしのきかない事実に基づいたイラストレーション制作に挑戦できると思いました。活動を通して、地元の方々と話していくうちに、自分とかけ離れた遠いものを絵にする意義のある活動という思いから、もっと身近なものに変化しました。肩の力を抜いて、意義云々を抜いて、楽しく参加できたと思います。

・一年生の時から仰木や里山、自然に関係するプロジェクトに参加してきた中で、仰木の自然・生活・人とのつながりの魅力を知り、より深くそのことについて知りたいと思ったから。また、昔はあって今はなくなったこと、今でも残っていることなどその生活の変化に興味があったから。活動を通して、仰木の方がどれだけ仰木を大切に思っているかをじかに感じることが出来て、わたしも自分の生まれ育った街のことについて知りたいと思うようになった。

2．五感体験アンケートからふるさとマンダラの作成、読み札聞き取りまでについて

・五感体験アンケートのテキスト化は、わからない言葉が多くて理解せずに文章化する作業は大変でした。聞き取り調査は何を質問すべきか考えるのが大変でした。聞き取りの最中でも、実物がないのでおばあちゃんたちの言葉を自分の中で想像しながら理解していかないといけませんでした。自分が見たことのない風景を理解するのはとても困難でした。それにおばあちゃんたちも次から次へ話してくれるのでついて行くのに必死でした。理解しているつもりでも、私が思っている風景とおばあちゃん達の頭の中にある風景はきっと異なっている。話を聞いていると、本当の事がわからないもどかしさがありました。また言葉で風景を伝えあうことも難しかった。

3．絵札制作とその聞き取りについて

・あれだけ根気よく作品に取り組んだことがなかったのでとてもいい経験になりました。手直し手直しの繰り返しは最後の方は正直こたえましたが、下絵の確認をおじいちゃんやおばあちゃんにしていただいたときに「そうそうこんなんだった！」と言ってくださったことが励みになりました。

・絵札の制作では、今はもう残っていない情景を描かないといけなかったので、仰木の方の思い出と私の想像のつじつま合わせが難しかったです。また、例えば「ゆお」の絵札だと、年代等によって材質の認識が違ったり今現在存在している農具小屋との思い違いがあったりと、最終的な絵にたどり着くまでの修正が大変でした。何度も聞き取りを重ねるうちに、絵を見て懐かしがっていただいたり派生した思い出話が聞けたりして、そういった反応が見られるようになってくると大きな達成感を感じました。

4．体験・ワークショップなどについて

・当初はカルタの制作だけをするプロジェクトだと思っていて、こんなに色んな体験をさせてもらえると思っていなかったのでとても有り難いことだと感じました。味噌作りや納豆餅作り、藁草履作りなどは自分一人ではなかなか作れないものを作ることが出来、楽しく新鮮な体験になりました。特に印象に残っているのは京都新聞社さんの記事制作で、自分

の絵が新聞に載るとは思ってもみなかったのでとても嬉しかったし、記事制作の手順も知ることができて勉強になりました。

・聞き取りで聞いていたことを実際に体験できて、話や絵がより真実味を増したと思いました。納豆餅も自分で食べることでどんな食感なのかも分かり、おじいさんおばあさんたちと感覚を共有できるようになったと思います。味噌作りでは自分で味噌を作れると聞いた時は驚きました。味噌は買うのが当たり前で、ものすごく特別な何かが必要なものだと思っていたからです。技術も必要なところがありましたが工程をみると意外とシンプルで、自分が味噌作りに関われたと思うと感動しました。

5．仰木ふるさとカルタの役割とは？どのように活かされると良いと思うか

・カルタができたときは大変うれしく思いました。ですがこれが本当に何かの役に立てることが出来るのかどうかは全く分かりませんでした。このあいだ仰木の里小学校でカルタ会をしたとき、このカルタはこうやって楽しむためにあるのだと感じることが出来ました。合間に昔はこんなことをしていたなどお話をすることで子どもたちも驚きもして、知ることの楽しさを感じられたのではないかと思います。そこから子どもたちの興味を広げていくきっかけづくりをすることがこのカルタの役割になるのではないかと思いました。子どもたちは自分と身近な話に反応が良かったように思います。遊び方（魚つかみ）や昔の子どもの仕事（水汲み）の話などです。

・一番の役割は、世代間の交流の手助けだと思っています。今回私自身、かるたを通しておじいちゃんおばあちゃんとふれあってみて、昔のお話を聞くのがとても新鮮でおもしろかったし、おじいちゃんおばあちゃんもこのプロジェクトを通して色んな思い出話を喋ってくれて、お互いに楽しく交流することが出来ました。話のネタになるだけでなく、仰木といういろんな歴史の残る地区を語り継いでいくのにも一役かってくれるカルタになると思っています。納豆餅など仰木固有の伝統もあれば、日本のいろんな地域で受け継がれてきた伝統も描かれているので、仰木以外の地域でもカルタが世代間の交流に活かされたり、もっと言えば地域間の交流にもつながっていくととても嬉しいです。

・世界的に珍しいと思うから世界遺産に登録したり、文化遺産にするけれど、日常的な出来事を残していこうとするのは、なかなかないと思います。しかし、柳宗理が茶碗や箸などの民芸に対して高い評価をしていたように、日常にあるからこそ美しいもの、面白いものがたくさんあるのではないかと思います。しかもこうした出来事は世界遺産・文化遺産とは違って実際に自分たちの生活に結びついていたことなので、より親近感のもてることではないでしょうか。昔の暮らしに対する理解を遊びながら多くの人と深めることができ、後世に語り継いでいくことができる、遺産だと思います。今の時代だからこそ昔の話をカルタを通しながら考え、多くの人と語り合える場を作ることに活かせたら良いと思います。

6．あなたにとって仰木とはどのような存在ですか？地域や人と関わることについて

・地域や人と関わることで、似た土地、環境であっても、人々の、特におじいちゃんおばあちゃんたちの元気の違いで地域の印象がこれほど変わるものだとは思いませんでした。あと地域に誇りがあるかどうかということも。自信があるかないかは、とても重要なことだと思いました。仰木は特別な地域だと思います。だからこそ、おじいちゃんおばあちゃんたちが元気なのだと思います。

・仰木の方の生活や自然とのつながりを知り、仰木を大切にする思いを感じることで、わたしも自分の生まれ育った街を大切にしたいと思わせてくれた存在。普段の私の生活の場とは異なる雰囲気を持ち、緩やかな時間が流れる仰木という場所が私にはとても魅力的だった。外からみる仰

木と内からみる仰木の違いを聞き取り調査等を通じて感じ、仰木の伝統を守っていきたい年配の方と、個の無い中で生活は出来ないと言う若者のどちらの思いも知ることが出来た。カルタを制作することで若者は昔の生活がどういうものだったのか知る機会が出来たと思う。年配の方も若者も今と昔の違いを知り、今あるもの・今続けていることがこれ以上無くならなければ良いと思う。

・同じ世界に住んでいても、自分の居場所によってこんなにも暮らしが異なることを知った。せわしなく生きている人、穏やかに生きている人、ひっそりと生きている人など様々な人が居る。自分の居場所でみんなそれぞれ自分の生活をしている。自然の本当の良さを心から感じ、知ることが出来れば人間中心の考えは減る。自然に活かされている、大地に人間が住まわせてもらっている、と少しでも思う事が出来れば、むやみに何も考えず建物を建てたりしない。紙一枚だって木から出来ている。将来モノを作っていく立場に立つなら、自然の重みに適うモノをつくりたい。

・約二年間を通して仰木と関わってみて、第二のふるさとのような存在になりました。棚田や仰木祭りなど、これから残していくべき財産も多く、いろんな場所にどんどん発信していける地区でもあると感じました。現代ではあまりかんじることのできない昔ながらの生活や人と人との結びつきが残る素敵な地域であり、地元の人とのつながりもできたので、大学を卒業してもお祭りに行ったりカフェをのぞいたり、関わり続けていきたいと思います。

・私は仰木を第二の故郷の様に感じています。最初は全く知らない人たちだったけれど、一緒になってプロジェクトやイベントをしていく中でお互いのことを知ったり思いやったりできました。一つの集落の良さを見つめていくにはそこに住む人たちがどのように生きているのか何を考えているのか知ることがとても大切なのだと感じました。もともと「まちづくり」に関心があった私は、地域を良くしていく活動をしている人たちとたくさん出会い、そんな人をつなげていく橋渡し役のような立場に居たいと思うようになりました。

7．その他

・仰木の里小学校でのカルタ会を終えて

学年別のチームに分けたことで、同じくらいの強さの友達と対戦出来たのでよかったと思います。「難しい字があるからこのカルタやだー」と言われてしまう事もありました。自分の知らない字があると不公平な気持ちになってしまうのかもしれません。最初に難しい字があるよと教えたのは良かったと思いますが、意識しすぎてお手つきしてしまった子もいました。お手つきしてしまうのもゲーム性があるということで面白いとは思うので、次回のカルタ会も今回のように説明をきちんとすればよいと思いました。ヒントで取ってしまう子がいましたが、分かった時につい手を出してしまったのだなと思います。最初に手は体の後ろに組んでというルールをつけると守らないといけないという意識になり、お手つきも減ったように思います。話声で読み札の声が聞こえないことがありましたが、時間が進むにつれて真剣さが増すとみんな聞こうという気持ちが強まり、すぐに静かになれるようになったと思います。合間に絵札のお話をするときは、子どもたちの生活により身近なものに良く反応してくれたと思います。当時子どもがどうであったのかという目線で話が出来る札が増えればより食い付きが良くなると思います。

三―四　教育プログラムとしてのカルタ制作

二つの実践事例「高島市思い出かるた」と「仰木ふるさとカルタ」の比較

教育プログラムとしてカルタ制作を考える上で、学生の在学

期間を考えると二年間の研究期間はやや長い。本研究の三年前に九ヶ月の期間で取り組んだ先行事例との比較を通して、プログラムの組み方の幅を広げておきたい。

平成二〇年（二〇〇八）六月～翌三月にかけて学生と共に取り組んだ、滋賀県高島市社会福祉協議会との受託連携事業「高島市思い出かるた」の制作を、本研究と比較してみる。

「高島市思い出かるた」は、依頼を受けた段階で社会福祉協議会およびデイサービスセンターの職員が聞き取りをすすめており、「読み札」の文言はすでにできあがっていた。研究活動の内容は「読み札をもとにした聞き取りをし原画を制作、製品としてデザインする」ことまで。学生は絵師として参加し、研究・制作期間は約九ヶ月だった。読み札を絵にしていくために、「きらり高島デイサービスセンター」を学生が五回ずつ訪問して、利用者の方々にお話を聞きながらカルタ原画を仕上げていった。読み札をもとにした「地域に共通する思い出の情景」の再現を目指したため、聞き取りの対象は「訪問した日のデイサービスセンター利用者の方」とした。常に一定数の地域の方々が居られるので、学生の都合に合わせて訪問日を設定できるメリットがあった。また、駅から徒歩で行ける場所であったことも、個々の学生が授業のないときに聞き取り訪問を計画しスケジュールを組むことができ、比較的スムーズに研究を進めることができた。

一方、本研究では、本学附属近江学研究所から仰木学区老人クラブ連合会に協力を依頼し、研究活動の内容は「ふるさと五感体験アンケートを実施、それを整理して仰木の生活文化を概観できるふるさとマンダラを作成、それをベースに聞き取り調査をして読み札決定、絵札のための聞き取り調査をして原画制作、商品としてデザインしカルタ完成」まで。研究・制作期間は約二年間だった。前者と比べて研究活動が長期に渡った理由は、生活文化の聞き取り調査から始めて読み札をつくるまでの部分の期間であるが、農村の特性である一年間の暮らしのサイクルも大きく関係している。仰木では兼業農家が多く、農作業や水路の管理などにおいて高齢の方々が元気に現役で働いておられる。また、祭りのことや山林の保全・伐採なども同様で、老人クラブのみなさんも一年を通して大変お忙しい。そのため、「田植えや稲刈りといった繁忙期の後に法事などいろいろあって、その後やなぁ。」という感じで、老人クラブのみなさんに集まっていただく時期を限定せざるを得なかった。また、バスの便が少なく平日に授業と両立する形で個々に学生が訪問するのは難しく、日時を決めて地域の方に集まっていただきスタッフそろって訪問し聞き取り調査などを行う形をとった。そのため土日を使ったスケジュール調整をした。

その他の点も表2で比較しているのでご参照いただきたい。

仰木ふるさとカルタのケース	高島市思い出かるたのケース
また、実体験として、納豆餅づくり、わら草履づくり、手づくり味噌づくり、京都新聞夕刊「@キャンパス」に「次世代へ　結の心をつなぐ」の記事編集・掲載、俵編みの実演、蜂の子ごはんを食べる　など。	高島歴史民俗資料館を見学し、昔の生活道具などをスケッチしたほか、昔の風景の名残のある場所を数カ所回る。
9. 絵札原画制作の留意点 「ぬくもり」を伝えるために、すべての絵札に必ず「人」を入れることにして、画材はアナログ画材に限定し、色鉛筆や鉛筆による線描きに、水彩絵具やアクリル絵具で着彩した。	**9. 絵札原画制作の留意点** 「必ず人を描き入れて、親しみやすいかるたにしてください」という希望があった。聞き取りをした実感をもとに、アナログ画材、デジタル画材の選択も含めて各自が自分の絵柄で制作した。
10. 作品面談（永江からアドバイス） 各学生　5〜12回ずつ	**10. 作品面談（永江からアドバイス）** 各学生　2〜5回
11. カルタ製品化 絵札　48枚、 読み札　48枚 札のサイズ　120×85mm （合紙により厚さ約0.9mm） パッケージサイズ　176×125×60mm 同梱：仰木のくらし解説　A3 両面カラー 部数　初版 300 部、 第2 刷 400 部 販売　2,800 円（税別）	**11. カルタ製品化** 絵札　48 枚 札のサイズ　148×10mm （ポストカードタイプ） パッケージサイズ　210×155×15mm 同梱：読み札一覧を含むブライヤー A4 両面モノクロ 部数　25 部 販売　なし
12. 展覧会などによる発表 ・展覧会 「仰木　水と記憶のコスモロジー」 平成23 年10月23日〜11月27日 成安造形大学【キャンパスが美術館】 ライトギャラリーにて 本展は、聞き取り調査のまとめまでの中間発表として開催。 ・展覧会 「仰木ふるさとカルタ原画展〜在りし日の里山のくらし」 平成25 年10 月29 日〜12 月1 日 成安造形大学【キャンパスが美術館】 G 棟103（ライトギャラリー横）にて 本展は、カルタ完成後、研究活動全般及び成果発表として開催。　ほか	**12. 展覧会などによる発表** 展覧会 「高島市思い出かるた原画展」 平成21 年8 月23 日 高島市民会館　玄関ホール 本展は、 ニッセイ財団高齢社会先駆的事業シンポジウム『ふるさと絵屏風で 地域のまちづくり』基調講演：茂木健一郎（脳科学者）の関連展示として開催。

表２：カルタ制作の２つの実践事例の比較

仰木ふるさとカルタのケース	高島市思い出かるたのケース
１．研究・制作期間 ２年間　平成23年４月～平成25年３月	**１．研究・制作期間** ９ヶ月間　平成20年６月～平成21年３月
２．依頼 本学附属近江学研究所から仰木学区老人クラブに協力を依頼する。	**２．依頼（受託連携事業）** 高島市社会福祉協議会から本学芸術文化交流センターに依頼される。
３．研究活動の内容 ふるさと五感体験アンケートを実施、それを整理して仰木の生活文化を概観できるふるさとマンダラを作成、それをベースに聞き取り調査をして読み札決定、絵札のための聞き取り調査をして原画制作、製品としてデザインしカルタ完成まで。	**３．研究活動の内容** 読み札は社会福祉協議会およびデイサービスセンターの職員が聞き取りをすすめてすでに完成した段階で、研究活動としては、読み札をもとにした聞き取りをし原画を制作、製品としてデザインするところまでを担当。
４．教職員スタッフ 永江弘之、大原歩、加藤賢治 （いずれも、近江学研究所研究員）	**４．教職員スタッフ** 永江弘之 （イラストレーション教員）
５．学生スタッフ イラストレーションコース　８名 住環境デザインコース　　４名	**５．学生スタッフ** イラストレーションクラス　10名
６．聞き取り調査の方法 読み札決定のための聞き取り（仰木の生活文化の掘り起こし）と、絵札制作のための聞き取りの２段階。いずれも、土日などに４地区ごとに自治会館などへ老人クラブの方数名～10名程度集まっていただいて、スタッフでそろって訪問して聞き取り会。	**６．聞き取り調査の方法** 絵札制作のための聞き取りのみ。個々の学生スタッフが授業のない時間帯（土曜も含む）に「きらり高島デイサービスセンター」を訪問し、その日の利用者の方に読み札をもとに聞き取りを行う。
７．聞き取り訪問回数 ・読み札決定までの聞き取り会は　９回 そのうち各学生　３～７回参加 ・絵札制作のための聞き取り会は　５回 そのうち各学生　１～４回参加	**７．聞き取り訪問回数** 絵札制作の聞き取りのみ各学生　５回ずつ
８．絵札制作までのその他の活動 ガイダンス、仰木祭り見学、仰木の里山映像鑑賞、五感体験アンケート整理及びふるさとマンダラ作成（12回）、展覧会準備（３回）など	**８．絵札制作までのその他の活動** ガイダンス、打合せ（３回）など

第四章　「仰木ふるさとカルタ」研究成果のまとめと活用（担当：大原）

四-一　冊子「仰木ふるさと物語」制作

四-一-一　仰木ふるさと物語とは

「仰木ふるさと物語」は、この「仰木ふるさとカルタ」を制作する初めの作業として仰木学区老人クラブ連合会のご協力により実施した「仰木ふるさと五感体験アンケート」で回収した一八五枚のアンケートの記述をまとめたものと、その記述内容を図解化した「仰木ふるさとマンダラ」を集録した冊子として、永江弘之、大原歩が編集・執筆した。

膨大なアンケートの記述からは、仰木の方々の多様な生活を物語る記憶が手に取るように伝わり、その思い出を冊子にまとめることで、次世代に記録を残すことを目的とした。

四-一-二　形態・表記について

形態は、A4サイズ（縦二一〇ミリ×横二九七ミリ）を横版・右開きとした。横版にすることで、アンケートの文章を縦書きに読みやすくし、また、仰木ふるさとマンダラをなるべく大きく掲載できるよう意図した。

アンケートでは五感それぞれの項目で記入していただいているが、本書ではそれらの記述を「仰木ふるさとマンダラ」を作成する際に分類、整理した形で掲載している。全てのアンケートの記述を内容（エピソード）によるまとまりで十二のカテゴリー（同じような性質のものが含まれる範囲）に分け、さらにそれぞれの内容から共通のキーワードを探ってグループ化した形で掲載している。分類整理については、テキスト入力を担当した研究スタッフが判断した。言葉遣いなどは、原文のままテキスト化するよう心がけた。しかし、手書き文字が読み取りにくい部分や誤字と思われる箇所は、研究スタッフが解釈して修正を加えた。

アンケートの執筆者情報等の表記は、氏名の記入があった場合も個人情報の点から氏名は掲載せず、以下のように表記し、情報として検証できるように工夫した。

・文末のかっこ内に、上から順に（在住地、アンケートを回収した二〇一一年時の年齢、性別）と記した。

・仰木地区では、在住地である字によって風習に違いがあるため、その比較にもなるように在住地を示した。また、年齢や性別の表記もコメント内容を理解するために重要と考えた。

・かっこの後の番号は、一八五枚のアンケート番号である。この番号によって原本のアンケート資料を辿れるように表記した。（写真1・2）

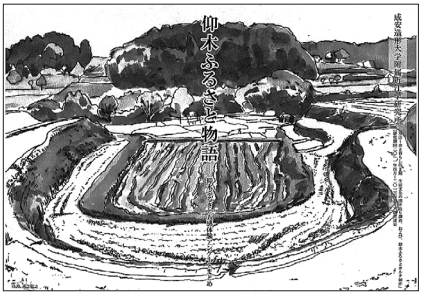


写真1：「仰木ふるさと物語」（表紙）

写真2：「仰木ふるさと物語」（紙面）

四-二　「仰木ふるさとカルタ」の活用

「仰木ふるさとカルタ」が二〇一三年四月に完成し、その後、地元地域や滋賀県下の地域からの依頼などにより、「仰木ふるさとカルタ」や原画などを活用する活動がスタートした。二〇一六年一月までに活動した内容を年度ごとに以下の項目順にまとめた。

1、展示・販売
2、カルタ会
3、展覧会・展示会
4、研究活動発表・講演会
5、授業

四-二-一　平成二五年度（二〇一三）

■展示・販売

①成安造形大学オープンキャンパスにて展示・販売

4月28日、5月18日、6月9日、7月28日、9月8日
主催・会場：成安造形大学

②仰木祭りにて展示・販売　5月3日

会場：大津市立仰木小学校前
担当：永江・大原・小林・鈴木・後藤

■カルタ会

①「カルタお披露目・カルタ会」　5月18日

主催：成安造形大学附属近江学研究所
会場：成安造形大学
担当：永江・益・日下部・後藤・小林・鈴木・長野・宮本

成安造形大学創立二〇周年記念「セイアン・ホームカミングデー２０１５」にて、「仰木ふるさとカルタ」のお披露目とカルタ会を開催した。制作に関わった学生が参加し、卒業生や大学関係者へカルタ会を通して研究活動の成果を伝えた。（写真３）

写真3：カルタのお披露目・カルタ会（セイアン・ホームカミングデーにて）

②「仰木ふるさとカルタ大会」　6月29日

主催：大津市立仰木の里小学校ＰＴＡ・仰木の里東小学校ＰＴＡ

会場：大津市立仰木の里小学校体育館

担当：永江・大原・日下部・後藤

仰木の里小学校と仰木の里東小学校各ＰＴＡの依頼により、「子ども会」にてカルタ大会を行った。「仰木を知ろう」というテーマで、前半一時間は、仰木太鼓保存会少年部の子どもたちによる「仰木太鼓」の体験レクチャー、後半は仰木の暮らしを学ぶ「仰木ふるさとカルタ大会」を実施。カルタ大会では、研究スタッフで当時空間デザイン領域四年の日下部まこさんと後藤美子さんが司会進行やカルタの解説を務めた。参加した子どもたちを年代別に四グループに分け、各グループに校長先生や親御さんに入ってもらい補佐いただいた。（写真4・5）

写真4：仰木の里小PTA・里東小PTA子供会でのカルタ会

写真5：カルタの解説を行う学生スタッフ

③「仰木ふるさとカルタ大会」　8月3日

主催：仰木ふれあい夏祭り実行委員会・成安造形大学附属近江学研究所

会場：大津市立仰木太鼓会館

担当：永江・梅下・鈴木・日下部・益・小林

仰木ふるさとカルタのお披露目として、仰木ふれあい夏祭りにて「仰木ふるさとカルタ大会」を行った。会場となる仰木

太鼓会館にカルタの制作過程や、完成したカルタの原画などを展示するブースも設営した。カルタ大会では、カルタの制作にご協力いただいた仰木学区老人クラブ連合会長の堀井さんにカルタの解説をしていただいた。三ゲームを行い、小学生・中学生・親世代・おじいさんおばあさんたちと学生とがみんなでカルタを楽しんだ。カルタ大会で勝った人には学生が手づくりしたカルタメダルを授与した。（写真6・7）

写真6：仰木ふれあい夏祭りにてカルタを一緒に作り上げた老人クラブさんとのカルタ会

写真7：１番多く札を集めた人にプレゼントする学生スタッフ手づくりの「カルタメダル」

④「新年カルタ会」　２０１４年１月１日、２日

主催・会場：里湯昔話 雄山荘

大津市雄琴の温泉旅館「里湯昔話 雄山荘」にて「新年カルタ会」。旅館からの依頼により、新年の企画としてカルタ会を実施。研究スタッフは参加しなかったが、ホテル内にカルタ制作過程を解説するパネルを展示した。また、カルタの販売も行った。

■展覧会・展示会

①展覧会　「仰木ふるさとカルタ原画展～在りし日の里山のくらし」　10月29日～12月1日

主催：成安造形大学附属近江学研究所

会場：成安造形大学【キャンパスが美術館】G棟１０３（ライトギャラリー横）

開学二〇周年記念事業　二〇一三秋の芸術月間ＳＥＩＡＮ ＡＲＴＳ ＡＴＴＥＮＴＩＯＮ ＶＯＬ．５「Ｓｉｔｅｓ－ふうこうのありか－」の展示として、研究活動「仰木の生活文化の聞き取り調査、及び、仰木ふるさとカルタ制作プロジェクト」の二年間にわたる調査・研究活動の成果をまとめ、カルタ原画や仰木でむかし使われていた民具や野良着などと共に展示した。また、読み札作成の際にご協力いただいた畦草（けいそう）会（かい）（仰木の俳句の会）の山村修三さんと飯田一枝さんにカルタを読み上げていただいた音声を会場に流した。抑揚をつけカルタを読み上げる声につつまれた会場で、五感で味わう展覧会を意図した。

展示協力：仰木学区自治連合会、大津市立仰木小学校、仰木学区老人クラブ連合会

技術協力：成安造形大学 情報メディアセンター
音源録音・編集・オーサリング：五十嵐亮介
（写真8～15）

写真11：カルタの読み札を高らかに読み上げる飯田一枝さん

写真8：仰木小学校から借用した道具は手入れをして展示

写真12：展覧会案内ＤＭ

写真9：展示レイアウトを考える

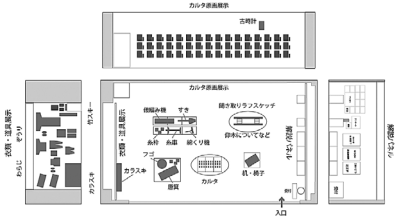


写真13：展覧会レイアウト図

写真10：会場に流す音声の録音を行う山村修三さん

②展示会　仰木学区文化祭「仰木ふるさとカルタ原画展」

11月2日、3日

主催：仰木学区文化協会

会場：大津市立仰木太鼓会館

写真14：展示風景

写真15：展示風景

■研究活動発表・講演会

①「仰木人権教育研究会」　11月6日

主催：仰木人権教育研究会　人権学習・地域教材を考える部会

会場：成安造形大学　I棟プレゼンルーム

担当：加藤・大原

仰木人権教育研究会は、仰木・仰木の里学区の幼・小・中・高等学校および本学の教職員が会員で、地域の教育教材について学ぶ講座を年に一度実施されている。担当の仰木の里小学校の先生がカルタに関心を持たれ、近江学研究所の地域における役割や、研究活動の経緯・完成したカルタについて発表し、展覧会「仰木ふるさとカルタ原画展～在りし日の里山のくらし」の見学を行った。

・発表　「近江学研究所の活動について」加藤賢治

・発表　「仰木ふるさとカルタができるまで」大原歩

（写真16・17）

写真16：人権教育研究会にて、カルタの完成に至る経緯を発表

写真17：展覧会場の見学も行う

②「仰木の里西自治会　交流会」　11月16日

主催：仰木の里西自治会

会場：成安造形大学　I棟プレゼンルーム

担当：永江・加藤・大原

仰木の里西自治会が年に一度開催する交流会として、仰木の暮らしを学びたいと依頼があり、展覧会の解説・仰木ふるさとカルタ会・仰木の食文化を体験する「仰木の納豆餅づくり体験」を行った。納豆餅づくりは、仰木ふれあい青空市に協力をお願いし西村ナツエさん、北川純子さんに作っていただいた。近江学研究所からは、カルタの制作過程や研究活動の取り組みについて解説を行った。（写真18・19）

写真18：仰木の里西自治会から依頼にてカルタの解説をおこなった

写真19：仰木独自の食文化、納豆餅づくりを教わる

③平成25年度新採職員フォローコース「近江地元学研修」

10月21日、22日

主催：滋賀県政策研修センター

会場：大津市立仰木太鼓会館

滋賀県の新採用職員対象の「近江地元学研修」の研修先として仰木地区が選ばれ、仰木学区老人クラブが職員研修を受け入れた。二日間のプログラムの中で、仰木ふるさとカルタ会を開き、昔の仰木の暮らしを伝えるツールとして活用された。

■授業

①仰木の里東小学校　総合的な学習「タイムスリップ　昔のくらし」　2014年2月5日

主催：大津市立仰木の里東小学校　三年生担当教員

会場：大津市立仰木の里東小学校

担当：永江・大原、仰木地区から滝川幸作さん・山村修三さん・上坂澄子さん・深田よし乃さん

十一月の「仰木人権教育研究会」に参加した仰木の里東小学校の鈴木先生から、担当学年の授業に活用したいと依頼があった。大原が仰木の方たちをコーディネートし、仰木の里東小学校三年生対象の総合的な学習の一環の授業の特別講師として参加。仰木ふるさとカルタに出てくる昔の暮らしについてお話し、児童たちが事前にまとめた疑問や質問に答えた。（写真20～23）

写真22：熱心に聞き取りをする子どもたち

写真20：子どもたちから質問をうける山村修三さんと深田よし乃さん

写真23：授業の風景

写真21：昔のくらしについてお話をする滝川幸作さん（中央）と上坂澄子さん（右）

四―二―二　平成二六年度（二〇一四）

■展示・販売

①成安造形大学オープンキャンパスにて展示・販売　6月8日
主催・会場：成安造形大学

■展覧会・展示会

①展示会　仰木ふれあい夏祭り「仰木ふるさとカルタ　原画展示」　8月2日
主催：仰木ふれあい夏祭り実行委員会
会場：仰木ふれあい夏祭り会場　大津市立仰木太鼓会館

②展覧会　「仰木ふるさとカルタ　布絵本」
7月1日～31日　会場：滋賀銀行本店ロビー
8月2日　会場：仰木ふれあい夏祭り会場　大津市立仰木太鼓会館
9月4日～27日　会場：成安造形大学　聚英館一階
主催：ボランティアグループ「布絵本サークルさえずり」

大津市のボランティアグループ「布絵本サークルさえずり」（昭和五七年結成）のみなさんが、「仰木ふるさとカルタ」を題材に布カルタの作品を制作。二〇一三年七月～二〇一四年四月の九ヶ月をかけて完成し、二〇一四年七月「滋賀銀行本店ロビー」、八月「仰木ふれあい夏祭り」、九月「成安造形大学聚英館1階ロビー」にて展示を行った。手芸好きの十四

名の主婦のお母さんたちが、一年近くをかけて制作に取り組んだ布カルタは、様々な布をパッチワークのように立体的に継ぎ合わせて制作。ひと針ひと針の手触り感のある作品は、表情豊かで温かくやさしい風合いが感じられた。（写真24～26）

写真25：題材により布を染めるところから手づくりで行われている

写真26：８月２日仰木ふれあい夏祭りにてお披露目展示

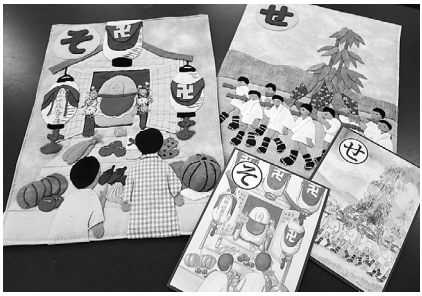


写真24：仰木ふるさとカルタの題材を布でつくった「布カルタ」

③展示会　仰木学区文化祭「仰木ふるさとカルタと仰木ふるさとマンダラの展示」　11月1日～2日
主催：仰木学区文化協会
会場：大津市立仰木太鼓会館

④展示会　仰木の里学区文化祭「仰木ふるさとカルタ　原画展」　11月8日～9日
主催：仰木の里学区文化協会
会場：仰木の里市民センター

■授業

①「近江学B　地域を知ることの大切さを学ぶ／10週目　仰木ふるさとカルタ」　6月12日
主催・会場：成安造形大学
担当：永江
本学のカリキュラムで近江学研究所が担当する授業「近江学B」において、チェーンレクチャーの十週目に「仰木ふるさとカルタの取り組み」について授業を行った。

②北大津高等学校　特別講座「仰木の生活文化について」　7月11日
主催・会場：滋賀県立北大津高等学校　国際文化コース
受講生徒数：約四〇名／グループテーブル六か所（二六～七名）

担当：永江・加藤・大原

北大津高校国際文化コースより依頼があり、国際文化コース二年生対象の特別講座として「仰木ふるさとカルタ」を用いて仰木の生活文化を知る授業を行う。「近江の里山の歴史」（加藤）について話した後、「仰木ふるさとカルタ」の制作経緯や仰木の暮らしの豊かさについて話し（永江）、カルタで遊びながら絵札の解説を行った。（写真27・28）

写真27：北大津高校の生徒たち、グループに分かれてカルタで遊ぶ

写真28：カルタに描かれる絵札から昔の暮らしを学ぶ

③仰木の里東小学校　総合的な学習「タイムスリップ　昔のくらし」　２０１５年２月３日

主催：大津市立仰木の里東小学校　三年生担当教員

会場：大津市立仰木の里東小学校

担当：永江・大原、仰木地区から滝川幸作さん・山村修三さん・上坂澄子さん・深田よし乃さん

昨年度に引き続き、仰木の里東小学校三年生対象の総合的な学習の一環の授業の特別講師を務めた。

四―一―三　平成二七年度（二〇一五）

■展示・販売

①成安造形大学「セイアン・ホームカミングデー２０１５」にて展示・販売　５月17日

主催・会場：成安造形大学

■カルタ会

①三館協同事業〈伝承文化体験事業〉「仰木カルタと紙ひこーき」　２０１６年１月23日

主催：仰木の里公民館・仰木公民館・伊香立公民館

会場：仰木の里市民センター三階

担当：大原

仰木の里公民館・仰木公民館・伊香立公民館の三公民館の協同事業。仰木の里の担当として仰木の里文化振興会が企画した。約三〇名の子どもたちが参加し、仰木ふるさとカルタと紙飛行機づくりを楽しみ、お昼ご飯として地元でとれた野菜の豚汁やおにぎりを食べた。仰木ふるさとカルタで遊ぶ前に、四八枚のカルタに描かれている題材について近江学研究所

（大原）が解説を担当した。カルタ会に使われたカルタは近江学研究所から貸し出した。

■研究活動発表・講演会

①「香港バプティスト大学　大学見学・ワークショップ」

7月2日

主催：香港バプティスト大学

コーディネート：NPO法人HCCグループ　浅野智子

会場：成安造形大学　聚英ホール

受講学生数：二四名　受講講師数：二名

発表：大原　講評：加藤・大原

香港バプティスト大学のグリーンツーリズムツアーの一環として、成安造形大学の見学とワークショップが行われ、その中で「仰木ふるさとカルタ」の取り組みを発表した。また、学生による滋賀県内での経験を「俳句」にしてグループごとに発表を行い、講評を近江学研究所で担当した。（写真29・30）

写真29：カルタの絵札から題材をよみとる学生たち

■授業

①北大津高等学校　特別講座「仰木の生活文化について」

7月10日

主催・会場：滋賀県立北大津高等学校

受講生徒数：約四〇名／グループテーブル六か所（六～七名）

担当：永江・加藤・大原

昨年度に引き続き、北大津高校国際文化コースより依頼があり、二年生対象の特別講座の講師を務めた。

写真30：滋賀県でのフィールドワークの成果を俳句で発表

②教員免許状更新講習「地域の文化と芸術　－フィールドワークの手法－」　8月20日

主催：成安造形大学
会場：成安造形大学　生涯学習センター
受講者数：二六名
担当：永江、加藤、大原

今年度（二〇一五年度）から始まった成安造形大学が主催する教員免許状更新講習の講座として実施。幼、小、中、高校、特別支援学校、教育委員会など、幅広い教員が受講。講座内容は「学校と地域の関係が薄れつつあるなか、学校の所在地域について、人々の生活に根付いた文化と伝統を社会学と芸術の観点から考察する。その事例の一つとして大学附属近江学研究所が行った地域調査のフィールドワークを例にとり、実践と手法、活用法を報告して教育現場での応用につなげる。また同時に、学生と共同で完成させた成果物の『仰木ふるさとカルタ』を紹介して総合的な学習での活用を探る。」というもの。

③仰木の里東小学校　総合的な学習「タイムスリップ　昔のくらし」　２０１６年２月２日
主催：大津市立仰木の里東小学校　三年生担当教員
会場：大津市立仰木の里東小学校
担当：永江・大原、仰木地区から滝川幸作さん・山村修三さん・上坂澄子さん・深田よし乃さん

この授業に関わり三年目となる。仰木の里東小学校三年生対象の総合的な学習の一環の授業の特別講師を務めた。

四―三　その他

■寄稿　２０１３年２月
大津市立仰木小学校　創立百四十周年記念誌　発刊「仰木ふるさとカルタの紹介」寄稿
執筆：永江弘之・大原歩
発行：大津市立仰木小学校
編集：百四十周年記念誌編集委員会

大津市立仰木小学校の創立百四十周年を記念して発行された記念誌に制作経緯や完成したカルタの絵札・読み札を掲載する。校長先生はじめ保護者の編集委員の推薦があり掲載されることとなり、仰木地区でのカルタへの関心の高さがわかる。（写真31）

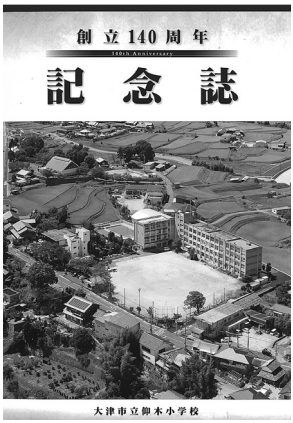


写真31：仰木小学校140周年記念誌表紙

第五章　仰木の人にとっての本研究活動とは
―人に内在する思い出の活かし方―（担当：永江）

これまで学生スタッフに対する教育的な側面を主に見てきたが、本研究活動に参加しご協力いただいた仰木の人にとって、どのような影響や変化があったか考察してみる。

五―一　語り手と聞き手の関係性

本研究活動において思い出の聞き取り調査を進めていて、あらためて強く感じたのは「語り手という存在は、聞き手なしには存在し得ない。」ということである。

老人クラブのみなさんが、生き生きとお話ししてくださる一方で、「こんな話でいいんか？　わしらは、これが普通やからなぁ。」「息子にも孫にもこんな話をすることないわ。あんたらは一生懸命聞いてくれるので、なんやいっぱい思い出すわ。」とおっしゃっていたのが大変印象深い。我々研究スタッフにとって、これほどの奥深さと広がりを持つ「仰木固有の風土や文化、暮らしの情景」は、仰木の方々にとっては「日常のありきたりなもの」「あって当たり前のもの」なのだ。そして、この膨大な思い出は、学生スタッフや研究員という聞き手がいなければ、子にも孫にも誰にもほとんど語られることはなかったのだ。

文章も（絵なども）読者がいなければ何も伝えることができないが、筆者が伝える意志があり書き残せば、書かれた時から時間を経ても誰かが興味を持って読む可能性がある。一方で、語りは、語り手と聞き手が同じ時空を共有しなければ成立しない。録音で一人語りを残すという方法もあるが、聞き手が共感や信頼を持って語り手の話を聞くのとでは、語られる内容はまったく変わってくるだろう。たとえ相づちだけであっても、聞き手と語り手のダイナミックな相互作用により、たくさんの思い出がつむがれ、言葉やエピソードや感情が豊かに語られることになる。本研究の成功のポイントは、語り手と聞き手が上手くかみ合った状況をつくり上げたことが大きい。

語り手の仰木のおじいちゃんやおばあちゃんにとって、聞き手が地域外の仰木とは全く違った環境で育った人で、孫の世代の学生たちであったことが実は重要だったのだと思う。生活文化が異なる別の価値観を持った外の目だからこそ、その地域の際立った個性や魅力を見いだせるということ。こうした研究において、学生の純粋な興味や驚き、発見が、地域の人の「慣れ」を刺激し、固有の価値を啓く大きな力になると感じた。（写真32・33）

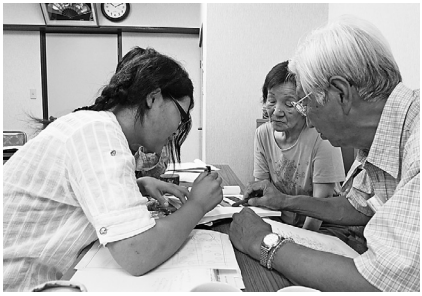


写真32：聞き取りの様子

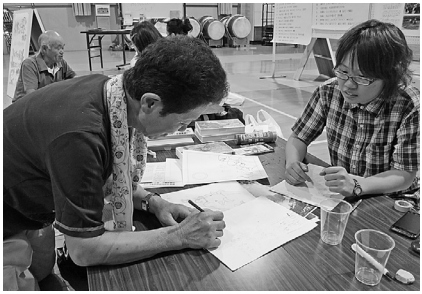


写真33：聞き取りの様子

五-二　思い出を語り直し、過去を育てる

思い出を語るということは、過去の出来事や事実を単純にそのまま述べているわけではない。今の状況によって（語り手自身の気持ちや誰が聞き手かなどによって）同じエピソードでも全く違った語りが展開されるだろう。いわば、思い出をその都度語り直し、語りを通して思い出をもう一度体験し直すという感じではないだろうか。聞き手に語って聞かせることを通して語り手自身にとっての思い出の意味が変容しているように思える。楽しい思い出、つらい思い出、苦しい、悲しい思い出など、そうした思い出を今どんな気持ちで語るか、また、聞き手がどう受け取ってくれるかによって思い出の意味合いが変わり、つらい話が笑い話に変容したりする。「思い出す」ということは、単に過去を現在に引っぱってくることではなく「過去（記憶や思い出）を育てる」というクリエイティブな活動であると言えるのではないだろうか。過去を振り返り、過去を語ることで、過去の出来事（体験）の文脈が変化し新たな意味を持つとすれば、それは今の自分が変わるということである。もしかすると語りを通して「過去を育てる」ことは、その人の今を少し幸せにするキーになるのかもしれない。

「ふるさとカルタづくり」は、前述の創造的なサイクルを効果的に生み出し「過去を育てる」というクリエイティブな仕組みだと思う。またその活用は、個人や地域や世代を越えて思い出をつなぎなおし、地域や土地の「記憶を育てる」仕組み。人と人をつなぎ、コミュニティーを再生し、未来につなげていく仕組みと言えよう。

結び（担当：永江）

地域の方々の思い出、生きた言葉を手がかりに生活文化を浮き彫りにし、その中でその土地ならではの特別な読み札を決めていくことから取り組んだ本研究活動では、「地域に入り、地域を学び、地域の方々と共に生き生きと活動すること」の素晴らしさや難しさを学ぶ大きな機会となった。

完成した「仰木ふるさとカルタ」に対してや当時の研究活動

を振り返って、仰木のみなさんからはいろいろな反応が聞かれた。

一番気になっていた「仰木らしさ」については、当時読み札決定にご協力いただいた畦草会の会長さんから「四八枚の読み札については『あんじょう言うてくれたな』とみんな言ってくれる。仰木ならではのカルタとしてほとんどの人が理解してくれた。」とおっしゃっていただけた。「展覧会用に読み札の読み上げを録音したときは、どんなリズムで読むかいろいろ考えた。」「仰木の人は何でも『晴れがましいんで』と控えめで積極性が足らんように思う。でも、聞き取りの時は孫にしゃべるような感じだったからかみんなようしゃべったな。思い出話になると俳句の会でも一句に対してみんな一斉にしゃべる。」など当時を振り返ってお話しされた。また、「他所にお嫁入りした妹たちにカルタを買ってあげた。仰木で育ったことがなつかしいと、みんな喜んでくれる。」「聞き取り資料を見返して、みなさんがこんなにたくさん書いてくれてはるのを見て感動した。」「うれしゅうて、何回も読み返しとったら覚えてしもた。」「カルタを見てると、読み札以外にも仰木にはこんなことやあんなこと、まだまだたくさんええことがあるなぁと思う。例えば食だけでも四八枚まだできるで。」「ええのん作ってくれた。仰木の宝ものやなぁ。」など、いろいろな方からお声をいただいて、本当にやり遂げて良かったと思えた。

しかし、本研究活動や「仰木ふるさとカルタ」が本当の意味で真価を問われるのはこれからなのだと思う。カルタが家庭や地域の中でどう活かされて「仰木固有の風土や文化、暮らしの情景」をどう次世代につなげていくのか、世代を越えたコミュニケーションを結ぶツールとして仰木やその他の地域で積極的に活用されることを期待したい。また、本研究活動に携わった学生スタッフたちは今、全員が本学を卒業し社会人として一歩を踏み出している。ファンシーグッズのデザイナー、車のフロアマットなどのデザイナー、広告制作、漫画家のアシスタント、地産地消の間伐材などを利用した木製家具の工房、建築設計事務所、まちづくりセンターを拠点にＮＰＯの活動をサポートしまちづくりを推進する仕事、タウン誌の編集など、それぞれの生き方を通して人や地域や社会と関わっている。彼らがそれぞれの居場所を大切にして今後さまざまな形で活躍していくこともまた、本研究活動の成果と言えるのだと思う。

謝　辞

本学近江学研究所研究員の大原歩氏と加藤賢治氏が、本研究の共同研究者である。大原歩研究員は、学生の頃より仰木をフィールドとした「地蔵プロジェクト」という研究チームで活動し、仰木公民館に務めていた経験もあり、本研究において大学と仰木をつなぐ役割を担っていただいた。学生への指導、研究活動のサポート、研究の記録（録音、撮影）等、本研究を推進する上で欠かせない存在であった。加藤賢治研究員は、「仰木・堅田の祭礼」を研究してこられ、特に上仰木での調査に多大なご助力をいただ

いた。また、仰木在住のたくさんの方々のご協力なくして、本研究の取り組みはあり得ない。聞き取り調査にご出席いただいた仰木学区老人クラブ連合会の方々、わら草履づくりや納豆餅、手づくり味噌などをご指導いただいた方々、読み札を一緒に推敲してくださった仰木の俳句の会「畦草会」の方々など、総勢五十名以上に及ぶ方々が学生と温かく接してくださり、多大なご協力をいただいた。他にも一八五通のアンケートを記入してくださった方々や仰木で出会った多くの方々に、ふるさとカルタへの期待と励ましの応援をたくさんいただいた。ここに感謝の意を表する。

調査・制作協力

仰木学区老人クラブ連合会、俳句の会「畦草会」、仰木学区自治連合会、大津市立仰木小学校、大津市立仰木市民センター、仰木ふれあい夏祭り実行委員会

学生スタッフ（敬称略）

梅下菜々美、益友花子、兼森絢子、日下部まこ、小池由華、後藤美子、小林佳紫、鈴木沙季、関戸望、長野明代、永禮尊大、宮本暖子　以上十二名が学生スタッフとして研究を支えた。あわせて、感謝の意を表する。

［近江学研究］

「近江の絵馬」現況調査　調査報告 2

吉村　俊昭

［近江学研究］

「近江の絵馬」現況調査　調査報告 2

吉村　俊昭

Name :
YOSHIMURA　Toshiaki

Title :
Status Survey of Omi's Emas: Part Two

Summary :
In this, the last year of the status survey of Omi's Emas, I will conclude my report on the results of the survey. While the original target was a survey of the Emas in all regions of Shiga Prefecture, as the survey progressed it became clear that it would not be possible to report on all of them on the same scale. Here, rather than simply presenting a list of facts from the Shiga Prefecture status survey, I will shed light on some special regional characteristics and present lesser-known details of the findings of the Ema survey.

一、はじめに

絵馬の現況調査は、当初設定した三年の調査期間も後半に入り、二〇一五年度で区切りを迎えることになるのだが、滋賀県全域調査が達成できずにまだ未調査地域が残る状況である。また、調査途中に日吉大社蔵長沢芦雪筆「猿図」絵馬と出会い、詳細調査に加えて復元作業を委託されるに至った。芦雪研究の資料として学術的に貴重なものであるが、署名落款と願主名を残すだけで、おぼろげに猿であろう形が見えるだけの絵馬である。一枚の絵馬を徹底して調査できることは貴重な経験であるが、同時に現況調査の時間を削ることになった。長沢芦雪筆「猿図」絵馬は、研究と合わせて学生を中心に復元作業を進め、奉納当初の姿を復元できた。これについては『文化誌「近江学」第８号』（二〇一六年一月発行）に復元模写の詳細を挙げているので本文では割愛する。

二〇一四年前半までの調査報告は『成安造形大学附属近江学研究所紀要第４号』（二〇一五年三月発行）で取り上げているので、今回はその後の調査報告となる。これまでに引き続き大

津市仰木以北、高島市、長浜市高月以北の調査を一年三ヶ月かけて行った。ちょうど琵琶湖西岸から湖北に至る琵琶湖を半周する調査区域となった。報告には間に合わないが草津市、近江八幡市、彦根市なども年度内の調査予定に組み込んでいる。大津市の石山寺、比叡山延暦寺、また長浜市の竹生島には貴重な絵馬が存在することがわかっているが、次年度の追加調査に含めることで慎重に取り組みたい。

二、絵馬の地域的特徴

先に述べたように非常に広範囲になっていて、地域文化の違いから特徴を一括して述べるのは困難である。行政区画とはやや異なるが、文化的相違面から「堅田・旧志賀町」「高島・新旭・安曇川・今津・マキノ」「朽木」「西浅井・余呉・木之本・高月」に大別して概要を述べる。

堅田・旧志賀町

大津市堅田は交通の要衝であり比較的大きな神社があるにもかかわらず絵馬の存在が少ない地域である。大津市真野の神田神社の絵馬堂は焼失。大津市伊香立途中町の還来神社（もどろき）の絵馬は確認できていない。旧志賀町地域も未確認である。絵馬の存在が確認できるのは唯一、若狭街道沿いの葛川坊村息障明王院である。地域的特徴は明らかにしにくく調査結果は明王院の項で改めて詳細を述べる。

高島市　新旭・安曇川・今津・マキノ

堅田・旧志賀町に続く北国海道沿いの地域である。白髭神社など全国でも知られる神社があり、社寺を中心に地域に根付いた祭事が多くみられるにもかかわらず、この地域も絵馬はあまりない。ただ、マキノ町海津天神社には狩野山楽筆「繋馬図」、「三十六歌仙図」、新旭町大田神社には原在中筆「曳馬図」などがあり、京都の錚々たる画家の絵馬が存在する。これらの絵馬は地域の信仰よりも、それぞれの社寺が徳川家や京都の社寺の直轄であったなど、中央権力との繋がりがあったことにより、絵馬が奉納されたといえるだろう。

高島市　朽木

現在は山中の奥深い地域に見えるが、過去には京都、若狭を結ぶ若狭街道沿いの街道筋として繁栄した。地理的には京都、大津からは程遠いにもかかわらず多くの絵馬が存在する。京都の木材の供給地であり、長らく朽木氏の支配下で歴史的にも独自性を保ってきた。そのため独特の「しこぶち信仰」などがあり、信仰については古式のしきたりを保っている。絵馬奉納は比較的近年まで習慣として残っていて平成に奉献された絵馬も見ることができる。氏子による様々な祈願や成就に関わる多様な絵馬があり、天変地異を含め時節折々の奉納は、氏神信仰と

絵馬奉納の関係をよく伝えている。

長浜市　西浅井・余呉・木之本・高月

西浅井町には菅浦の須賀神社など、鎮守社として特徴のある神社があるが、余呉町も含めて絵馬は確認できない。北国海道沿いの湖西堅田以北、湖北の西浅井・余呉地域は絵馬がほとんど確認できない。発句等の懸額も少なく絵馬奉納の習慣がなかったか、早くになくなったかであろう。

木之本・高月地域は神仏習合が色濃く残り、観音信仰と合わせて寺院に絵馬が多く残されている。北国街道沿いであり遠方からの参詣があったことから、中央の絵師によるものではないが大絵馬もあり、寺院または京都の寺院のように宿坊に絵馬が奉納されていたようである。現在も檀家、氏子により大切にされ、長浜城歴史博物館などで精緻な調査が行われ、画題や作者について明らかになっている。

三、調査社寺と絵馬の概要

ここでは、紀要第4号にあげた調査に続けて行った二〇一四年九月以降の調査社寺の概要および、絵馬数が多い、あるいは特筆すべき絵馬が存在するところについてさらに詳細を述べる。事前の社殿状況調査や電話による確認調査で絵馬が存在しないと思われる神社については詳細調査の対象から外している。また、調査したものの絵馬が無い、もしくは近年の懸額のみ現存する場合、あるいは写真、刺繍のように今回の絵画的要素に限定した調査としては対処しにくいものについては社寺名のみ取り上げまとめた。

大津市葛川坊村　息障明王院（そくしょうみょうおういん）

調査は参籠行事もいれて合計三回となった。最終二〇一四年十一月三〇日に延暦寺および明王院の許可を得て詳細調査と写真撮影を行った。明王院は安曇川沿いの若狭街道に面した天台修験の寺院である。貞観元年（八五九）開山と伝えられる。回峰行と葛川参籠で知られ、七月には「太鼓廻し」行事が行われる。文化財も多い。絵馬は本堂外陣に懸けられていて、状態の良いものが十三点存在する。

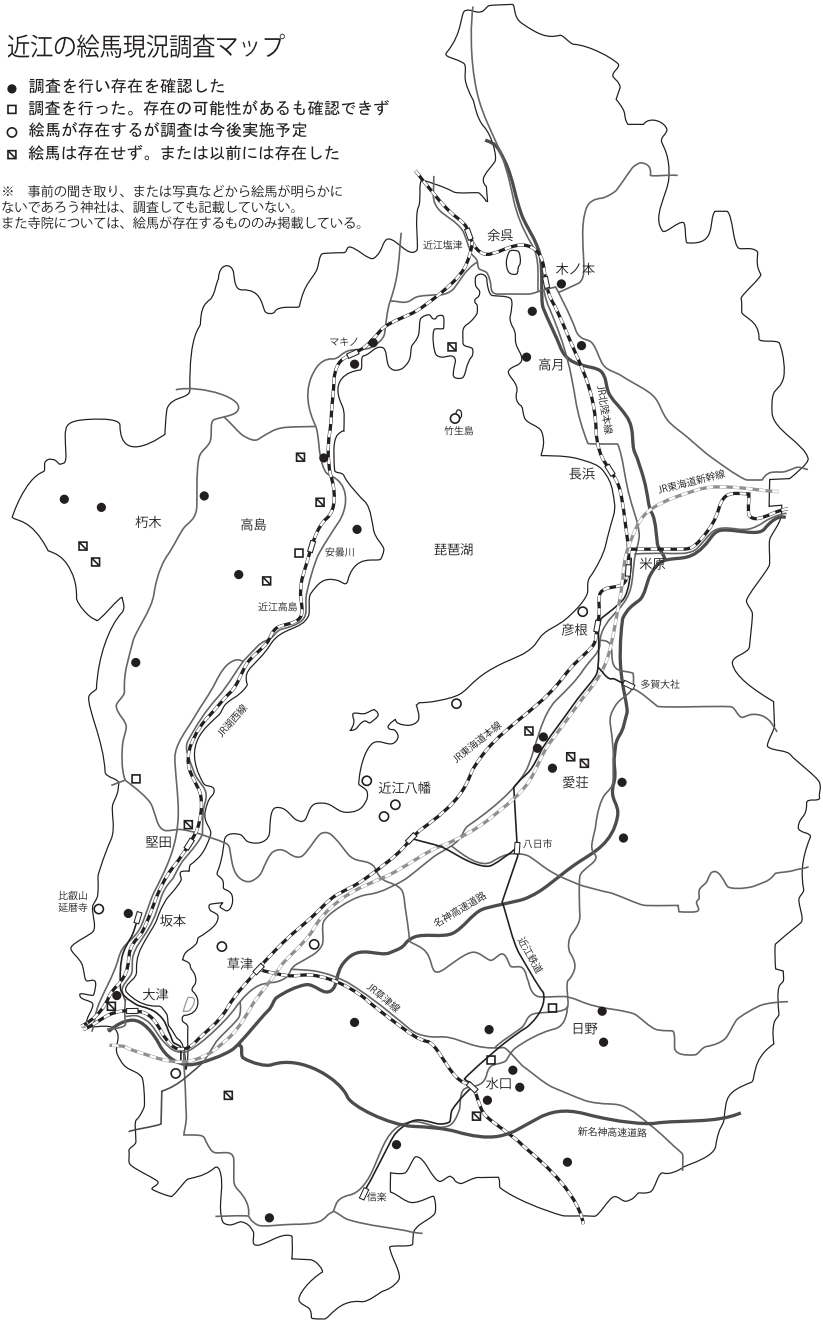
「宇治川先陣争い図」（写真3）横二二五cmの大絵馬で延享三年（一七四六）の奉納年、願主の中村某が読み取れる。剥落が進んでいるため絵師名については確認できない。顔、目の表情や馬の表現に江戸中期の絵画的特徴が見られる。梶原景季、佐々木高綱と周りの兵が多数描かれ躍動感にあふれる絵馬である。

「朝比奈と鬼の首引き図」（写真4）絵馬でよく取り上げられる題材。横一m弱。保存状態がよく汚れが少なく細部まで奉納当時の様子が確認できる。万治二年（一六五九）京願主八人とある。「源氏物語図（明石）」（写真5）横一五一cm。額には飾り金具がつき贅沢な絵馬であったと考えられるが、状態は良く

近江の絵馬現況調査マップ

- ● 調査を行い存在を確認した
- □ 調査を行った。存在の可能性があるも確認できず
- ○ 絵馬が存在するが調査は今後実施予定
- ▨ 絵馬は存在せず。または以前には存在した

※　事前の聞き取り、または写真などから絵馬が明らかにないであろう神社は、調査しても記載していない。
また寺院については、絵馬が存在するもののみ掲載している。



ない。文字は判読できない。画風、絵の具の状態から宇治川先陣争いとさほど変わらない江戸中期の奉納であろうか。

「神功皇后図」（写真6）横一四六cm。願主近江屋某が判読できるものの他の文字は確認できない。同様に江戸中期であろうか。

他に安政二年（一八五五）奉納の「武者絵」、奉納年不明一対の「弁慶・牛若丸図」、寛政三年（一七九一）奉納「馬図」、「那須与一図」「旭に松図」、朽木地域でも度々名が出てくる絵師白鴎池田光筆の明治二五年奉納「西王母図」などがある。

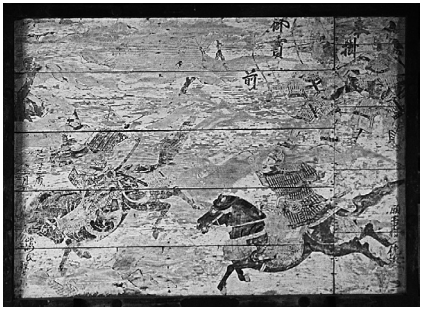


写真3：宇治川先陣争い図／延享三年

写真4：朝比奈と鬼の首引き図／万治二年

写真5：源氏物語図（明石）／年代不明

写真1：明王院

写真6：神功皇后図／年代不明

写真2：記録写真撮影風景

高島市朽木中牧　大宮神社

予備調査を入れて二回の調査を行う。山間地ながら広い境内を持つ。本殿は覆屋があり摂社として八幡神社、遥拝所常神社（若狭常神）がある。宮司や宮管理、宮守など役により社務所入り口や座の位置が決まっているなど、信仰の伝統が継承されている。朽木清継宮司の立ち合いのもと覆屋の奥まで絵馬の調査を行い、傷み打ち捨てられた小絵馬なども改めて取り出し確認と撮影ができた。氏子の方々も絵馬についてはさほど関心事ではなかったため、思った以上に絵馬があることや剥落、破損など状態が悪いことに気付き、保存の必要性を感じたようである。

絵馬は総数二〇点。中型の大絵馬が本殿に六点、社務所に三点の計九点が現存している。小絵馬は本殿、摂社で十一点確認できた。

江戸期としては、文化（一八〇四から一八一八）の元号のある武者絵「真田十勇士図（三好青海入道）」横七六cm、文久元年（一八六一）にあたる文久辛酉年の氏子中奉納「桜井の別れ図」横一二三cmがある。ともに剥落がひどく状態は良くない。社務所内には弘化四年未（一八四七）奉納の武者絵「巴御前図」（写真８）、天保十三壬年（一八四二）氏子中奉納の「厳島神社境内図」がある。ともに中型の絵馬で室内にあるため本殿の絵馬より状態はいい。

本殿に向かって右に生杉の山本氏奉納「神功皇后と武内宿禰図」横六八cm、左に明治三六年「尉と姥図」（写真９）横八八cmがある。神功皇后には七三翁白鷗池田光重の絵師名がある。尉と姥には絵師の名がないものの画風筆跡より同じく白鷗の絵

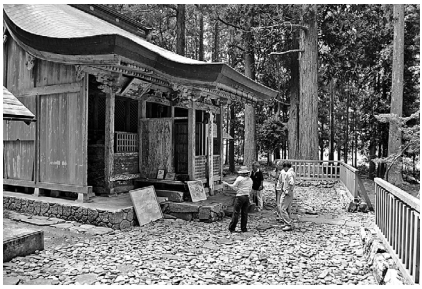


写真7：大宮神社本殿　氏子の方々に話を聞く

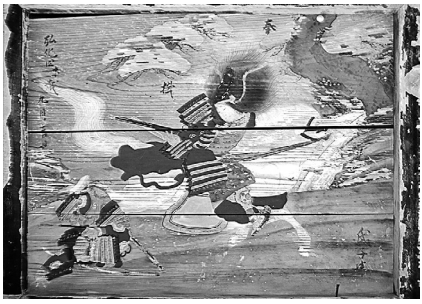


写真8：巴御前図／弘化四年

写真9：尉と姥図　白鷗池田光重／明治三十六年

である。二つの絵に挟まれて大正十年酉生杉西川某奉納「天岩戸図」（写真10）横五八cmがあり絵師西川陽鶴の名がある。明治から大正期の絵馬には白鷗池田光（光重）およびその弟子と思われる西川陽鶴とともに湖西、安曇川沿いに多く存在する。

小絵馬には歌舞伎絵、参詣図、馬図、武者絵、物語絵、吉祥図など様々あるが、珍しいのは雪遊びの図である。何の祈願かは定かでないが五人の子供が雪だるまを作っている絵でほほえましい。欧州では雪だるま信仰があるが本邦では確認できない。

写真10：天岩戸図　西川陽鶴／大正十年

写真11：子供雪遊び図

高島市朽木能家　山神神社（さんじんじんじゃ）

予備調査を入れて三回の調査を行う。由緒等不明だが明治初期村社に列せられている。本殿および覆屋は比較的新しい。絵馬は拝殿と寄り合い所を兼ねた建物内にあるのだが、この建物が建築として貴重である。トタン屋根で覆われているが内部は茅葺で、寄り合いの間は囲炉裏がきられている。能家集落は限界集落になっており、別途聞き取りも含めて精細な調査が必要である。

絵馬数四四点。絵馬は小絵馬が大半である。やや大ぶりのものもあるが画題から小絵馬にあたると思われる。屋内とはいえ雪深いところでもあり保存状態は良いとはいえない。以前はもっとあったが盗難にあったということである。絵馬を収納し公開しないところも増えているが、奉納懸額の意味からすればいかがなものかとも思え、難しいところである。絵馬の状態をこれ以上劣化させないことと、開放された状態での盗難防止に対処する必要があるだろう。

拝殿内の四面に計三二点の絵馬が掛けられている。江戸末期寛政、享和、文政の絵馬が九点存在するが破損、剥落で形をとどめないものも多い。画風は朽木、葛川の小絵馬に共通したものが見受けられる。山間部だが江戸後期には盛んに絵馬奉納がなされていたことがわかる。残りは明治から大正にかけての絵馬が多く氏子奉納で画題も曳馬が多い。古老に聞くと、大正時期は馬橇で木材の搬出などを行っていたとのことで、生活につ

ながる画題であったかもしれない。大正期の絵馬は大半が西川陽鶴の筆によるものである。同じ下絵を繰り返し用いたり、表裏反転して用いているなど長年にわたり描き続けた陽鶴は高島、朽木の絵馬師であっただろうと推測する。

写真12：拝殿内の様子

写真14：曳馬図／享和年

写真13：尉と姥図／文政十一年

写真15：曳馬図　西川陽鶴／大正九年

写真16：曳馬図　西川陽鶴／大正十三年　大正九年と比較して馬、手前の舎人が同じ左右対称である

高島市朽木野尻　山神社（山神神社）

天正年間に社殿再建の記録があり十六世紀後半には存在したことがうかがわれる。朽木でも街道沿いの神社である。やや小さめの拝殿があり左右に絵馬が掛けられている。非常に丁寧に懸けられていて、剥落風化した絵馬も今のところそれ以上に進まず現状維持ができている。絵馬は十一点、他では見かけない画題の絵馬が数点ある。明治二六癸未年奉納「新田四朗忠常猪退治図」横七〇㎝、白鷗の筆によるものである。大正三年「桃持ち猿図」（写真18）悪事去図の文字がある。よほどの災いがあったのか鋭い目つきの猿が描かれている。大正二年関根、越智両氏による奉納「平経正図」（写真19）は謡曲竹生島に画題を得

ていると思われる。

社務所内入り口すぐの壁面に横一八二cm、縦一五一cmの家型大絵馬が懸けられている。社務所改築の折に懸け直したということである。「源頼政鵺（ぬえ）退治図」（写真20・22・23）である。大胆な構図と人物の動き、具足や衣の描き方に地方絵師にはない力量があり、鵺は剥落がひどいが頼政と猪早太はしっかり残っている。安政三丙辰年（一八五六）願主社中、右側下部に「摂陽山人　公泰謹画之」の墨書と花押がある。絵師の名はない。

鵺退治の絵の多くはなぜか頼政が左に描かれていることが多いが、この絵馬は右にいる。その特徴で記憶を頼りに調べなおすと、京都府八幡市の松花堂美術館蔵、応挙の弟子駒井源琦による「鵺退治図屏風」（写真21）に瓜二つであった。源琦は寛政九年（一七九七）に亡くなっているから絵馬の奉納年と合わないので彼の作品ではない。摂陽山人以下の文字であるが、摂陽山人は江戸末期の文筆家として名が上がるが絵師としての記録はない。絵馬に書かれた摂陽山人が同一人物であれば、「公（民と解釈）やすらかに謹んでこれを画かしむ」と読むことで、摂陽山人が世の安泰を願い絵馬を描かせたと解釈できる。奉納の前々年、安政元年に南海大地震、翌二年には江戸大地震が起こっている。この絵馬が山神社にある理由は分からないが、天変地異が立て続くことに、怪事の元凶が鵺という話とからめて、描かれてから半世紀ほどしかたっていなく広くその存在が知られていたであろう源琦の鵺退治屏風の絵を写し、安泰祈願奉納されたものではないかと解釈する。

写真17：山神社　拝殿とその後ろに本殿

写真18：桃持ち猿図／大正三年

写真19：平経正図／大正二年

写真21：駒井源琦筆　鵺退治図屏風／寛政九年

写真20：源頼政鵺退治図／安政三年

写真23：源頼政鵺退治図（一部）摂陽山人

写真22：源頼政鵺退治図（一部）源頼政

高島市新旭町太田　大田神社

農村部の集落の中にある神社である。由緒では延暦年間に創立となっていて、古くより山科の曼殊院との繋がりがあったようである。寛政十二年曼殊院門跡直轄となったため特に京都の関係が強まったかと思える。拝殿横の小さな絵馬殿にガラスケースに入った原在中筆文政十年丁亥（一八二七）杉浦氏奉納「曳馬図」（写真24）がある。舎人の表現に様式性を感じるが、馬の表現や唐鞍の飾りも細部にまで描きこまれた優れた絵馬である。奈良の春日大社に向きが裏返しだが唐鞍や飾りもよく似た表現の天文二二年（一五五三）奉納「曳馬図」がある。参考にしたとは言えないものの、絵師としてどこかの時点で目に留めたことがあったかもしれない。他に文政十一年戊子（一八二八）洞上祖關画金釜出土の「二十四孝郭巨図（かくきょず）」（写真25）、文政十年「天神牛図」、明治三五年「立花図」がある。

（注　調査許可の関係から絵馬の採寸ができていない）

長浜市木之本町木之本　浄信寺

緩やかな石畳を上り詰めたところにある木之本地蔵尊で知られる名刹である。天武天皇四年建立の寺伝を持つ。たびたびの堂宇消失の後、宝暦年間（一七五一～一七六四）に再建された。

本堂（地蔵堂）外陣壁面上部に押絵、彫り物も含み十数点の絵馬が掛けられている。おおむね保存状態は悪くないが、寺院の絵馬の多くがそうであるように一部に煤と脂汚れがある。外陣左に天保十己亥年（一八三九）月湖山人筆河尻光貞奉納武者絵「巴御前図」（写真27）横一五一cmがある。扁額軌範に祇園社の武者絵「八幡四郎」（写真28）が載っているが、巴御前の頭部を差し替えただけでほとんど同じである。また、馬の脚は

写真24：原在中筆　曳馬図／文政十年

写真25：二十四孝郭巨図／文政十年

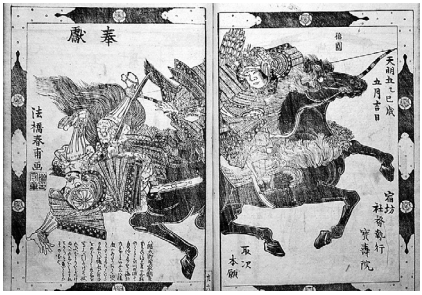


写真28：扁額軌範の八幡四郎義家図

写真26：木之本浄信正面

写真29：渡辺綱一条戻り橋図／天明六年

写真27：巴御前図／天保十年

前後とも伸び切り躍動感はなくなっている。一番大きな絵馬は、天明六丙午年（一七八六）月岡雪鼎門人橘惟成筆「渡辺綱一条戻り橋図」（写真29）一八五cmで近郷の七人による宿坊春渓庵への奉納であるが、金箔をふんだんに使い額縁も贅沢な設えとなっている。他に天保年間「参詣婦女図」、文化三丙寅年（一八〇六）「七福神図」、明治三一年（一八九八）雲峰筆「吉祥動物図（鳩・八幡神）」、武者絵「楠正成桜井の別れ図」、「武者絵」、「旭図」などがある。

長浜市高月町唐川　赤後寺（しゃくごじ）

湧出山（ゆるぎさん）山麓の日吉神社境内の唐喜山赤後寺の観音堂に絵馬がある。

平安時代の作である重要文化財千手観音と聖観音立像が本尊である。手狭な堂内に十五点の絵馬が懸けられている。その多くは江戸期のもので、最も古いのが寛文元年（一六六一）京都五兵衛、久三郎奉納「渡辺綱羅城門鬼退治図」（写真31）横七〇cm。非常に傷みがあるが絵の全容がわかる程度に残っている。構図は鬼が柱に絡みつき綱の兜を掴んでいる典型である。寛文十二年（一六七二）「曳馬図」（写真32）一二四cm。金箔を全体に貼った絵馬だが中央より下部分の絵具の痛みが激しいが、舎人の表情はよく残り豊かである。天和三年（一六八三）雪舟末□長谷川等真筆摂刕大阪住大橋清助久利奉納「黄石公張良図」一八二cm。傷みが激しく下書きの線のみ残っているのが大半。ただ、黄石公と張良の顔部分は比較的残る。寛政六寅年（一七九四）浅井郡八若氏奉納「宇治川の先陣争い図」（写真33）横九二cm。中型の絵馬であるが武者の描写や構図に優れる。奉納年不明速水村柴田氏奉納「武者図（寺目録による）」横八一cm。武者図となっているが、画題は「弓弭（ゆはず）の泉」（写真34）ではないだろうか。源頼義が弓の端、弓弭で岩を突いたら水が湧き出したという説話に基づくもので、その場所は東北の岩手町にある。関西では珍しい画題である。その他繋馬や役者絵など特徴的な絵馬が揃っている。

（注　絵馬の寸法は赤後寺提供の資料に基づきセンチに四捨五入して記載している）

写真30：日吉神社境内の赤後寺

写真33：宇治川先陣争い図／寛政六年

写真31：渡辺綱羅城門鬼退治図／寛文元年

写真34：弓弭の泉図／年代不明

写真32：曳馬図／寛文十二年

長浜市高月町高月　慈眼山大圓寺（高月観音堂）

国宝十一面観音のある向源寺（渡岸寺）の南側に位置する。延暦六年建立の寺伝がある。賤ヶ岳の合戦で焼失し翌天正十二年再建。観音霊場の札所として信仰を集める。

観音堂内三面に七点の絵馬が懸けられている。寛永十七年（一六四〇）紀伊國住人岩坪信直祈願成就奉納「繋馬図」（写真36）。背景に金箔を貼った黒馬が描かれている。装飾性や表現上の躍動感はないが落ち着いた繋馬の典型である。元文四己未年（一七三九）「近江八景図」は他府県ではよくある画題だが県内で懸けられているのは珍しい。宝暦庚辰年（宝暦十年・一七六〇）京都住廣部才治秀政奉納「渡辺綱羅城門図（大圓寺説明書）」だが説明の画題間違いであろう。「焚噲門破り図（はんかいもんやぶりず）」（写真37）が正しい。中国式の門、武人焚噲が盾を抱えて門を開こうとしている。朝比奈の門破りなどと中国故事が合体して作られた話で、それらを基にした和田合戦女舞鶴がすでに上演され、当時ではよく知られた説話であった。人物表現様式から江戸初期の絵馬であろうと推察する制作奉納年不明「大名行列図」（写真38・39）であるが、絵の周囲の文様が気がかりである。湖東の百済寺「石曳図」（写真40）に同じ模様が絵を取り囲むように描かれている。絵を取り囲むように装飾された文様は特殊である。石曳引図については奉納年代や由来が明確でない。すでに考察されているかもしれないが、この大名行列図と関わりがあるのであれば、両絵馬の制作

年代や由来など解き明かす糸口になると思える。

他に、元文元年丙辰「虎渓三笑図」、文政七年（一八二八）「黄石公張良図」、元治元年（一八六四）「参詣図」がある。

（注　調査環境の関係から絵馬の採寸ができていない）

写真35：大圓寺観音堂内　鴨居の上に絵馬が懸けられている

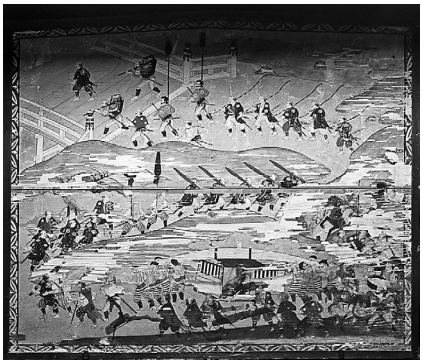


写真38：大名行列図／年代不明

写真36：繋馬図／寛永十一年

写真39：大名行列図縁取り文様（左上部）

写真40：同じ文様が見られる百済寺石曳図（一部）

写真37：焚噌門破り図／宝暦十年

長浜市片山　片山神社

琵琶湖に面した漁村の高台にある。「馬図」「天岩戸図」「宇治川の先陣争い」「楠正成桜井の別れ図」（写真41）「松鷹図」があるが奉納年願主名など読み取れなかった。また船絵馬は懸額されていない。

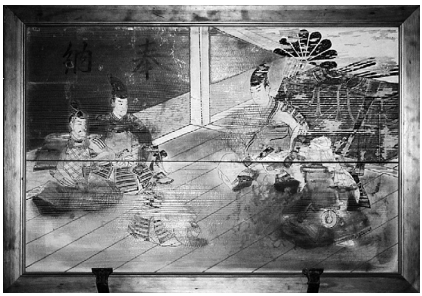


写真41：楠正成桜井の別れ図／年代不明

その他の調査社寺

大津市真野	神田神社	宮司に確認、火災で焼失
大津市伊香立	還来神社	宮司に確認、情報があるも存在不明
高島市朽木桑原	蛭子神社	絵馬なし
高島市高島	玉津神社	昭和五十二年奉納吉祥図（朝日に鶴）
高島市新旭日町	大國神社	現代の干支絵馬
高島市新旭日町	健速神社	曳馬1点
高島市新旭日町	波爾布神社	絵馬なし
高島市高島町	水尾神社	絵馬なし
高島市安曇川町	箕島神社	馬図があるも収蔵されているため調査できず
高島市マキノ町	唐崎神社（川裾宮）	家型絵馬1点
高島市マキノ町	海津天神社	山楽の絵馬等すべて非公開で調査できず
長浜市西浅井町	須賀神社	絵馬なし

四、おわりに

この報告は近江学研究所小嵜善通研究員、大原歩研究員との共同調査研究を小生がまとめたものである。調査にあたっては、高島市教育委員会文化財課参事の山本晃子氏、宮司朽木清継氏をはじめ各神社の宮守の方々など、多くの関係者に貴重な時間を割いて協力いただいた。お礼を申し上げる。調査することで地域にある絵馬について改めて認識していただき、少なくとも現状での保存が進めば有難く思う。しかし、山間部など氏最子が減少し維持管理の人手の少ない神社において、絵馬など民俗資料が年を追うごとに傷み無くなっていくのは残念なことである。この「近江の絵馬現況調査」の調査内容が、研究者だけでなく一般の方々が民俗資料に関心をもち、地域文化として継承されていく一助となれば幸いである。

物語解説

鵺（ぬえ）退治

平家物語第四巻に鵺（鵼）退治の話が出てくる。「東三條の森の方より、黒雲一村立來（つ）て、御殿の上に聳（い）たり。頼政吭と見上（げ）たれば、雲の中に恠（し）き物の姿あり。射損ずる程ならば、世に可レ有とも不レ覺。さりながら矢取（つ）て番ひ、南無八幡大菩薩と、心の中に祈念して、能引（い）てひやうど放つ。手答して、はたと中る。得たりやうと、矢叫をこそしてんげれ。猪の早太つと寄（り）、落（つ）る處を取（つ）て押へ、柄も拳も透れ〳〵と、續様に九刀ぞ刺（い）たりける。其（の）時上下手々に火を燃（し）て、是を御覧じ見給ふに、頭は猿、軀は狸、尾は蛇、手は虎の如（く）にて、鳴（く）聲鵺にぞ似たりける。怖しなども愚なり。（「平家物語」校注梶原正明・おうふう　より）」

宇治川の先陣争い（うぢがわのせんじんあらそい）

平家物語第九巻宇治川の合戦場面にこの話が出てくる。長文なのでその一部を紹介する。「爰に平等院の艮、橘の小嶋が崎より、武者二騎引（つ）かけ引（つ）かけ出來たり。一騎は梶原源太景季、一騎は佐々木の四郎高綱也。人目には何とも見えざりけれども、内々先に心を懸（け）たるらん、梶原は佐々木に一段計ぞ進んだる。佐々木、如何に梶原殿、此（の）河は西國一の大河ぞや。腹帯の延（び）て見（え）さうぞ。縮（め）給へと云（ひ）ければ、梶原さも有（る）らんと思（ひ）けん、手綱を馬のゆがみに捨（て）、左右の鐙を踏透し、腹帯を解（い）てぞ縮（め）たりける。佐々木其（の）間にそこをつと馳抜（い）て、河へ颯とぞ打入（れ）たる。梶原、被レ謀ぬやと思（ひ）けん、驀て續（い）て打ち入（れ）たり。（「平家物語」校注梶原正明・おうふう　より）」

焚嘸門破り（はんかいもんやぶり）

古来より尋常でない剛力が活躍する話が語り継がれている。「焚嘸門破り」もその豪傑譚の一つで、それらは歌舞伎や浄瑠璃の題材となった。漢の時代、「劉邦の臣下であった樊噲は、鴻門の会にて項羽に見え、危機にあった主君劉邦を助けるために門扉を押し破って敵方の宴席に乱入する。それは『鴻門の会樊噲門破り』として特に武者絵の題材に好んで採られるようになった。（近世期の画像資料に見る門破り図像の受容と展開より）」

二十四孝　郭巨（かくきょ）

中国の孝行にまつわる故事。孝行に優れた二十四人の物語で元代の郭居敬が編纂。そのうちの一つ郭巨の話。

「貧乏之思供給　埋兒願母存　黄金天所賜　光彩照寒門

郭巨は河内といふ所の人なり。家貧しうして母を養へり。妻一の子を産みて三歳になれり。郭巨が老母、彼の孫をいつくしみ、我が食事を分け與へけり。或時、郭巨妻に語る様は、貧しければ母の食事さへ心に不足と思ひしに、其内を分けて孫に賜はれば乏しかるべし、是偏に我子の有りし故なり、所詮汝と夫婦たらば子二度有るべし、母は二度有るべからず、とかく此子を埋みて母を能く養いたく思ふなりと夫婦云ひければ、妻もさすがに悲しく思へども、夫の命に違はず、彼の三歳の兒を引きつれて、埋みに行き侍る。則ち郭巨涙を押へて、すこし堀りたれば、黄金の釜を掘り出だせり。其釜に不思議の文字すわれり。其文に曰く、天賜二孝子郭巨一不レ得レ奪ふことを民不レ得レ取ることを と云々。此心は天道より郭巨に給ふ程に、餘人取るべからずとなり。則ち其釜をえて喜び、兒をも埋まず、ともに歸り、母にいよく孝行をつくせるとなり。（「御伽草子　二十四孝」岩崎文庫貴重本叢刊　より）」

参考文献

・合田珉和・北川春成縮図「扁額軌範」全五巻　吉野屋大谷仁兵衛　文政二年
・渡辺黄鵠著・渡辺対岳縮図「厳島絵馬鑑」全五巻　天保三年刊　嘉永元年後印
・臨川書店「新修京都叢書」第八巻　扁額軌範・花洛絵馬評判　一九九四年第2刷
・木村至宏「図説近江古寺紀行」河出出版社　一九九五年
・司馬遼太郎・白洲正子・水上勉「近江路散歩」新潮社　一九八八年
・信多純一「祈りの文化―大津絵模様・絵馬模様―」思文閣出版　二〇〇九年
・須藤功「大絵馬ものがたり5　昔話と伝説の人びと」農山漁村文化協会　二〇一〇年
・大津市歴史博物館「庶民の祈り―近江の絵馬」一九九一年
・茨木県立歴史館「祈りの歴史と民俗　絵馬」一九九八年
・福岡県立美術館「神にささげた祈りの美　絵馬」一九九九年
・松葉涼子　立命館文学第６３０号　論文「近世期の画像資料に見る門破り図像の受容と展開」二〇一三年
・梶原正昭　校注「平家物語」おうふう（桜楓社）一九八四年
・岩崎文庫貴重本叢刊　近世編　第一巻「幸若舞曲　御伽草子」貴重本刊行会　一九七四年

近江の水をめぐる 3

石川 亮

近江の水をめぐる 3

石川 亮

Name :
ISHIKAWA　Ryo

Title :
The Water of Omi：Part Three

Summary :
I began making artworks using water I collected from springs throughout Shiga Prefecture in 2010. This marked the start of what has become my ongoing investigation of the background and roots of the various springs of Shiga Prefecture, most of which have names that can be traced back to traditional stories, area names, and the like. The focus of my current research is on the life that sprang up around water sources and the cultures to which the water gave rise.

近江（滋賀県）の地の水探求はかれこれ六年が経とうとしている。自己の造形表現から始まった近江の水研究はアーティストステイトメント（作家の作品制作におけるスタンスや作品コンセプトの基本的な考え方やテーマ）をより強固で、私自身の自信に繋がる重要なウェイトを占めてきているとあらためて感じている。美術作家は作品制作を持続させながら、新たなリアリティ（現実感）を見つけ出し、言葉や文章でそれを残す事より優先して、絵であり立体などの作品として表現することで感覚や考えを確認したいのではないかと考える。勿論文字や言葉で思考しないわけではない。作品が仕上る過程において徐々に整理され、同時にぴったりくるタイトルや言葉、考えがまとまってきたところで漸く文章化されてくる。そしてそれが次の制作やアイデアを開く糸口になって行くのだと信じている。

近江をフィールドに基軸にした様々な学びにおいても水源を調べることは町や村の成り立ちや生活、生業を追いかけて行くのに有効な手段となっているのに気付いてきた。二〇一五年十二月に元金沢市長の町づくりに関する講演に携わる機会を得た。その際に事前に金沢市を知るため現地取材を行うことができた。

先ずはじめに調査したのはやはり水である。武家の歴史が色濃い城下町を形成する二つの川、そして城下に潤いを導く主要な用水は安定した政を推し進め生業と文化を育む原点である。そして「金洗いの沢」伝説を物語る湧水「金城霊澤」は城を形成する小立野台地に現在も湧き出ており、金沢の地名の由来になっている。また、私が幼少期から学生時代まで過ごした京都伏見も伏流水の伏水から由来していると聞いた事がある。ほぼ中心に位置する御香宮は今も「御香水」が湧き出ている。先日、伏見を訪れ驚いたことに「伏見湧水マップ」が観光向けに発行されており、金沢同様、城下町であることから、交通の要衝、高台への築城そして裕福な水は必然的な条件なのであるに違いない。

近江の水研究は自己の表現から様々な思考へと広がる可能性となっている。それは暮しや生業、をみることから近代の生活が忘れてきた知恵や工夫、地縁や血縁の重要性を呼び覚まし、気付かせる学びになってきている様に感じている。

一、音の水、呼び名の水（おんのみず、よびなのみず）―

湧水は名称の無い、命名されるに至っていない水がある。もともと水場に名称をつけるという感覚がない時代（今日はすぐに観光地になり水場以上の存在感を放っているものもある。）から今日も途切れる事無く湧き出している水に迫りたい。

水場を発見すると一番に気になるのが名称である。これまでに紹介してきたように、取水口の脇に表札が立っており、きちんと名称と由来が書かれているもの、中には自然石に筆文字体で掘りこまれた堂々たるもの、一〇キロ先から道案内があるものなど今や地名よりも有名な存在になっている水がある。水場の名前を知ることでその周辺の地域の伝承や歴史が読み解けてくる。人物に由来するもの、周辺の植物に関係することなど、それが水の存在価値や威力みたいなものを表現していると言ってよいと考えている。

しかしどうだろうか、当時の水場（湧水）は今日、我々の生活以上に日常的且つ必要不可欠であったに違いない、いわば共同の生活インフラである。何処にでも存在し、誰となく周辺住民が呼び名で或は音で覚えており、あえて文字に書き起す程でもなかったのであろう。これまでに現地の方々に幾度と名称と文字を聞き取りしてきたが、曖昧で微妙な名称や平仮名しか書き様が無いもの、音に漢字を当ててあるものが多い。おそらく名称よりも暮しや生活の現役選手であり、当たり前過ぎる存在だったのであろう。その代表的とも言える水を紹介していきたいと思う。

おいえのみず（大江の水、大江の泉）

近江八幡市の中心市街地の北に八幡山がそびえている。その南麓に街を象徴する日牟禮八幡宮がある。そこから東へ、山裾

に少し進むと北之庄という集落にさしあたる。村社である北之庄神社をすぎると更に道は狭くなり路地に迷い込んだ感じがする。角を曲がった辺に道標がある。そこを北へ足を進めると左手山側に赤い鳥居の稲荷神社がみえる。気をつけながらゆっくり進むと大江観世音と書かれた提灯がぶら下がる東屋に出会う。ちょうどその手前山側にいりくんだ地形がありその奥が水場である。石柱で手前側と奥が仕切られ、見るからに古くから地域の方々が大事に受継がれてきた事が伺える。表札は無く、霊水である断りがさりげなく知らされていた。水近くの住人の紹介で北之庄自治会長をされておられた廣田平治（ひろたへいじ）さんにお話を聞く事ができた。廣田さんの祖父の言い伝えや現在も持続されている祭礼行事、地域に伝わることをお話いただいた。先ずはその名称から聞くと「おいえのみず、と呼ばれています。」理由おそらく、湧出量が多く周囲が小池のようになっている事から転じたのではないか、皆が迷い無く「おいえ」と音で受継がれて来た事から現在も「おいえのみず」と伝わっている。同じく観音さんもお稲荷さんも「おいえ（大江）の～」と呼ばれているそうだ。

以下廣田さんの調べを抜粋すると

近江蒲生郡誌によると、この泉の事を「大湯・朝日瀑ともいう美泉、岩角より湧出して冬暖かく、夏冷たく清冷に徹し、酒を醸し茶を品し製糸染布等にも適すとて、名泉の称古より高し。」と記されている。このため神泉として大切にされ北之庄祭礼の稚児を初め参加者の清めとして用いられている。そのお刷毛の湯釜の水は、祭礼当日の〇時に稚児元を先頭に北之庄神社に参拝し、この泉まで塩で道中を清め桶二杯の若水を汲み使用する事になっている。また、北之庄墓地（三昧・さんまいと呼ばれている。）で使用する水はこの水を使い、帰る時はこの水で手足を洗い、穢れを落とすということになっている。湯口の石柵で囲まれた外の二面の水場は洗濯場となっており、上段が濯ぎ場となっている。洗濯機が普及するまで洗濯場として特に夏は大変賑わった。

と記されている。

廣田さんの家の前の道は往還（おうかん）と呼ばれ、現在の多賀町三叉路と鍛冶屋町に残る道標に観音正寺・長命寺の名称が刻まれていることから「西国三十三箇所札所巡礼の道で賑わった事が伺える主要な道（長命寺街道）であろう。」と話された。現在は一九三八年（昭和十三年）に開通した県道26号が数百メートル東を走りその役割をなしている。廣田さんは初見の私に対して、熱く丁寧に地域の歴史を当時の住民の立場に立ってお話して下さった。更に水場を保持するため北之庄とその周辺、自治体の間で様々な論争の歴史があり、今日に至っていると吐露された。史実や正史に残らない地域のリアリティーを記録し受継ごうとする気持ちに心うたれた。今日も現代の様々な問題が日々勃発している。中でも宗教、信仰、文化の違

いによる対立は簡単に解決に至らない。

　隠れた歴史を経て、途切れる事無く絶えず湧き出るこの呼び名の水に底知れぬ威力を感じた。普段は車で足早に通りすぎるのであるが、往還沿いに立ち並ぶ様々な北之庄史を感じながらこの地を後にした。

石柵の手前は生活の水、奥は霊泉

取水口の穴に柄杓を持って行く筆者

観音堂の左側奥手に水場がある

におうど（鳰戸、似小戸、仁王戸）

　東近江市五個荘は近江商人を多く産み出した街である。旧中山道からびわ湖方向へ入った町並みは屋敷が多く建ち並び、用水路が走り江戸期の様子を今日に伝えている。その合間には森が散在し、寺社仏閣が多く立ち並ぶ事から信仰の熱い場所である事も間違いない。北東には愛知川が流れ、現在の御幸橋西詰辺りは旅人の往来で賑わったのであろうと想像する。現在の国道８号線簗瀬の交差点より少し西に入ったところにこの辺りでも比較的大きな社、小幡神社がある。その前にコボコボと音を立てて水が流れ込んでいる池がある。厳密に言うと西隣の齢仙寺境内から一旦石垣の上に鎮座する龍を経由し、その口から池に向かって注がれている。齢仙寺住職の後藤慶裕（ごとうけいゆう）さんにお話を聞く事ができた。寺の歴史も平成八年に再販された齢仙寺三百年史があり、二言三言で済まされない程の濃厚なものであることを抑えておきたい。さてこの「におうど」であるが愛知川の伏流水であったと考えられる。山門前にある大人の背丈程ある自然石には「鳰戸霊泉」と篆書体で彫り込まれている。鳰は滋賀県の鳥でびわ湖を象徴する。その井戸が、鳰の湖の扉のごとく砂を吹き上げ溢れ出ていた事から今日にその名を伝えている。しかし一九七二年から始まった治水事業（琵琶湖総合開発）によりほとんど自噴能力がなくなったそうだ。現在はポンプアップされ先程述べた龍の口に送られている。

　次に滋賀県神社誌、小幡神社由緒をみると、

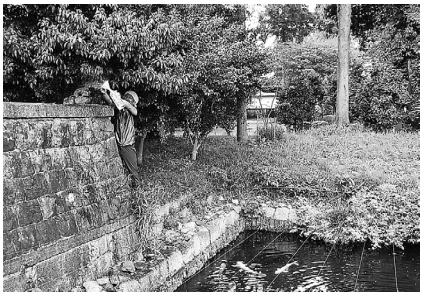
「創始の伝承はさまざまであるが、何れにしても似小戸とたたえる霊泉の四時滾滾と絶えることのない聖域に氏神の宮居を崇祀した父祖の深い祈りが偲ばれる。」

とある。更に、

「境内西南宮に清冽なる泉あり「似小戸」と称す。伊邪那岐命が禊し給うた橘の小戸にも似たる故を以てなり。近江輿地志略七十　春日霊水春日神社の界内にあり甚だ以て清潔の水なり。琵琶湖志巻十五　春日の霊水　小幡村に在り、小幡明神とて春日の神なり、この社内にあり清浄の霊水なり。淡海国木間攫巻六　小幡大明神　生土神なり　祭神南都春日神に同躰なり、名水当社の境内にあり、春日の霊水と云い至って清潔の水なりと。」

と記されている。最後に一つ、後藤住職の話に戻るが、齢仙寺の鬼門にあたる毘沙門堂に仁王像の一部が置かれているそうだ。永禄年間の信長上洛による兵火で、伽羅全てを焼失してしまったと伝わっており、山門の仁王像の一部が焼け残っているとのこと。その「仁王さんの井戸、仁王戸」と伝わる話もあるそうだ。いずれにしても「におうど」と地域の人々が呼んでいた事は間違いない。齢仙寺の名称の変遷も興味深い。明暦元年（一六五五年）九月、伽羅を建立され、霊像のある所に慈雲が棚引いていたことより霊像山慈雲寺と称し、後に門前に泉のあるところから慈雲山霊泉寺と言われるようになる。享保年間に寺内に不幸が重なったため霊泉寺（霊が泉のごとく）から齢仙寺（年齢が仙人のごとく）と改称され、現在に至っているようである。

神仏にゆかりのある地で人々の往来が有り、様々な物資や情報が行き交うこの地に湧きいずる水であるからこそ、様々な所以が残っている。亀や鯉、うなぎが一緒に暮らす放水池を眺めながら最近まで水を汲みに来ていた人々の様


石垣の龍の口より水を汲む

かつてはこの池から砂を吹き上げ湧き出ていた

齢仙寺前に立つ鳩戸霊泉の石碑

子を想像した。

テンオー（名水 天皇の水）

長浜市高月町は美しい用水が流れる「水の町」である。左手に水瓶を持つ向源寺の国宝十一面観音立像はあまりにも有名だ。そこから少し東へ北国脇往還（国道365号線）を進むと高時川と交差する。阿弥陀橋を渡り直ぐに北上すると辺りは田園地帯となる。ここは馬上と書いて「まけ」と呼ぶ。東に山田山が見えその谷筋めざして更に山裾へと続く道を行くと名水への案内表示が現れる。私は数回訪ねているがいつも鬱蒼としており気味が悪い。しかし「名水天皇の水」と記された案内板があること、地域の住民の努めであろうか掃除が行き届いており、名水への導きは明快だ。自然石で積み上げた水路を数メートルたどると直径三〇センチ程の石灰岩の割れ目を発見できる。そこが水源だ。日の光がほとんど入らないこの雰囲気での水場は威厳を感じる。背後には寺跡が有る。名称が掘られた立派な石碑はあるが由緒書のようなものはない。『高月町のむかし話』（高月町教育委員会編）による面白い伝承を見付けたので紹介したい。

徳川時代の始めの頃、馬上の伍井という人の跡取り息子が、原因のわからない病気にかかりました。両親が医者に診せるなどして、一生懸命看病をしますがどんどん悪くなるばかり。ある夜、看病疲れでうとうとした母親が「北馬上在の谷の東北の岩の間から美しい清水が湧き出ています。その水を、夜丑の刻に汲んで、盃に二、三杯飲ませる行を百日続けなさい。」というお告げを聞いたのです。両親はすぐお告げの場所を探し、息子に清水を飲ませ続けました。そして百日目…。目の前に仙人が現れ、「よくぞ百日の行を続けた。御神助間違いなし」と言い残すと消えていきました。すると不思議なことにあれほど重かった息子の病気が日に日によくなったということです。その湧き出る場所を「テンオー」といいましたが、日本の天皇の名を借りて「天皇の水」と名付けたということです。以来、人々の臨終前に「天皇の水」を与えると、極楽往生が出来ると言われるようになり、年寄りの人達は平時でも「天皇の水」を汲み帰り、生涯の幸せを感謝しながらその水を賞味する人が沢山あります。この水は、どんな旱魃にも、一度も涸れず、天皇の水は郷人から恵みの水として、尊ばれ、伝わる事でしょう。（部分的に編集）

とある。現在はこのような伝承と石碑の存在が名水の名称を伝えているが、「テンオー」と呼ばれていたのであろうか。この辺の人で木ノ本の造り酒屋の職人で兼業農家の人に話を聞いてみると馬上周辺に湧水はあちこちに有るとのこと。「いつも汲んでいるけど、名前のことなど意識したこと無いです。」と即答された。

これまで、「近江の水をめぐる」において、比較的名称の存

在を重要視してきた。その理由に唯一無二の存在であることや使用する住民の水に対する意識の高さや信仰心に近いものが有るのではないか、という私自身の捉え方でこのように考えてきたわけである。しかし今回とり上げた水で少し考え方が変わったように思う。それは名称がついている水は地域の住民以外を対象とした意識が既に備わっており、観光や環境保全、教育などの観点からとり上げられ「近代社会においての位置付け」という印象が強い。それが悪い事とは思わないが、地域住民が伝承や祭礼と共に受継いでこられた水は他ならぬ水であり、くらしそのものなのである。「呼び名や音」で自然に残っているのであって、何かと区別する為の名称というものでは無いのだと感じた。

　くらしと一体化している水に、名称など関係ないのかもしれない。

山田山の西側麓へと続く道

二、帯の水、群の水（たいのみず、ぐんのみず）――

　地域一帯が湧水群であり、一つひとつに名称をもたず、地域のくらしを含めて周囲がひとつの湧水帯になっているものをとりあげていきたい。

　針江地区や伊吹山麓、醒ケ井付近、安土常楽寺など、比良山系の麓に至っては無数の湧水が群を成している。その一つひとつに名称が付けられているものも有るが、ここでは地域内に数カ所の水場が存在し総称として呼ばれている水を見ていきたい。

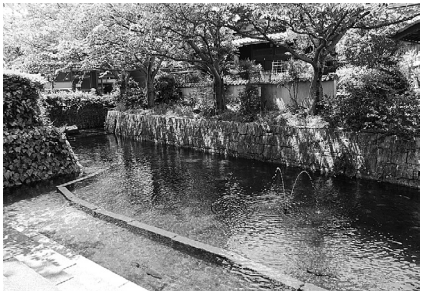
名水への導きが明快

石段最後の割れ目より水を汲む

浅小井湧水（あさごいゆうすい）

県道２号大津能登川長浜線を近江八幡市内から東へ安土方面に行く途中、浅小井町という交差点に差し掛かる。そこをびわ湖方面に入ると浅小井地区だ。西の入口付近に東屋が建っており、中を覗くと三メートル四方の池の中心から水が湧き出ていた。周囲は石段とベンチが用意され湧水公園に迎え入れるような雰囲気だ。横には「上（かみ）の湧水公園」と表示された石碑があり「あさごい湧水マップ」が描かれている。導かれる様に集落へ進むと水路が廻らされ、周辺には植木や花が植えられ気持ちが良い。集落の中央部に来ると方形の池が有り石段で囲われている。鯉や鴨が飼われ、二本の噴水が設置され「リフレッシュ浅小井 湧水の里」の表示が立っている。地区で長年まちづくりをされてきた南喜蔵（みなみきぞう）さんにお話を聞く事が出来た。愛知川の伏流水により旧蛇砂川（きゅうへびすながわ）の河川敷で豊富な地下水に恵まれ、昭和三〇年代まで船だまりとして掘割の往来時の面影を復元しているそうだ。ふと考えると県道2号から入ったので気付くのに時間がかかったのか、ちょうどこの集落の北側には西の湖がある。今日もヨシが群生しており、総合開発のあおりから免れた地域であることが想像できる。更に東へ少し入ったところに「お池さん」と呼ばれる湧水が東出地蔵堂の横にある。ここには全部で五カ所の湧水があり、地域と一緒に共創されて今日に至っていることがわかる。再び中央部に戻ると平成四年七月に「くらしに根づく施設」として受賞した建設省の「手づくり郷土賞」の銘板入り石碑を発見した。まちづくり計画は一旦落ち着いているようだ。南さんは「自然に水辺に寄り添って暮らせることが大事なんや。」と話されたのが印象的だった。浅く小さな井戸が多く吹き出していた地、浅小井湧水である。

お池さん


湧水の里

東屋で水を汲む

軽野湧水（かるのゆうすい）

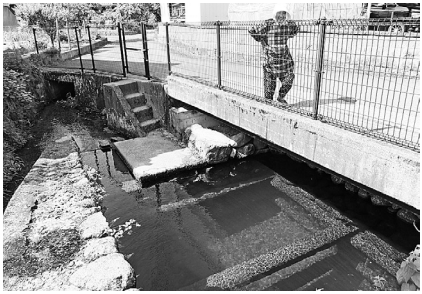
中山道愛知川宿から県道28号へ入り、近江鉄道踏切、新幹線高架をこえ、東へしばらく車を走らせると自然石を積んだような常夜灯が見える。香之庄（このしょう）交差点を左折、県道218号を北上し、宇曽川を渡ったあたりが軽野地区である。

少し進むと左側にフェンスが見える。近づくとエメラルドグリーンの水面が光っている。興奮覚めやらず覗き込むと五メートル四方に古い石垣が組まれ、水深三メートルはあろうか、沢山の魚影の向うに自分の顔が映っているのがわかる。すっかり虜になっていると農作業されているお婆さんにお会いした。「道の向うにもあるで！」と案内されると同じくらいの水場が現れた。しばらく立ち尽くしていると、「夏はひゃっこいで冬は温たいは！皆ここらで洗い物などしてますねん。」と「嫁いで来た時にはもうあったで！」と話された。いろいろ水場を見て来たがこんなに美しい状態で今に伝えている水場は稀である。集落を散策していると軽野公民館に着いた。ここに「軽野地区湧水を中心とした概要」と記された案内版を発見した。湧水分布図と大正二年の御池改修事で石垣工事の写真が掲載されていた。読むと鈴鹿山系の伏流水がいたる所で噴出しており、大小合わせて約二〇カ所にも及ぶ。「壱の湧」「今池」「御池」「新池」「藤治川」と大きな池が石垣に大木の梁を渡し人力で整備された事が記されていた。集落内の家庭においては出壷や川端として取り込み生活の糧としていたそうだ。平成二〇年七月には「かる

公民館の案内版

新池

出壷で遊ぶ子供たち


藤治川にてお婆さん

の湧水湿原景観保全会」を立ち上げ湿地保全と自然保護の取組みを進め、平成二年には「うるおいのあるまちづくり事業」、軽野地区を「わき水の里」自然と先人が残した農村文化遺産として見つめ直している。その軽野が湧水と共生する意を示す案内板は平成二三年三月に設置される。

水を介し今日に至ってまちづくりを展開、持続する大物の湧水群である事は間違いない。

川合の自噴井（かわいのじふんい）

長浜市木之本町川合は木ノ本市街地の、東横町より東へ、国道３０３号線を進み高時川を渡ると交差点に差し掛かる。そこを左（北）へ県道２８５号線を進むとこの道沿いが川合の集落である。左右を見渡しながら進むとコンクリート製の槽が家の軒先に設けられている。ご近所同士、共同で使用されているのであろうか、錦鯉が飼われている水場も有り、ゆったりとした空気が流れている。もう少し行くとＹ字路になったところに円筒状のコンクリートの水場を発見した。ペットボトルを途中で切ったような透明の容器が数個、円筒の途中から注ぎ口が出ており、そこから音をたてて水が出ている。その水を受け止める鍋が置かれていた。交差点の合流地点で県道表示と並ぶ様にあることが何とも滑稽である。あまり人影は見かけないが、くらしを感じる光景である。合流点を左に少し行くと先程渡った高時川の源流が北西方面から、杉野川が北から合流しており、なるほどそれで「川合」か、と納得した。高時川の川筋に沿い、谷間の段丘に並ぶ様にして佇む集落はおそらく用水に不便したのであろう。水に触れてみると金気が混じっているように感じた。杉野川沿いの岐阜県へと抜ける道沿いにも同様のコンクリート製の自噴井をいくつか発見した。地域で共有しながら活用してきた水である。

集落一帯が湧水群、あるいは同じ水系の水であり総称として呼ばれている水場に迫ってみた。冒頭に記した様にこの手の湧水群はまだまだびわ湖の周りにたくさん存在する。今回に留まらず注目して行きたい「帯の水、群の水」である。

鍋に溜まった水を汲む

県道285号線と岐阜方面への道の合流点

県道285号線と岐阜方面への道の合流点

三、参りの水、頼みの水（まいりのみず、たのみのみず）

「お百度参り」や「苦しい時の神頼み」という言葉をこれまで何度も耳にした。私自身は前者のように何度も参った記憶はないが、後者で、何も打つ手が無くなった時に神仏の前で何度も手を合わせた記憶も多々思い出される。

今も昔も庶民は、理由はともかく只々無心で参り、頼み事をして辛い時や苦しい時を乗り越えて来たのではないだろうか。

神仏います近江にも様々な庶民の拠り所があるが今も昔も庶民の味方であるご利益の御神水に迫ってみたい。

長濱八幡宮の御神水（ながはまはちまんぐうのごしんすい）

JR長浜駅から表通りを東へ市役所前の交差点を左折し、二筋目の角の敷地に広がる場が長濱八幡宮である。表通りに面していないのでここからが御神水を探し出す本番になる。八幡宮の拝殿に向かって左側に建物と放生池が有る。その間にちょうど人が一人通れる程度の小道があり、前に「御神水」と記された立て札が発見できる。その奥に竹筒から勢いよく流れ出る湧水が御神水だ。初めて訪れた時は三〇分程境内をウロウロし、見付けた時にはあまりにも水場の空間の狭さにその場で笑ってしまったことを思い出した。

立て札には

「千古の境内を巡りて、命の源として放水池に流れ込む当宮の御神水は非常に霊験あらたかで、早朝より汲みにこられる方は後を立たず、お茶や御飯炊きに用いられ健康に過ごされ、又病気の方は飲用されることによりその災いを快方にむかわせるとも言われる

人知れず 清々しくも 祖の心か 神の水なり」

と記されていた。八幡宮にはもう一つ不思議な水場が有る。私が御神水を探し当てる前に間違えて認識した銅葺きの立派な東屋があり周囲は木製の格子柵で覆われ入る事の出来ない井戸が有る。その中に緑色の釉薬が施された陶製の取水口があり、常時一定の水がチョロチョロと流れ出ている。襴宜の山根さんの話では「清々（せいせい）井戸」と呼ばれ、以前は出水舎で

清々井戸（長濱八幡宮）

長濱八幡宮の御神水を汲む

清々井戸の東屋（長濱八幡宮）

放生池の脇に御神水の札がある

あったが、はだか祭の時、若衆が身を清める場であり、長浜曳山祭りでは、子供歌舞伎役者の健康とくじ運を祈願して水ごいが行われるとの事である。

建部大社の御神水（たけべたいしゃのごしんすい）

言わずと知れた近江一之宮、建部大社にも湧水の御神水が存在したのでここで紹介したい。旧東海道を大津石山側から歩き、瀬田の唐橋を渡って東へ、神領の交差点を直進すると建部大社の石碑が見えて来る。官幣大社の文字にコンクリートが埋め込まれているのをみると、この社の大きさが増して伝わってくるのは私だけであろうか。向かって左側に大きな石の鳥居と数本の松が迎え入れてくれた。日本武尊と大己貴命（おおむなちのみこと）をお祀りし、出世開運、除災厄除、商売繁盛、縁結び、医薬醸造の神として広く崇敬されている。神社の由緒は尽きないのでここで止めておくとして、問題の水場だ。二之鳥居から参道を歩いて神門へ着く。ひと息おいて中へ入ると目前に拝殿が有る右側に三本杉、左側に社務所が見えた。この辺りをウロウロしていると「ポコポコ」とそれらしき音が聞こえてきた。木陰の奥まったところに六〇センチ角程度の石の井戸を発見。その先端から水が常時溢れ出ており、井桁の上に柄杓が数本並んでいた。石には御神水と彫刻されている。禰宜の大宮さんにお話を聞くと、ご近所の方々や病を患っておられる方が汲みにこられるそうだ。水源のことなどもう少し聞き込むと快く返答

して下さった。境内の北東方向に位置する宝物殿の裏側に実は溢れんばかりの水が今も湧き出ており、池などに分水されているとの事、湧水の御神水である。「そのご利益は参られる方々によって様々ですが、金運ということでいかがでしょうか」と。祭神である日本武尊は日本で初の千円紙幣に描かれ、また左に描かれた社殿は建部大社本殿が採用された。昭和二〇年八月に発行され、最も多くの刷色を用いてつくられたそうだ。

近江国府がおかれ、東海道瀬田の唐橋前、そして生命の源である水が溢れ出ていた場所、このような全ての条件が揃うところに一之宮がおかれ、金運が廻ってくるのだと。

社務所の脇にある建部大社の御神水

御神水の水を汲む筆者（建部大社）

拝殿の右、宝物殿の裏側に源泉がある。（建部大社）

日吉大社の亀井霊水（ひよしたいしゃのかめいれいすい）

大津市坂本、比叡山の麓に鎮座する全国に約二、〇〇〇社ある日吉、日枝、山王神社の総本社である。お山の上の延暦寺と共に信仰を今に伝える神仏習合の極みと言って過言ではないだろう。日吉大社は東本宮と西本宮をはじめとする山王七社がご祭神として祀られている。今回紹介する「亀井霊水」は地主神である大山咋神（おおやまくいのかみ）を祀る東本宮の敷地内に湧き出ている。厳密には樹下神社と新物忌神社の間に石柱で四角形の枠で囲み格子状に汲まれている。さらにその内部は六角形の井戸が組まれており、よく見ると、水が揺らめき湧き出ているのがわかる。境内の景色を写しながら、ご利益の気持ち

で投げ入れられた銀色の円がキラキラ光っている。

横に立て札があったので読むと

「昔、ここは池があり、伝教太師参拝の折、霊亀が現れた。占いによりここを閼伽井（仏様に捧げる水を汲む井戸）となし、『亀井』と名付けられた。最名水也　『日吉山王權現知新記』より」

と記されていた。禰宜の矢頭さんにお話を聞くと、大物忌神社の脇からも水が流れており同じ水系との事、神社内では大行事水と呼ばれているそうだ。

「お山に染込んだ水が湧き出し、ここで神仏に捧げる水を飲水できることがご利益なのではないでしょうか」と話された事が印象的でした。

日吉大社にはあまり知られていないが、もう一つ重要な謎の湧水が有るようだ。しっかり調べて後述したい。

今も昔も庶民にとって現世利益の象徴のような、水をとりあげた。中でも「御神水」は近江にはまだまだ無数に有る事は言うまでもない。そこで我に帰って考えてみた。絵馬に願い事を具体的に記す事や、御札に祈願を記す事は他力ではない自力で世の中に訴えかけている様に感じるのだ。古人が自分の願いや思いを書き記す事によって、世に訴える事が出来る唯一の手段であったのではないだろうか？ご利益の印となる水と交換する（或は飲水する）ことで何とか自分の気持ちを鎮めていたのではないだろうか、とさえ感じるのである。

コミュニケーションの方法が多様化した現在、本当に我々の抱えている願いや思いがきちんと表現され、相手や世間に伝わっているのであろうか。「参りの水、頼みの水」を企てながらもう一度自問してみた。

亀井霊水に繋がる大行事水で水を汲む

亀井霊水と大行事水

六角形の井戸

四、伝の水、宝の水（でんのみず、ほうのみず）――

数多くの伝承や地域の宝となっている水を見てきた。先述した神社の御神水に続き、近江には数多くの寺院が存在する。仏教母山の存在と太湖の関係は今日の近江に恩恵をもたらしている事は言うまでもない。日本文化の繁栄の起源はこの地で栄えた信仰と流通によって育まれたくらしにあると言えよう。その聖地は伝承と信仰の対象であり地域の宝として支えてきた原点の水に迫ってみる。

弁慶水（べんけいすい）比叡山延暦寺

比叡山東塔にある法華総持院から北西方向に坂道を進むと、老杉の間から東屋が見えてくる。普段は鍵がかけられているが、お寺の許可を取って中を見せていただき、儀礼に習って汲水したことがある。中は湧水が周りの土を崩して埋まってしまわない様、石柱で井桁に組まれており、のぞくと水面に顔が映った。付近には天台寺門宗の開祖、智証の住坊であり比叡山で最古の仏像とされる千手観音像が祀られていた千手堂とも呼ばれた山王院がある。ここは大比叡の尾根から下った窪地に位置しており、ちょうど平坦な地形が始まる場所である。おそらく水が溜まり易く、豊富な水が湧出していたのであろう。過酷な環境の山において厳しい修行に耐え、仏に供える水が確保できる事から聖地としてこの地を選択したにちがいないと想像した。「千手水」「千寿水」「弁慶水」など多くの異称を持つ閼伽水であるが、それらの由来を「山門堂社由緒記」からみてみると、

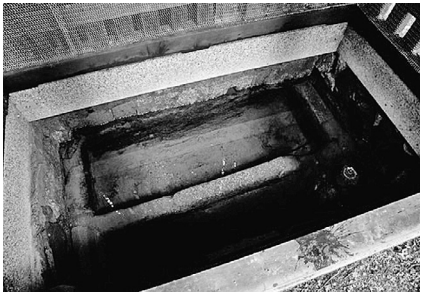
山王院千手大士の閼伽水なり。（千手水）寛平法皇、かつてこの水を掬（く）み勅して千手水（又は千寿水）と号す。（千寿水）武蔵坊弁慶、一千日夜に勇力を大士に祈り、この水を用って浴身す。（弁慶水）平相国清盛、熱病の時この千手水を以って浴す。

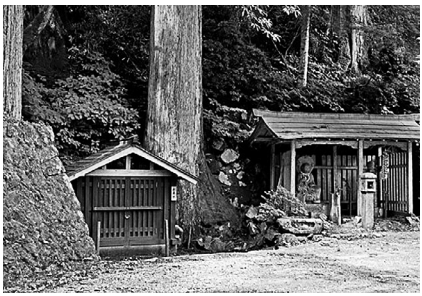
と記されている。住職の武円超（たけえんちょう）さんにお話を聞く事が出来た。比叡山のお水はこの弁慶水が優先で使用される大切な水であると話された。お山の生活を支える命の水、仏に供える閼伽水として当然の如く、密教の教えより阿闍梨からその資格を得る為の儀式である伝法灌頂（でんぽうかんじょう）においてこの水が注がれる重要な水であるとお話しされた。この辺は針葉樹が生い茂る事より水が溜まりにくい筈だが不思議であるとも付け加えられた。

最後に「この場所に水が出ていなければ延暦寺の存在も、今日の我々の存在もなかったのでは」と話されたのが印象

弁慶水を汲水していただく

的だった。この他、お山の中には無動寺谷に「閼伽井」横川中堂の側に「如法水・にょほうすい」横川の道元禅師得度の遺跡に「独股水・とっこすい」がある。


石で組まれている弁慶水


杉の木の根元にある弁慶水

塩谷の水（しおたにのみず）塩谷山洞寿院（えんこくざんとうじゅいん）

国道３６５号を北上、余呉支所前の交差点を東へ途中一時、北国街道と交わりながら北陸自動車道をくぐると県道２８４号になる。高時川と合流、丹生川と名前を変えさらに北上すると菅並の集落に入る。その最深部に六所神社が現れる。分かれて妙理川に沿い少し谷をあがったところに曹洞宗の古刹、塩谷山洞寿院護国禅寺がある。

辺はまっすぐに延びる杉が生い茂っており、山門が迎えてくれる。水場はその山門の右手山側にある。初めて訪れた二〇一〇年の冬は豪雪に見舞われ辺り一面雪に覆われていたが、湧水ポイントは周囲の雪を溶かし、「ここぞ！」と言わんばかりか直ぐに発見する事が出来た。その手前には地元の方が立てたのであろうか、「みんなの塩谷の水」と書かれた表札が立っている。見上げると側に赤い前掛けをした観音さまが吹雪に耐えていた。水は勢い良く流れていたことを覚えている。その後何度か訪問しているが、いつも杉の木漏れ日を浴び、苔むした中の水場は美しい。

応永十三年（一四〇六）如仲禅師（にょちゅうぜんじ）による開山。山号は、この地が中国五台山に似た景勝地で、谷水に塩分があり修業に便利であった。洞寿という名の由来は、遷洞長寿「幽仙に移って長生きする」からと伝わる。住職の竹内昭道（たけうちしょうどう）さんにお話を伺うと、寺に二つの宝物が伝わっているという。ひとつは如仲が退治した龍が、枕元に現れ置いていった玉と伝わる「龍の玉」、ひとつは白山権現のお告げがあり、一夜にして湧いたという塩泉の「塩之華」である。これは「ソフトボールくらいの大きさで珊瑚礁のような感じだ」と、塩谷という名が地名となり、山号となり、その水は現在も正月の若水、閼伽水として供えられていると最後に話された。

聖観音の奥にある塩谷の水

塩谷の水を汲む

山門の側にある塩谷の水

善水（ぜんすい）岩根山善水寺

JR草津線甲西駅より市街地を越えると野洲川に出る目前に東西に細長い山容が見える岩根山十二坊と呼ばれるこの地はかつて仏教修行の道場して栄えていた様である。甲西大橋を渡って道なりに車を走らせ案内に導かれて進むと山の中腹に善水寺が現れる。或は岩根の集落から山を登ってお寺に入る事も出来る。

この寺を訪れた人はこの湧水のことを知らずして山を下りる人はいないであろう。本堂の東側に百伝（ももつて）の池がありその奥に湧水がある。まえには立派な石碑があり所以が示されている。

「善水」とは、医王善逝の御香水（いおうぜんぜいのおこうずい）と呼ばれ、医王とは薬師、善逝とは如来の意味があり、傳教大師は百伝の池水をもって薬師如来の宝前にて医王善逝の秘法を修する事七日間、桓武天皇の病気平癒を祈念され、忽ちの内に快癒されたことから「善水寺」の号を賜ったものである。すなわち、善水とは百伝の池水を元水として、本尊薬師如来の宝前にて医王善逝の秘法にて祈願した水のことである。と、ここまでがよく知られている話。

住職の梅中堯弘（うめなかぎょうこう）さんにお話を伺うことができた。言い伝えでは、この辺は水が少なく雨乞いのため最澄が周囲を見ておられた。すると光がさす場所があり、その場に行くと水面に梶の葉が浮いていた。不思議に思って葉をめ

くると経文が表れ「是好良薬今留在此（ぜこうろうやくこんるざいし）とあった。また水面の池より一寸八分程の閻浮壇金（えんぶだんごん）の薬師仏が現れ、七日間の雨乞祈祷の末、大雨をもたらしたとのこと。また地域伝承では本堂の北側に山のピークがあり、そこに医王山の壺があるそうだ。もう一つ、雷岩と呼ばれる岩があり二手に分かれてそこで「雨乞いの唄」を歌う風習が以前あったと聞く。その詩を覚えている方が亡くなられてしまい、非常に残念だとお話しされた。

繰り返すが山号になるほど、この水もまた、お寺にとって、地域にとっても非常に大事な水である事がわかる。この地においても水があっての今日まで営みなのかもしれない。

名水百選に並ぶ、いやそれ以上の様々な時代や職種の人々に関係をもたらした超横綱クラスの水に迫ってみた。湖北、湖西、湖南と三カ所とりあげたが近江には数えきれない程の伝承を持った水と地域の宝物のような存在として水がある。以前、人物と伝説という観点でもとりあげたが、個別的な意味合いが強かった。対して今回は寺の山内にある事から、時代を超えた普遍的な意味合いの強い水を対象とした。自然からの恩恵を受け、その事から始まる様々な営みや育みが日本人特有の自然観であり宗教観であると考えている。私は美術家であるが、近年ここに焦点をあてて行く事がテーマになっている。

善水の由緒書

善水を汲む

百伝（ももつて）の池の奥に善水がある

追記

二〇一二年十二月より滋賀県文化振興事業団が発行する「湖国と文化」に〝近江の水をめぐる〟と題して近江の湧水を写真と文で紹介する機会をあたえられた。現在まで十三回の連載が継続されており、十回から十三回の四回分のオリジナル文章を可能な限り残し、近江学研究紀要として再編集した。紀要の冒頭は二〇一六年一月現在における私自身の現況報告から始め、次に地域の人々が音で覚えて、呼び名で通じている「音の水、呼びの水」、湧水一つひとつに呼称はないが地域一帯と湧水群が一体となっている「帯の水、群の水」、神社の境内にあり湧水そのものが庶民の信仰の対象である「参りの水、頼みの水」、寺院の山内にあり仏に授ける閼伽の水や地域の宝物のような存在となっている「伝の水、宝の水」に焦点をあてた。

冒頭にも記したが近江における水研究は自己の造形表現から出発した。生命体に必要不可欠な水、それを「全体の水」として一先ず捉え、近江においては地域にある特徴的な性質をもつ唯一無二の存在としての「固有の水」として捉え、言語化してきた。毎回共通するテーマを儲け、三〜四カ所の共通点をあげてきたが、単なる場所や周辺地域、水場の紹介では事足らなくなってきた様に感じている。

我々は様々な豊かさをここ数年のあいだで獲得してしまった様に思う。それは人間が「生きたい。生き延びたい」という欲望を持つ限りいつの時代も尽きないものであろう。スマートフォンは今日、人と人を繋ぎ止めるツールとして全く手放す事の出来ないものに成り上がってしまった。個々が別々の時間、場所を過ごしながら情報を共有できる代物である…。

話は少し飛躍するが桶に残る水がどの程度残っているかを生活しながら計っている時代があった筈だ。その水の汲み時がいつか暗黙の了解で通じ合う事が出来たのではないだろうか。我々はそのような勘を働かすことが出来なくなってきている様な気がする。不自由さの中から想像、創造する力が働き、様々な感覚のセンサーが働いたのであろう。

水研究に取組み、現場リサーチや聞取りをしていると、くらしの知恵や工夫が随所に見受けられる。水場周辺の仕組みや簡単な道具などがそのヒントを伝えている。

真野法界寺の六斎念仏

～大津市真野中村の念仏講が繋ぐコミュニティの現状と課題～

加藤　賢治

真野法界寺の六斎念仏
～大津市真野中村の念仏講が繋ぐコミュニティの現状と課題～

加藤　賢治

Name :
KATO Kenji

Title :
The Rokusai Nenbutsu of Mano Hokai-ji: An Overview of the role played by Nenbutsu-ko in uniting a community

Summary :
The Rokusai Nenbutsu (chant) practiced in the area of Mano in Otsu, Shiga, is the cornerstone of the Nenbutsu-ko (monthly gathering of devotees of Amitadha) that unites the people of the village of Nakamura. In this paper I will examine this regionally intertwined community, which is a valuable element in modern society; report on its current status; and outline points for further consideration.

はじめに

大津市北部地域の真野地区は、比叡山系から流れ出る真野川を中心とする豊かな農村地域であるが、滋賀県南部の他の地域と同じく、戦後の高度経済成長の流れで、京都、大阪のベッドタウンとして急速に新興住宅が増加してきた地域でもある。そのピークは過ぎたが、特に昭和の終わりから平成にかけては、大型ショッピング店やマンションが次々と立ち並んだ。その真野地区の中で今回取材した旧字の中村地区は、比較的近代化の流れを直接受けず、真野神田神社の氏子として、また、法界寺の檀家として古くから伝わる風習を守り続けている。

中村地区は現在の行政区ではほぼ真野一丁目、二丁目、三丁目にあたり、集落の各戸は、自治会とは別に、中村会という組織に属し、神田神社の祭礼、法界寺の宗教行事、愛宕講、行者講などの年中行事に関わるのである。

その中でも、この地域は、神社の氏子としてよりも、旦那寺である法界寺（浄土宗）との関係が深く、盆行事としての「施餓鬼」や「六斎念仏」などの行事において他の地域に見られぬ特徴がある。

特に六斎念仏は、盆行事が行われる八月に開催される。かつては全戸を巻き込んだ年行事として、深いコミュニティを築いてきた。今回は、この調査を通じて、現代における宗教行事のコミュニティ、その重要性と問題点について考えてみたい。

一、真野法界寺と六斎念仏

（ア）真野法界寺

浄土宗慈光山法界寺（大津市真野三丁目）は、大本山清浄華院の末寺として慶長二年（一五九七）に開創されたと当寺に伝わる。過去帳によると開山は、真野出身の有力者、桂昌院桂林昌公大和尚であるとされている。

真野地域は農地が市街化され、年々都市化が進む中、法界寺では旧来からの檀家約七〇数戸、三名の檀家総代が当寺の運営の中心を担っている。日常的には各檀家の戸主が念仏講を組織し、春秋の彼岸法要や盂蘭盆会法要、十夜法要など主体的に年中行事が行われる。

写真１：毎年８月14日に行われる真野法界寺の六斎念仏（平成26年の８月に筆者が撮影）

そして、それらの行事の中でも中心的なものが「六斎念仏」と呼ばれる念仏踊りである。

（イ）六斎念仏とは

六斎念仏とは、本来、六斎日（仏教でいう精進の日で毎月八日、十四日、十五日、二三日、二九日、三〇日を指す）に念仏を唱えることをいう。その起こりには諸説があるが、現在伝わるものには空也堂（紫雲山光勝寺極楽院）系と干菜山光福寺系という二つの流れがある。空也堂系にはその起源に関して、平安時代に市聖（いちのひじり）と呼ばれた空也上人（九〇三～九七二）が、松尾明神から鉦（かね）と太鼓を授けられて衆生救済のため念仏踊りをはじめ、民衆に念仏を布教したという伝承がつたわる。一方の干菜山光福寺系では、浄土宗西山派の道空が、十三世紀の半ばに京都烏丸の常行院で民衆に念仏を広めるため歓喜念仏踊りをはじめ、文永二年（一二六五）には亀山天皇から「六斎念仏」の号を賜わった。干菜山光福寺（現在京都市出町柳）は、別名干菜寺とも呼ばれ、寺伝によると豊臣秀吉が鷹狩りの際、当寺を訪れ、当時の住職が秀吉に干菜（大根や蕪の葉を干したもの）を献上したところ大いに喜ばれ、以後干菜山光福寺の名を拝命したという。江戸時代には光福寺は諸国における六斎念仏の総本山といわれ、寛永十四年（一六三七）から浄土宗鎮西派本山知恩院の支配下となった。

本来の六斎念仏は『金光明六斎精進功徳経』に基づいて、鉦と太鼓をならしながら衆生救済を目的としたものであるが、江戸時代には盆踊りと結びつき、江戸後期になると、見世物的な曲芸が行われるなど、芸能化していった。演じられる曲目も、発願、回向歌、弥陀願唱、念仏、結願という純仏教的なものから、能楽や浄瑠璃、歌舞伎から取材した楽曲が演じられるようになった。

京都では、昭和五二年に京都六斎念仏保存団体連合会が発足し、昭和五八年には「京都の六斎念仏」として国重要無形文化財に指定された。現在も十四団体が所属して、芸能の保存と後継者の育成に務めている。

京都の六斎念仏は獅子舞や猿回しなどが登場するなど、宗教的というよりもむしろ非常に芸能的な要素が濃いが、真野地域に伝わるものは、純粋な仏教行事として寺の檀徒が盆や彼岸の時期に行っている。真野地区は四つの集落（中村、沢、北村、浜）に分かれ、それぞれ、中村の法界寺（浄土宗鎮西派）、沢の浄国寺（浄土宗禅林寺派）、北村の願生寺（浄土宗禅林寺派）、浜の正源寺（浄土真宗本願寺派）と旦那寺が存在する。このうち六斎念仏を行っているのは、法界寺と浄国寺であるが、先述したように六斎念仏の総本山といわれた干菜山光福寺が知恩院を本山とする浄土宗鎮西派であることを思うと、京都からこの地域にはじめて六斎念仏が入ったのは法界寺であると考えるのが自然であるかもしれない。

また、京都をはじめ他地域（福井県若狭地方、和歌山県紀北

の高野山麓から紀ノ川流域、奈良県吉野川流域、奈良盆地、山梨県、大阪府兵庫県旧摂津地域などに六斎念仏が見られる。滋賀県内は朽木古屋、栗原などに見られる）の六斎念仏は、民俗芸能としての色彩が濃く、多くは保存会が組織され、各地で継承されているが、一方で「講」という宗教行事の一環として古くから地域の住民が受け継いでいるものもある。法界寺の六斎念仏は後者のかたちをとる貴重な行事であるといえる。

二、法界寺の六斎念仏

（ア）組織

真野法界寺の六斎念仏は、真野の旧字である中村集落にある念仏講の講員によって継承されている。真野中村地区は現在の行政区画でいうと真野一丁目から三丁目までが範囲となるが、新興住宅が大半を占め、全約二〇〇戸のうち、旧集落はおおよそ八〇戸で、この旧集落の住民はほとんどが兼業農家である。そして、氏神（神田神社）や旦那寺（法界寺）、そして山林を共有していることから、「中村会」を組織して、山林の管理や農作業、神仏に関わる行事、愛宕講、行者講、念仏講などの講中の運営を行っている。

念仏講の講員は中村会の構成員（各戸から男性一名以上で現在91名）がほぼそれにあたり、その内で、十五、六名が六斎念仏を継承している。毎年、八月十四日のお盆、八月二三日の地蔵盆に法界寺と旧集落を舞台として六斎念仏が行われる。

平成一〇年に「真野の六斎念仏」として滋賀県選択無形民俗文化財に指定されている。

（イ）法界寺の六斎念仏の現状

かつては、小学校高学年から鉦、太鼓を習いはじめたが、少子化もあり現在、子どもたちが練習する風景を見ることは希である。

例年八月六日から法界寺で練習が始まる。

十四日が六斎念仏の本番であり、鉦担当の二名と太鼓を担当する四名の合計六名が一つのチームで、かつては二チームに別れて檀家回りができたそうであるが、現在はベテランのチームが中心に檀家を回り、その他の人々は随行する。

十四日の当日の夕刻十八時、十五、六名の講員が、浴衣姿、団扇持参で法界寺本堂に集合。本堂外陣で太鼓を持つ四人が二人ずつ向かい合い、本堂内陣に向かって左手の太鼓の二人に後ろに鉦の担当の二人が付く。本堂内陣に向かって左奥の鉦の担当者は「トウジャ」と呼ばれて、このチームのリーダーにあたる。本堂内陣前の真中の太鼓担当は「カシラ」あるいは「カタ」と呼ばれる一番太鼓、その向い側が「オオバイ」と呼ばれる二番太鼓、その左手が三番太鼓、その向い側が四番太鼓である（図1参照）。他の講員は、それぞれの後ろに付いて団扇で鉦と太鼓の担当者を扇ぐ。

「トウジャ」の発声により「セイシュシャノコウミョウハ、ネンズルトコロヲテラシタマウ……ナンマイダブ、ナンマイダブ」との発願経からはじまり、太鼓と鉦が「ろっこ」「おしわたし」という二種類の節回しを奏で、六斎の讃が唱えられる。六斎念仏は約十五分で終了。

その後、鉦、太鼓の担当が交代し、再び六斎念仏がはじまった。このチームの念仏が終了すると、十九時前、本堂を出て、薄暗くなった観音堂の前で、三チーム目が六斎念仏を奉納した。

三度の六斎念仏が終了した十九時過ぎから、法界寺を出て檀家回りがはじまる。六斎念仏の檀家回りは本来、中村地区の法界寺の檀家全ての家を回り、新盆の家では仏間で六斎念仏を行い、それ以外の家では玄関先で略式の念仏を唱えたというが、現在は新盆を迎えた檀家のみを訪ねることになっている。

昭和五〇年代後半頃に、六斎念仏を厚く興隆する方がおられ、子どもたちもたくさん集まって、行列をつくって盛大に檀家回りが行われた時期もあったという。

取材した平成二六年のお盆の檀家回りは七戸を回って終了した。それでも午後九時をまわっていた。

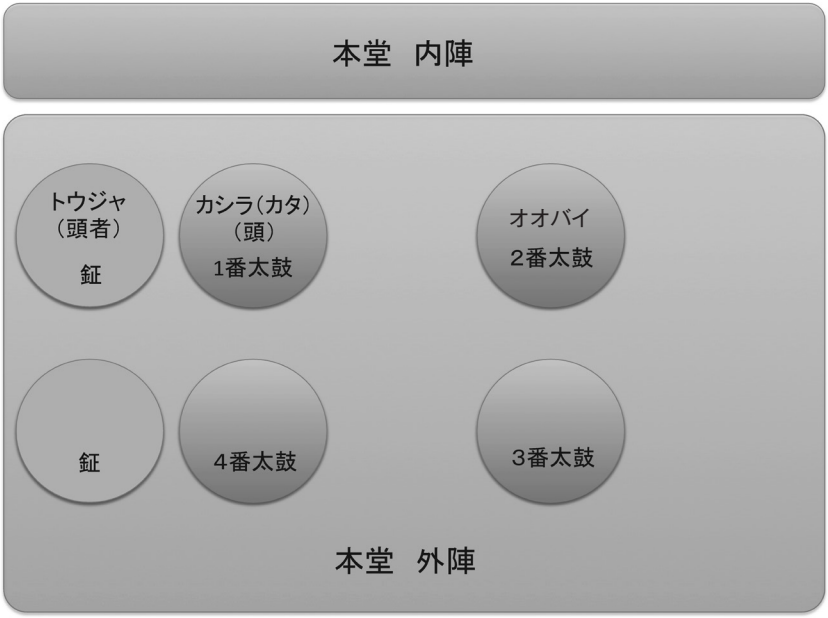


図１　真野法界寺の六斎念仏

写真６：第２グループによる六斎念仏　本堂内陣前を少しずらして行う

写真２：江戸期文政年間につくられたという太鼓

写真７：本堂前で第３グループによる六斎念仏　奥が法界寺観音堂

写真３：鉦（かね）

写真８：檀家回り　新盆の家の前

写真４：本堂内陣前で六斎念仏がはじまる

写真９：檀家回り　新盆の家の仏間で六斎念仏

写真５：太鼓の節回しがはじまる　奥の内陣にご本尊の阿弥陀如来立像

写真12：檀家回り　新盆の家２軒目の仏間にて　第２グループが担当

写真10：檀家回り　新盆の家の玄関先

写真11：行列の先頭を行く法界寺の提灯

三、六斎念仏の真野中村における役割と課題（むすびに変えて）

真野中村地区の中でも、旧集落で組織される中村会は、この六斎念仏を行う念仏講の他にも、伊勢講、愛宕講、汁講など、複数の講が存在し、集落の年中行事として運営している。また、十人衆と呼ばれるいわゆる長老格の集団が存在し、そこに入るための「入供（いりく）」という儀式も残っているという。

この中村集落は、冒頭でも紹介したが、ＪＲ堅田駅から山手に一〇分程度歩いたところにあり、新興住宅やマンションに隣接しているのである。神や仏の存在が薄れている現代の生活のすぐ隣に、このように深い信仰と自然に包まれて暮らす集落があるということは驚きである。

都市化した現代の暮らしは、社会の新しい仕組みによって集団が分断され孤立化している。隣人に頼らなくとも生活ができるという煩わしさが無い反面、地縁的な横のつながりが希薄で、家族が孤立し、地域教育や福祉問題等も現代社会の弊害として指摘されている。また、災害時などにそのつながりの弱さが露呈し、地縁的なコミュニティの必要性が各地で訴えられているのである。

そういう意味でこの中村会は、非常に深い地縁・血縁的コミュニティを形成しているといえる。年間を通じて定期的に行われる講の行事や、六斎念仏は、神仏を核としながら世代を超えて

地域の人々を繋いでいる理想のコミュニティであると言える。

しかし、少子高齢化という現実を迎えている中村会では、各行事の省略や簡素化も進んでいるようである。実際に難しい節回しの鉦と太鼓を扱う六斎念仏の継承者不足は、大きな地域の悩みとなっている。新興住宅地との交流は深まりつつあるようだが、信仰上の問題や、山林等の共有財産があるため、安易に旧集落の集団に入ることはできない現実がある。

ただ、六斎念仏の継承については、宗教行事であるとともに無形文化財であるという側面をもっているため、伝統芸能の継承という意味では、広く担い手を募っても良いのではないかという動きもあるようである。

地域の人々が、その地域の自然や業も含めて良さを認識し、今に残された貴重な仕組みを継承してくことは大変重要である。人口減少社会を控えて、次代を担う子どもたちや若い人たちが、もっと地域に眼を向けるような新たな価値観を見つけ出すことが求められている。

六斎念仏は、中村地区にとって、先人が伝え残してきた貴重な宝であろう。このような古き良き慣習を現代に活かす智慧が今必要とされている。

謝辞：

今回の調査では、真野中村会の瀬津春夫様、森秀俊様、真野法界寺の安藤隆文住職様、その他、真野中村集落の皆様に多大なご協力をいただきました。貴重な伝統文化を継承するため、また、地縁的コミュニティを持続するために努力されている皆さんの姿を見聞する貴重な機会をいただきましたことに、紙面をお借りして厚く御礼申しあげます。

参考文献

・関山和夫『仏教と民間芸能』（白水社　一九八二年）
・大森恵子『念仏芸能と御霊信仰』（名著出版　一九九二年）
・加藤賢治「村座と祭礼―滋賀県大津市仰木地区の例―」（近江地方史研究第四四号　二〇一〇年）
・加藤賢治「宮座の祭礼～今堅田に伝わる祭礼　野神祭りに見られる現状～」（成安造形大学附属近江学研究所紀要1号　二〇一二年）
・加藤賢治「古式祭礼に見るコミュニティとそこに展開するコミュニケーション―大津市今堅田一丁目の愛宕講と地蔵講を中心に―」（成安造形大学附属近江学研究所紀要3号　二〇一四年）
・大津市史編纂室　新修大津市史第七巻「北部地域」真野

執筆者一覧（掲載順）

福家 俊彦　天台寺門宗総本山三井寺執事長　附属近江学研究所客員研究員研究員

水本 邦彦　京都府立大学名誉教授　長浜バイオ大学名誉教授
附属近江学研究所客員研究員

永江 弘之　成安造形大学准教授　附属近江学研究所研究員

大原　歩　附属近江学研究所研究員

吉村 俊昭　成安造形大学教授　附属近江学研究所研究員

石川　亮　美術家　附属近江学研究所研究員

加藤 賢治　附属近江学研究所研究員

※掲載は、客員研究員（五十音順）、近江学研究、学内研究員（五十音順）の順。

編集後記

客員研究員の方から二編の研究報告をいただきました。福家俊彦客員研究員の三井寺と町田久成とアーネスト・F・フェノロサの関係や明治初期の日本の方向、日本人のあり方が日本画の世界にも共鳴していること。政治経済、仏教の世界、新しい時代を向かえまさに混迷と創造の時代の証言が資料から読み取れ、人との繋がりの大切さを知る。水本邦彦客員研究員は「堀田家記録」「伊豆神社蔵文書」による百姓側勝訴と、領地運営を担う在所役人やそれに準ずる人々が敗訴という、江戸後期と時を越えて共鳴する痛快時代劇を想起させてたのしい。

永江・大原研究員の生活文化の聞き取り調査を仰木ふるさとカルタ制作という形を通して伝承していくことの大切さの報告後編。吉村研究員は奉納された絵馬の調査報告第二回。石川研究員は「湖国と文化」と「近江学紀要」に精力的に調査した報告を寄稿。加藤研究員の連綿と続く旧集落の伝承行事が人々と土地との関わりを残し、コミュニティのあり方を考察する。多方面にわたる研究成果をいただきまして、御礼申し上げます。

編集担当　西久松　吉雄

成安造形大学附属近江学研究所紀要　第５号

発行日　平成28年３月24日

発　行　学校法人京都成安学園　成安造形大学　附属近江学研究所
〒520-0248　滋賀県大津市仰木の里東４-３-１
電話　077-574-2118

発行者　木村 至宏

編　集　成安造形大学附属近江学研究所

印刷所　宮川印刷株式会社

©Seian University of Art and Design 2016

ISSN 2186-6937